男女共同参画委員会報告書
（平成28年度）

平成 29 年 3 月

東北大学男女共同参画委員会

男女共同参画委員会報告書（平成28年度）

平成29年3月

東北大学男女共同参画委員会

目　次

第１章　平成 28 年度東北大学男女共同参画委員会活動報告

１　委員長報告 …… 1

２　東北大学における男女共同参画推進のための行動指針 …… 3

第２章　杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業(H28～H33) …… 5

第３章　各ワーキンググループ（以下、「WG」という。）の活動報告

- 広報・シンポジウム WG …… 6
- 奨励制度 WG …… 7
- 次世代・女性研究者支援 WG …… 10
- 両立支援 WG …… 12
- 行動指針対応・報告書作成 WG …… 14

第４章　各部局の取組

- 文学研究科 …… 17
- 教育学研究科 …… 18
- 法学研究科 …… 18
- 経済学研究科 …… 19
- 理学研究科 …… 20
- 医学系研究科 …… 21
- 歯学研究科 …… 22
- 薬学研究科 …… 23
- 工学研究科 …… 24
- 農学研究科 …… 28
- 国際文化研究科 …… 29
- 情報科学研究科 …… 30
- 生命科学研究科 …… 31
- 環境科学研究科 …… 31
- 医工学研究科 …… 32
- 教育情報学研究部・教育部 …… 33
- 金属材料研究所 …… 33
- 加齢医学研究所 …… 34
- 流体科学研究所 …… 35
- 電気通信研究所 …… 36
- 多元物質科学研究所 …… 37
- 災害科学国際研究所 …… 38
- 東北アジア研究センター …… 39
- 病院 …… 41
- 高度教養教育・学生支援機構（学生相談・特別支援センター） …… 42
- 本部事務機構 …… 42

第５章　行動指針、中期目標・中期計画達成のための各部局の取組

- 文学研究科……44
- 教育学研究科……45
- 法学研究科……46
- 経済学研究科……47
- 理学研究科……48
- 医学系研究科……49
- 歯学研究科……50
- 薬学研究科……51
- 工学研究科……52
- 農学研究科……53
- 国際文化研究科……54
- 情報科学研究科……55
- 生命科学研究科……56
- 環境科学研究科……58
- 医工学研究科……59
- 教育情報学研究部・教育部……60
- 金属材料研究所……61
- 加齢医学研究所……62
- 流体科学研究所……63
- 電気通信研究所……64
- 多元物質科学研究所……66
- 災害科学国際研究所……67
- 東北アジア研究センター……68
- 病院……69
- 高度教養教育・学生支援機構（学生相談・特別支援センター）……70
- 本部事務機構……71

第６章　男女共同参画推進センター及び杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の取組

- 男女共同参画推進センターの取組……72

第７章　平成 28 年度東北大学男女共同参画委員会

資料１　平成 28 年度東北大学男女共同参画委員会委員名簿及び委員会開催等記録……96

資料２　杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業リーフレット……101

資料３　平成 28 年度科学技術人材育成費補助金「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」選定結果通知書……107

資料４　第 13 回男女共同参画シンポジウムパンフレット……109

資料５　第 13 回男女共同参画シンポジウムでのアンケート集計結果……124

資料６　第 5 回仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業 公募要項等……126

資料７　第 3 回澤柳記念賞公募要項等……130

第１章　平成 28 年度東北大学男女共同参画委員会について

１　委員長報告

男女共同参画委員会委員長　　植木　俊哉

東北大学男女共同参画委員会は、平成 11 年 6 月の「男女共同参画社会基本法」施行と、平成 12 年 5 月の国立大学協会ワーキング・グループの報告を契機として、平成 13 年 4 月に設置されました。以来、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」の策定、男女共同参画に係る研究や取組を奨励する沢柳賞の創設などにより、本学における教職員の意識の醸成、学内保育施設の設置などによる仕事と育児・介護の両立支援策の充実を図ってまいりました。

平成 18 年度からは、男女共同参画の推進施策の充実及び、女性研究者支援のため「女性研究者育成支援推進室」を設置し、文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル事業」において採択された「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（平成 18 年から 3 年間）及び、同じく文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者養成システム改革加速」において採択された「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」（平成 21 年度から 5 年間）を実施してまいりました。

また、平成 25 年 8 月には、日本初の女子学生が本学に入学してから 100 年を迎えたことを記念して「男女共同参画推進のための行動指針」を策定し、今後 10 年の本学における男女共同参画推進のための指針として、1)両立支援・環境整備、2)女性リーダー育成、3)次世代育成、4)顕彰制度、5)地域連携、6)国際化対応、7)支援推進体制を掲げました。この行動指針に基づき、平成 26 年 4 月に、これまでの女性研究者育成支援推進室を発展的に改組した「男女共同参画推進センター」を設置し、本学全体の男女共同参画活動を推進しています。

さらに、平成 28 年度には、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されました。「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」と名付けられたこの事業では、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や、女性研究者の研究力向上のための取組、および上位職への積極採用に向けた取組を進めていくこととしております。

支援事業においては、国や地方自治体等の審議会委員、学会の理事等の要職に就き研究時間の確保が困難な女性研究者を支援する制度を新設し、世界で活躍できる女性リーダーの育成にも力を注ぎつつ、アカデミアにおける男女共同参画において多大な貢献をされた方々を選考し顕彰するために設立した澤柳記念賞においては、学外からの応募も増えるなど、着実にその認知度が高まっています。この活動の輪が広がることで、研究者が性別や育児・介護等様々なライフイベントの有無に関わらず活躍できる社会になることを期待しています。

加えて、今年で 13 回目となる男女共同参画シンポジウムは、「男性性を問う」をテーマとして開催し、本学におけるこれまでの取組状況を振り返りつつ、現代社会において男性はどのような「男性性」に絡めとられているか、既存の男性社会に変革の可能性はあるかを議論したところです。

本学では、これらの取組を支え、女性研究者のスキルアップやキャリアアップ、研究と育児の両立、次世代支援や学内保育環境の充実、伝統の継承等を行うことを目的に、東北大学特定基金の一つとして、男女共同参画推進基金を設立しております。

この基金の新設によって、支援する側も支援される側も一丸となって男女共同参画の推進に取り組み、長期に渡ってその流れを継続していきたいと考えます。

以上の詳細について、ぜひ本報告書をご覧いただき、本学における男女共同参画の取組や女性研究者の現状、そして男女共同参画推進センターの活動をご覧いただき、また忌憚なきご意見をお寄せいただければ幸いです。

２　男女共同参画推進のための行動指針

平成２５年８月８日

東北大学は、1913 年に日本で初めて女子学生３名の入学を許可した。その３名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001 年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」（2002 年）のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。

また、2003 年度に 21 世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008 年度にはその成果を発展させたグローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006 年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009 年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進（理論整備・活動支援）において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学 100 年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後 10 年間の行動指針として以下の７項目を策定する。

【両立支援・環境整備】

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

【女性リーダー育成】

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

【次世代育成】

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル（SA）活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

【顕彰制度】

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

【地域連携】

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

【国際化対応】

ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・

留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

【支援推進体制】

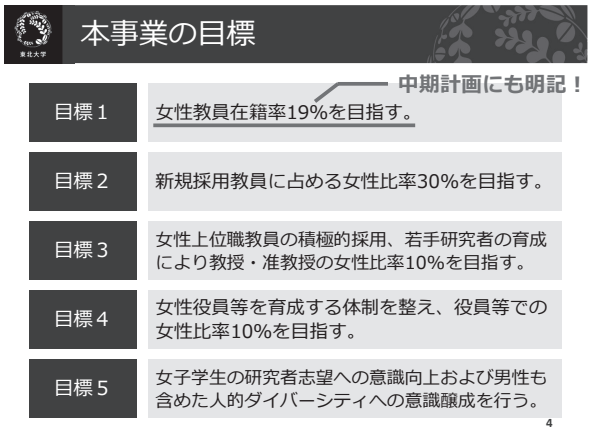
上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事（若しくは副学長）と総長特別補佐（男女共同参画担当）を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

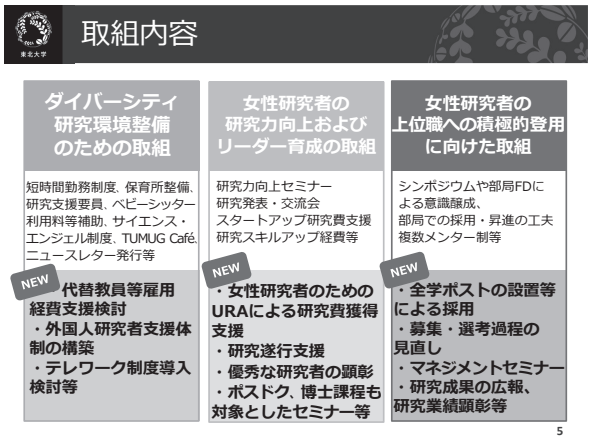
第２章　杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業（Ｈ２８～Ｈ３３）

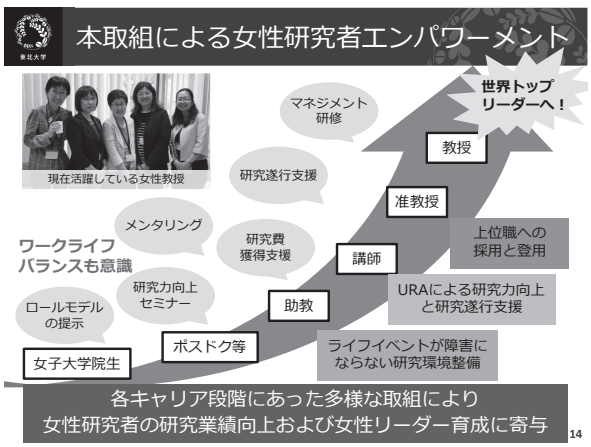
ダイバーシティ研究環境整備に向けた取組を行う本事業は、総括責任者である総長の下に組織する「女性研究者エンパワーメントタスクフォース（ＥＴＦ）」が中心となり、男女共同参画委員会および男女共同参画推進センター（ＴＵＭＵＧ）と一体となって行っているところである。本事業及び本学における男女共同参画の取組全体の妥当性および進捗状況については、外部有識者により構成されるアドバイザリーボードから専門的かつ中立的な助言を受けることになる。

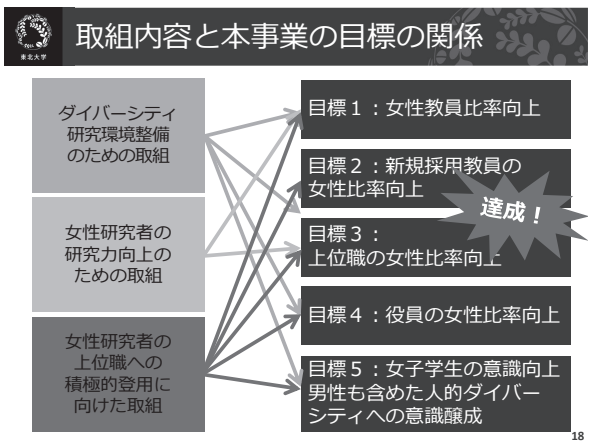
なお、本事業の目標や取組については、以下及び P101～P106 を参照していただきたい。

実施責任者　女性研究者エンパワーメントタスクフォース（ＥＴＦ）座長
大隅　典子









第３章　各ワーキンググループの活動報告

広報・シンポジウム WG

広報・シンポジウム WG は、委員として植木俊哉（委員長）、朝倉京子（WG 座長）、大隅典子（総長特別補佐）、永次史（多元研）、沼崎一郎（文学）、寺田眞浩（理学）、佐藤克美（教育情報）、柳田賢二（東北アジア）、齋藤仁（総務企画部）の男 6 名、女 3 名の計 9 名で構成されている。本年度は第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウムに関する活動を行った。

第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウムは「男性性を問う」とのテーマで、平成 29 年 1 月 29 日（日）13:00～17:00 に、星陵キャンパス医学部開設百周年記念ホール（星陵オーディトリアム）にて開催した。

シンポジウムでははじめに、里見進総長による開会の挨拶の後、ご来賓としてお招きした内閣府男女共同参画局推進課課長補佐　宗近美佐子氏よりご挨拶をいただいた。第一部では、第 3 回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）授賞式を執り行った。引き続き、A賞（本賞）を受賞された名古屋大学男女共同参画室室長　東村博子氏（代理：名古屋大学男女共同参画室准教授　三枝麻由美氏)による受賞講演が行われた。さらに、男女共同参画委員会副委員長の田中真美氏、総長特別補佐並びに男女共同参画委員会委員の大隅典子氏により、東北大学における男女共同参画の取り組みについて説明があった。

第二部では、特別講演を予定していた安冨歩氏が急遽、欠席となったため、プログラムを一部変更し「男性性を問う」という本シンポジウムのテーマに沿って 3 本の講演を行った。まず、武蔵大学社会学部社会学科助教の田中俊之氏により、「父親への期待の変化とその社会的背景」というテーマで講演が行われた。次に、関西大学社会学部教授の多賀太氏により、「男性にとっての男女共同参画の意義と課題」というテーマで講演が行われた。最後に、日本アイ・ビー・エム株式会社人事ダイバーシティ企画担当部長の梅田恵氏により、「Why Diversity ---個人と組織を強くするための戦略」というテーマで講演が行われた。その後、男女共同参画委員会広報・シンポジウムWG座長の朝倉京子氏のコーディネートで、講演を行った 3 名の講演者がパネリストとなってパネルディスカッションを行った。

最後に、男女共同参画委員会委員長の植木俊哉氏による講評と閉会の挨拶により、シンポジウムは盛会のうちに終了した。シンポジウムの合間には、研究スキルアップ経費の支援を受けた女性研究者によるポスター発表も行われた。

休日にも関わらず、シンポジウムの参加者は 157 名を数え、昨年の 113 名を大きく上回った。シンポジウム会場で回収したアンケートでは、すべてのプログラムに対し、7 割～9 割以上の方が「良かった」と回答する好結果が得られた。また、男性性を問うことの斬新さと意義を評価するコメントが多数寄せられた。急なプログラム変更のアクシデントにも関わらず、シンポジウムを盛会に終えられたことについて、講演者の方々並びに関係各位に感謝を申し上げる。

広報・シンポジウムWG開催状況

平成 28 年

7 月 5 日（火）15:30～17:00、片平キャンパス　本部棟 3 階　第一会議室にて、第一回目の広報・シンポジウムWG会議を開催した。議題は、「第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウムの開催について」であった。その後、必要に応じて、適宜メールにて会議を開催した。

広報・シンポジウムWG座長　　朝倉　京子

奨励制度 WG

奨励制度 WG は、石綿はる美（法学)、川崎亮（工学)、藤田恭子（国文)、福田光則（生命科学)、千葉奈津子（加齢研)、田中真美（医工学）の 6 名から構成されている。今年度は、男女共同参画に関する顕彰制度、澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）と仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業（旧ローズ支援事業）に関わる活動を行った。

活動状況

１．第 5 回仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業について、6 月 13 日まで公募を行ったところ、経済学研究科 1 件、医学系研究科 2 件、工学研究科 3 件、農学研究科 3 件、情報科学研究科 1 件、教育情報学研究部 1 件の合計 11 件の応募があり、6 月 28 日に WG で審査を行った。審査時には、公募要領の応募用件を満たす申請であるかを確認し、11 件すべてが審査対象となった。審査では、過去の海外での国際学会における発表回数と申請書の内容等を申請書から精査した。その結果、以下の２名に対し援助を行うこととした。なお、辞退が発生した場合に備え３名の補欠支援者も決定しておいた。7 月 14 日の本委員会へ報告を行い了承された。

・工学研究科 的場萌子
・医学系研究科 Aniko Karpati

2. 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）

① 5 月 10 日の本委員会にて要項、申請書などを提案した。資料7のとおりであり、7 月 29 日まで公募を実施した。

②7月 14 日の本委員会にて選考委員について本委員会委員長一任となり、以下のとおり決定した。

植木 俊哉 （選考委員会委員長、男女共同参画委員会委員長）
田中 真美 （医工学研究科教授、奨励制度WG座長）
福田 光則 （生命科学研究科教授、奨励制度WG）
佐竹 保子 （文学研究科教授、学内外部構成員）
藤田 恭子 （国際文化研究科教授、奨励制度WG）
山谷 知行 （研究推進本部特任教授、国際高等研究教育院長、学内外部構成員）
佐藤 理絵 （河北新報社夕刊編集部／論説委員会）
齋藤 仁 （総務企画部長、男女共同参画委員会）

③9月 15 日に選考委員会を開催した。応募は、A賞（本賞）:澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞4件、B賞（奨励賞）:澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞4件であった。審査表、応募書類等を事前に送付し事前に検討してきていただき、当日は応募のあったものについて慎重に選考し、A 賞 1 件を選出し、B 賞は該当なしと判断した。A賞について、9月22日（月）にHP等で結果を公表することとした。B 賞の 1 件は来年度にキャリーオーバーになることも確認した。

④選考結果

A賞:澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
課題名 「大学における男女共同参画推進事業のモデル化による国際的拠点化」

受賞者　名古屋大学男女共同参画室(グループでの応募)
B賞:該当なし
⑤12 月13 日に行なわれた本委員会にて②選考委員、③選考の経緯、及び④選考結果について報告し、承認された。

３．「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業に関連して、 女性研究者の上位職への積極的登用に向けた取組に関連して顕彰制度についても今後検討していくことを 12 月 13 日開催の本委員会で確認した。

奨励制度ＷＧ座長
田中　真美

＜仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の概要＞

2007(平成 19)年、本学創立 100 周年を記念して、国際理解と社会奉仕、女性の社会的地位向上を目指す団体「仙台Ｉゾンタクラブ」から、これからの社会を担う前途有為な人材への支援として、本学に在籍する大学院女子学生を対象とした支援金(名称:仙台Ｉゾンタクラブローズ支援金※)が贈呈されました。
男女共同参画委員会では、この支援金をもとに、世界で活躍できる女性の人材育成並びに本学における男女共同参画を推進することを目的として、女子大学院生が国際学会で研究発表を行う際の渡航費用を支援しています。

＜これまでの受賞者＞

	順位	部 局 名	氏 名
第 1 回	1 位	教育学研究科	苫米地 なつ帆
	2 位	薬学研究科	牧野 支保
第 2 回	1 位	環境科学研究科	久慈 千晶
	2 位	農学研究科	鈴木 はるか
第 3 回	1 位	医工学研究科	塩谷 真帆
	2 位	医学系研究科	久保 有美子
第 4 回	1 位	理学研究科・多元物質科学研究所	菅井 祥加
	2 位	文学研究科	栗田 陽子
第 5 回	1 位	工学研究科	的場 萌子
	2 位	医学系研究科	Aniko Karpati

＜澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)の概要＞

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎により打ち出された「門戸開放」という理念のもと、1913 年(大正 2 年)に全国に先駆けて女子に帝国大学の門戸を開きました。
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(通称:澤柳記念賞)はこの初代総長の名前にちなんでおり、男女共同参画社会を目指す活発な取組の一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆けとして各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰しています。

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

受賞回	年度	課題名	受賞者(団体)氏名	受賞理由
第3回	平成28年度	大学における男女共同参画推進事業のモデル化による国際的拠点化	名古屋大学 男女共同参画室	同大学は国連ウィメンにより女性活躍を推進する「世界のトップ10大学」として国内で唯一選出されるなど、「男女共同参画を推進する大学」として高く認知されており、これまで行ってきたポジティブアクション、産学官連携による男女共同参画の推進、女性リーダー育成プログラムなどの先覚的な取組が、日本に留まらず国際的に評価されていることから。
第2回	平成27年度	日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動	日本大学 薬学部・薬学研究所 上席研究員 大坪久子氏	同氏は理系分野における女性研究者の先達として、所属する大学の環境整備や学会での提言等、男女共同参画の推進に精力的に取り組んできており、こうした取組が政府による女性研究者の支援事業の創設につながるなど、日本における女性研究者の研究環境の改善に大いに貢献してきたほか、日本の理工系女性研究者が置かれている現状を国際的に発信し、著名な科学雑誌に取り上げられるなど、国内外を通じて数多くの業績を有していることから。
第1回	平成26年度	日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について	明治大学 法科大学院 教授 辻村みよ子氏	同氏は憲法学・ジェンダー法学を代表する学者の一人として、東北大学における男女共同参画実現に向けての礎を築いており、21世紀COEプログラム、グローバルCOEプログラムの拠点リーダーや、内閣府男女共同参画会議・専門調査会委員等を歴任し、学内外に研究成果や政策提言を発信しながら日本の男女共同参画社会推進を牽引してきたことから。

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

受賞回	年度	課題名	受賞者(団体)氏名	受賞理由
第3回	平成28年度	該当なし	該当なし	該当なし
第2回	平成27年度	“新大Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育	新大Wits (しんだいうぃつ)	同グループは、中高生を対象として、大学院生による文理融合型の出前授業を積極的に行い、次世代の女性研究者の増加・活躍を促進するとともに、男性も含めた研究者全体の男女共同参画意識の醸成を図っているほか、出前授業の実施に留まらず、この効果等を科学的に分析し改善を図っていることから。(※新大Witsは、サイエンス・セミナー(出前授業)を行っている新潟大学大学院生の愛称)
第1回	平成26年度	東北大学サイエンス・エンジェル(SA)修了生による男女共同参画推進の取組み	SA輝友会(エスエーきゆうかい)	同団体は東北大学サイエンス・エンジェルであった大学院修了生を中心とする自主的な活動団体として、修了後も研究分野や職種を超えて交流を続けている。自ら科学イベント等の企画を行うほか、現役学生のSA活動や進路に関するアドバイスを行うなど、ロールモデルとしても貴重な役割を果たしていることから。

次世代・女性研究者支援 WG

次世代・女性研究者支援 WG は、米永一郎（金研）、田中真美（医工学）、大隅　典子（医学）、工藤与志文（教育）、寺田眞浩（理学）、高橋信行（薬学）、保坂雅子（TUMUG）の計 7 名から構成されている。本年度は前年度の支援内容を検討し、両立支援、女性リーダー育成、次世代育成に区分し、TUMUG 支援事業として開始した。なお、一部支援ではより利用しやすい支援に向けた改定を行った。さらに、それらに加えて、10 月より本学での杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の開始に伴う 4 件の支援制度の追加を行った。各事業の概略とそれぞれの利用者数を下表に示す。次年度もこれら 11 件の支援事業が予定されている。

	プログラム名	内容	対象者	募集締切
両立支援				
1	**研究支援要員**	A 型：　研究支援要員雇用のために必要な人件費の補助（上限 100 万円） B 型：　大学から事務補佐員を派遣（週 1〜2 日）	出産・育児・介護を行う教員・技術職員（全部局の男女）	H28.2.15.
2	**ベビーシッター利用料補助等**	研究、講義、主張時のベビーシッター利用料等の補助(上限 5 万円/半期)	育児を行う教員、技術職員、ポスドク、博士学生等（全部局の男女）	前期 H28.2.15. 後期 H28.9.15.
女性リーダー育成				
3	**リーダー研究支援要員**	大学から事務補佐員を派遣（週 1〜2 日）	国の審議会委員等の要職に就く女性教員・技術職員	H28.2.15.
4	**スタートアップ研究費**	1 年目 100 万円、2 年目 50 万円の研究費の支援	新規採用の女性教員（助教以上）	H28.7.11.
5	**研究スキルアップ経費**	会議・シンポジウム等の旅費支援 開催地が海外：上限 30 万円 国内：上限 15 万円	女性教員（准教授、講師、助教）	前期 H28.4.11. 後期 H28.10.21.
次世代育成				
6	**東北大学サイエンス・エンジェル**	高校等での出張セミナー、オープンキャンパス、科学イベント等の企画・実施	自然科学系部局に所属する大学院女子学生	第 1 次（在学生） H28.3.22. 第 2 次（新入生） H28.5.2.
7	**仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援**	海外で開催される会議・シンポジウム等の旅費支援（上限 15 万円）	大学院女子学生（全学）	H28.6.13.

杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業に係る新規支援事業

	プログラム名	内容	対象者	募集締切
両立支援				
8	**研究支援要員**	C 型： 博士後期課程院生をリサーチ・アシスタント(RA)ナイシアドミニストレイティブ・アシスタント(AA)として雇用のために必要な人件費の補助 （週 1～2 日）	出産・育児・介護を行う女性教員・技術職員	H28.10.14.
女性リーダー育成				
9	**「科学研究費助成事業」フォローアップ**	科学研究費女性事業に応募したものの不採択となった研究課題について、当該研究費の一部を支援 （上限 50 万円）	女性教員、ポスドク（教育研究支援者など含）	H28.10. 14.
10	**国際学術論文作成のための英文校閲費用補助**	国際学術誌への論文投稿のための英文校閲費用を補助	女性教員（准教授、講師、助教、助手）	第 1 回 H28.10. 14. 第 2 回 H28.12.20.
上位職への積極的登用				
11	**ダイバーシティ研究環境実現のための部局等による取組支援プログラム**	部局がファカルティ・デベロップメント、セミナー等の取組支援を実施するにあたって、必要となる講師旅費、謝金等を支援 （15 万円程度）	全部局	H28.11.30.

各支援制度利用者数

	プログラム名	申請(名)	採択（名）				備考
			女性	男性	学生内数	計	
1	**研究支援要員 A 型**	12	11	1	−	12	
	研究支援要員 B 型	3	3	0	−	3	
2	**ベビーシッター利用料補助(前期)**	32	28	4	5	32	
	(後期)	26	24	2	5	26	
3	**リーダー研究支援要員**	4	4	−	−	4	
4	**スタートアップ研究費（1 年目）**	7	7	−	−	7	
	(2 年目)	継続	10	−	−	10	
5	**研究スキルアップ経費（前期）海外**	13	13	−	−	13	
	（前期）国内	8	8	−	−	8	
	（後期）海外	11	9	−	−	9	多数回不採択
	（後期）国内	6	6	−	−	6	

6	東北大学サイエンス・エンジェル（1次）	26	−	−	26	61	ボランティア7名含
	東北大学サイエンス・エンジェル（2次）	35	−	−	35		
7	仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援	11	−	−	2		
杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業に係る新規支援事業							
8	研究支援要員Ｃ型	4	4			4	
9	「科学研究費助成事業」フォローアップ	14	14			14	
10	国際学術論文作成のための英文校閲費用補助（1回）	11	11			11	内取消4名
	（2回）	10	10			10	
	ダイバーシティ研究環境実現のための部局等による取組支援プログラム	3 部局				3 部局	金研・通研・多元研

両立支援 WG

両立支援 WG は、田中真美（医工学）、工藤与志文（教育）、宮尾　光恵（農学）、藤田恭子（国文）、坂田邦子（情報）、上高原理暢（環境）、有働恵子（災害）、小宮敦樹（流体）、佐藤静香（高教）の 9 名から構成されている。12 月 13 日の本会議にて、保育園の整備計画について以下のように報告した。

①青葉山地区保育施設の新設

新設する青葉山厚生施設の 3 階を利用し、100 人規模の保育園を平成 30 年に開所する予定である。

②大学病院保育所の拡充移設

現在 26 人定員の大学病院保育所を、病院近くの八幡 1 丁目の敷地にて鉄筋コンクリート造 2 階建てを新設し、120 人規模の保育園とし、平成 30 年 4 月に開所する予定である。

両立支援ＷＧ座長
田中　真美

平成24年度～平成28年度川内けやき保育園利用状況

月	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
4月	24	30	28	29	29
5月	24	28	29	29	29
6月	23	28	30	29	29
7月	23	29	30	29	30
8月	25	30	30	30	29
9月	25	30	30	28	29
10月	26	30	30	28	30
11月	28	30	30	27	30
12月	28	30	30	27	27
1月	28	30	30	26	26
2月	28	30	30	26	26
3月	28	30	30	28	26
合計	310(16)	355(32)	357(40)	336(29)	340(5)

※合計欄の（ ）内は一時保育利用者数であり、外数。

月	平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	基本保育	一時保育	基本保育	一時保育	基本保育	一時保育	基本保育	一時保育	基本保育	一時保育
	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数
4月	24名	14名	24名	10名	24名	5名	24名	6名	24名	4名
5月	24名	7名	22名	9名	24名	4名	23名	4名	23名	4名
6月	25名	8名	21名	9名	25名	4名	25名	3名	23名	4名
7月	24名	8名	20名	9名	25名	3名	25名	3名	22名	4名
8月	24名	11名	20名	7名	25名	4名	25名	5名	23名	8名
9月	23名	11名	24名	6名	26名	5名	25名	6名	25名	4名
10月	23名	9名	23名	5名	25名	6名	24名	4名	24名	4名
11月	24名	12名	22名	3名	25名	5名	24名	5名	25名	6名
12月	22名	13名	24名	8名	24名	9名	24名	3名	27名	5名
1月	22名	12名	24名	2名	25名	5名	23名	5名	27名	5名
2月	22名	11名	25名	5名	26名	2名	23名	6名	27名	7名
3月	24名	9名	25名	6名	26名	4名	24名	2名	27名	－
合計	281名	125名	274名	79名	300名	56名	289名	52名	297名	55名

平成24年度～平成28年度病後児保育室利用状況

月	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
4月	37(11)	30(8)	37(8)	45(10)	31(9)
5月	37(9)	29(8)	57(13)	30(7)	44(8)
6月	30(5)	31(1)	65(14)	46(4)	50(18)
7月	47(6)	51(3)	65(7)	47(8)	35(11)
8月	62(10)	38(1)	52(2)	37(8)	45(18)
9月	38(11)	40(8)	51(8)	45(9)	36(15)
10月	30(5)	40(14)	46(10)	52(11)	27(13)
11月	31(3)	48(20)	34(3)	34(7)	31(13)
12月	26(4)	56(12)	45(6)	27(6)	31(16)
1月	19(2)	26(8)	22(2)	19(0)	18(5)
2月	27(4)	25(6)	47(9)	25(4)	13(11)
3月	24(2)	36(8)	54(12)	25(3)	－
計	408(72)	450(97)	575(94)	432(77)	361(127)

※利用人数の( )内は星陵地区外登録者の人数で、内数

行動指針対応・報告書作成 WG

1　活動報告

行動指針対応・報告書作成WGは、米永一郎（副委員長、金研）・川名洋（経済）・熊本裕行（歯学）・坂本修一（通研）・宮崎真理子（病院）・保坂雅子（TUMUG）・齋藤仁（総務企画部）・佐藤誠（人事）の計 8 名で構成されており、年次報告書の作成、行動指針対応のための取組と課題の検討などを任務とする。本男女共同参画委員会報告書は、平成 29 年 2 月末までに提出された各WG・各部局の原稿をとりまとめ、3 月において決定した。本年度（平成 28 年度）は、平成 25 年 8 月の女子学生百周年記念シンポジウムでの男女共同参画の推進に係る行動計画に基づく男女共同参画委員会-男女共同参画推進センター（TUMUG）の体制での第 3 年度として、さらに新規に開始された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」の下で、男女共同参画の推進、研究と育児の両立支援・女性研究者支援の各種の制度が実施された。

2　これまでの東北大学男女共同参画委員会活動

東北大学男女共同参画委員会は平成 13 年に発足し、翌 14 年の第 1 回男女共同参画シンポジウムにおける「男女共同参画推進のための東北大学宣言」にしたがって、学内外における男女共同参画の推進にかかる取組に優れた成果を挙げてきた。また、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル事業」での「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（平成 18～20 年度）、文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」事業（現：文部科学省科学技術人材育成補助事業）での「杜の都ジャンプアップ事業 for2013」（平成 21～25 年度）が実施され、高い評価結果を得た。また、本学独自に「女性研究者ハードリング支援事業」（平成 21～25 年度）を実施した。また 21 世紀 COE「男女共同参画社会の法と政策」（平成 15～19 年度）、GCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」（平成 20～24 年度）により男女共同参画推進政策や社会制度に関する学術研究が展開された。平成 25 年 8 月の女子学生入学百周年記念シンポジウムで総長より本学における男女共同参画推進のために、(1)両立支援･環境整備、(2)女性リーダー育成、(3)次世代育成、(4)顕彰制度、(5)地域連携、(6)国際化対応、(7)支援推進体制の行動指針が発表された。その指針に基づいて、これまでの女性研究者育成支援推進室が昨年度（平成 26 年 4 月）男女共同参画推進センター(TUMUG)に発展改組され、男女共同参画委員会での審議・決定事項に基づいて、各種の支援活動を中核的に行ってきた。本年度より文部科学省・科学技術人材養成費補助事業のダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）に採択された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」は (1)女性教員在籍率を中期計画の 19%、(2)新採用教員に占める女性比率 30%、(3)上位職への積極的採用による教授･准教授の女性比率 10%、(4)役員の女性比率 10%、(5)女子学生の研究職への志望の意識向上と男性を含めた人的ダイバーシティへの意識醸成を目標とし、ダイバーシティ研究環境整備、女性研究者の研究力向上とリーダー、上位職への積極的登用のための取組がアドバイザリーボードによる専門的かつ中立的助言の下で開始された。

3　本年度の活動概要

男女共同参画委員会各 WG の主導の下、各種の活動が展開された。平成 29 年 1 月 29 日第 13 回男女共同参画シンポジウム「男性生を問う」が開催され、男女共同参画意識の広報と醸成および現状の課題認識に関する情報共有が行われた(詳細は広報・シンポジウム WG 活動報告を参照)。

同シンポジウムにおいて、アカデミアでの男女共同参画への貢献を顕彰する第 3 回澤柳記念賞政太郎東北大学男女共同参画・参画奨励賞の授与が行われた(奨励制度 WG 活動報告)。両立支援・環境整備に向けて、第三保育施設の青葉山地下鉄駅付近での設置、また星陵地区星の子保育園の移設拡張が決定された(両立支援 WG 活動報告)。女性研究者支援では、これまでの各種支援制度の枠組みの見直しが行われ、(1)両立支援制度では研究支援要員 A 型、研究支援要員 B 型(シェア型)、ベビーシッター利用料等補助が行われ、それらは男性も利用可である。次に、(2)女性リーダー育成のためのリーダー研究支援要員、スタートアップ研究費、研究スキルアップ経費が、(3)次世代育成では、サイエンス・エンジェルの採用と女子学生海外渡航支援が行われた。そして、開始された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」に係る新規支援プログラムとして、研究支援要員 C 型、科学研究費助成事業フォローアップと国際学術論文作成のための英文校閲費補助、ダイバーシティ研究環境実現のための部局等による取組支援が加わった（利用者等は次世代・女性研究者支援 WG 活動報告）。

男女共同参画推進センター(TUMUG)は上記 WG 活動について支援を行い、特に 61 名のサイエンス・エンジェルがオープンキャンパス、片平まつり等各種のイベント、高校生向けセミナー等で活動するための中核機能を発揮した。また、両立支援、女性リーダー育成のための TUMUG Forum や TUMUG Café、沢柳フェローランチミーティングの企画・実施を行った。また定期的なニュースレター発行、エンパワーメント事業開始紹介を含めたリーフレット作成を進めた(詳細は男女共同参画推進センターの取組を参照)。またセンターは昨年度より復活したジェンダー関連学として、全学教育科目「ジェンダーと人間社会」の実施を主催した。

全学的な取組とともに、各部局・キャンパスでもそれぞれの特性を踏まえての、男女共同参画意識醸成や女性支援に向けた独自の活動が展開されるようになった。例えば、工学系研究科の工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)を中心とするセミナー開催、女性研究者出張経費支援、託児室・静養室の設置等、医学系研究科の医学系女子大学院生奨励賞（愛称：七星（ななせ）賞）の創設、星陵地区男女共同参画ネットワーク（SeiGN）構築、電気通信研究所、多元物質科学研究所等での男女共同参画セミナー開催、情報窓口の設置などである。工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)は内閣府女性のチャレンジ支援賞を受賞した。

このように、男女共同参画推進と女性研究者支援に向けて、全学・部局で広範な活動が展開されるようになった。その中で、男女共同参画の更なる推進のために、昨年度より東北大学特定基金として「男女共同参画推進基金」が設立されている。

4　課題と対策

本学では、これまでの男女共同参画に係る歴史やその意識醸成活動、制度改革などを背景に、教職員のジェンダー・バランスの改善を、ポジティブ・アクションや数値目標の設定を行わず、各部局の自主的取組として進めきた。しかし、女性教員比率の増加が他大学の状況と比較すると格段の促進が求められる状況となった（図 1)。また、国立大学協会の平成 28 年 10 月の報告では 86 大学中、本学は 75 位である。それを踏まえ、本学の第 3 期中期計画において、期間中（平成 33 年度)に「女性教員比率を 19%に引き上げることを目指した採用等の取組及び管理職等（課長補佐級以上）の女性職員比率を 15%に引き上げることを目指した育成等の取組を強化する」ことが制定された。

図 2 は今年度各部局から報告された女性教員比率について、ここ 3 年間の推移を示す。大部分の部局では着実に女性教員比率が増加しているが、一部部局において減少ないし停滞となってい

る。この状況を克服し、中期計画を達成することが課題であり、今年度開始された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」の最重要目標である。そのためには、現状に関する全学的な認識の共有の下で、本学における女性教員採用や転出に係る問題点の抽出と、他大学が進めている女性教員数を増加させるために取り組み事例を精査し、女性教員数の増加のための積極的な改善策を検討する必要に迫られている。具体的には、全学的な措置として女性教員の採用および上位職移行およびその財政的援助、部局独自プラン実施の奨励およびその財政的援助などが考えられる。これらの積極的な改善策の実施によって、課題を克服することが我が国ではじめて女子学生を入学させたという歴史を有する本学の使命であろう。

行動指針対応・報告書作成WG座長
米永　一郎

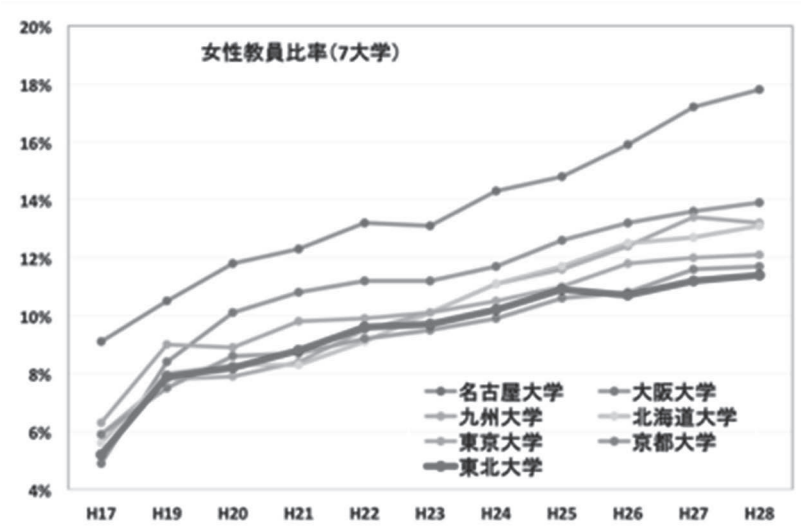


図 1

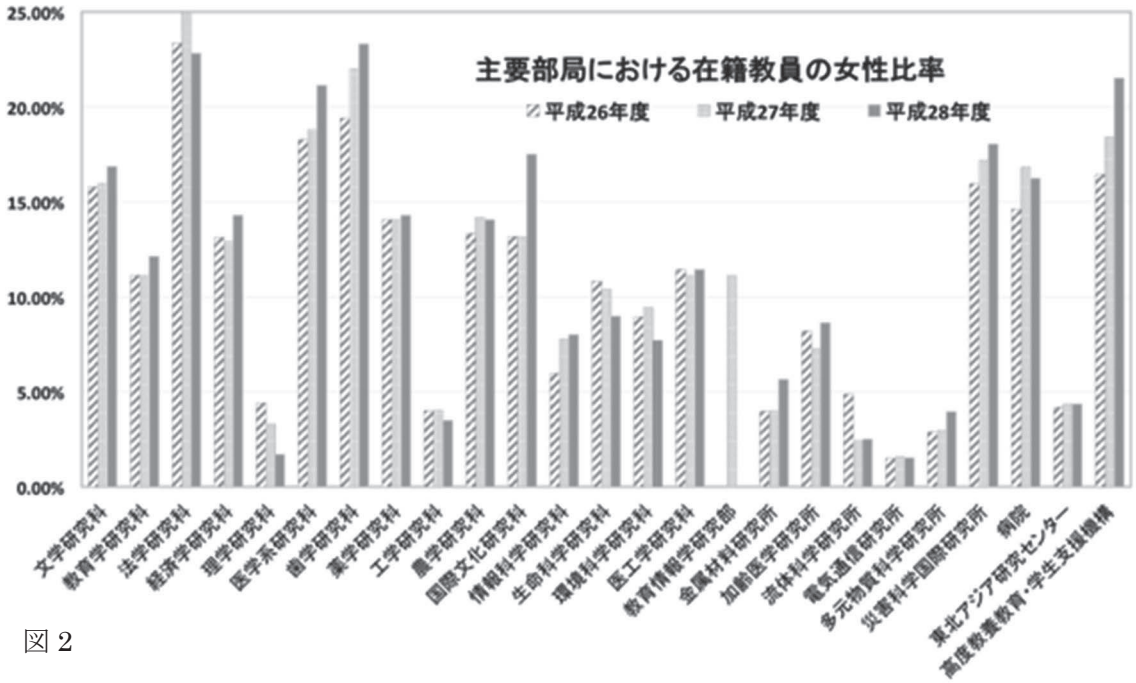


図 2

国立大学協会による男女共同参画推進の実施に係る調査より

４．各部局の取組

文学研究科

文学研究科男女共同参画推進ワーキング・グループは、沼崎一郎教授（座長）・土屋育子准教授・浅岡善治准教授の３名の委員（女性１名、男性２名）によって構成されており、全学の男女共同参画委員である沼崎一郎教授が WG の座長を兼任し、活動している。

開催状況

会議については、男女共同参画推進ワーキング・グループの委員間で必要に応じて、メール等で行う形をとっている。

活動内容

１　教職員や学生に対する男女共同参画活動への呼びかけ

男女共同参画シンポジウムへの参加、各種男女共同推進事業への応募等ついては、チラシ等を各専攻分野研究室に配布するとともに、主任教授へメール等で適宜呼びかけを行い、教員および大学院生・学生への周知を図っている。

２　大学院専攻分野・学部専修における学生の男女構成比の均等化へ向けて

文学研究科・文学部には２５の専攻分野・専修があるが、所属学生の男女構成比に違いが見られ、一部の専攻分野・専修では男性あるいは女性に大きく偏る傾向が続いている。今後どのように対応すべきか、引き続き検討を進めている。

３　東北大学における男女共同参画推進のための行動指針に関する検討

文学研究科として、どのような具体策を採ることができるか、引き続き検討を進めている。

４　デートＤＶ防止講座の開催

宮城県保健福祉部講師派遣事業の支援により、ＮＰＯ法人ハーティ仙台から八幡悦子氏を講師に迎え、文学研究科教職員・大学院生・学部生を対象とした講演会「デートＤＶ防止講座－自分だけは大丈夫と思っているあなたへ」を 2016 年 10 月 20 日に開催した。

部局長より

沼崎一郎教授を中心とする文学研究科男女共同参画推進ワーキング・グループが精力的に活動を行なっており、この問題に対する研究科構成員の意識は着実に高まっている。文学研究科としては引き続きこの活動を支援するとともに、優秀な女性教員を研究科の構成員として迎えたいと思っている。なお、この４月に新規採用となる５名の教員のうち、女性教員は２名である。

教育学研究科

教育学研究科男女共同参画推進委員会は、委員として工藤与志文（委員長）、深谷優子、熊谷龍一の男２名、女１名の計３名で構成されている。本年度は新規採用の女性研究者である吉田沙蘭准教授がスタートアップ研究費の支援を受け、本研究科の女性研究者のリーダーとして活躍する基盤をつくることができた。また、男女共同参画委員会の各種支援事業、シンポジウム等に関する情報提供を行った。なお、男女共同参画に関する意識改革・啓蒙を目的とした FD の企画を試みたが、委員会内で企画案がまとまらず、実現に至らなかった。

部局長より

研究科内の男女共同参加の推進のうち、女性教員比率をいかに高めるのかということが大切である。このため教員の公募に当たっては、東北大学及び教育学研究科として男女共同参画に取り組んでいることを周知している。今後の人事にあたっても、この趣旨を広報するとともに、適切な選抜を行うこととなる。

男女共同参画と関連して、セクシャルハラスメント、アカデミックハラスメントに関連する研修を毎年実施しているが、上述のように、男女共同参画をメインとする研修の実施は今後の課題である。

法学研究科

法学研究科における「東北大学における男女共同参画推進のためのワーキンググループ」は、 平田研究科長をはじめ男性 4 名、女性 1 名の計 5 名からなり、研究科における男女共同参画の状況及び男女共同参画推進の方策について検討することを任務とする。平成 20 年 6 月から平成 25 年 3 月まで、法学研究科を中心にグローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画 と多文化共生」が実施され、ジェンダー平等問題に取り組んできた。同プログラムは終了したものの、そこで培った知見を、研究・教育活動に活かすこと、また教職員及び学生が、学内外で男女共同参画活動へ参加することを積極的に推奨することを目的として活動している。 また、法科大学院等で「ジェンダーと法」などの科目を開講しており、今後も引き続き男女共同参画の推進に向けて積極的に取り組むことを目指している。

開催状況

ワーキンググループの会合自体は開催されていないが、男女共同参画推進のための目標の作成の際など、必要に応じてメール等で審議・意見交換を行っている。

ジェンダー学関連科目の開講

法科大学院・公共政策大学院「ジェンダーと法」（演習）：糠塚康江教授（前期）

また水野紀子教授が宮城県男女共同参画審議会会長、せんだい男女共同参画財団評議員を勤めるなど、スタッフによる大学外での男女共同参画活動への活動も活発である。

部局長より

法学研究科は本学の全部局の中でもとりわけ高い女性教員比率を維持しており、産休・育休などの取得（平成 29 年 1 月現在、女性教員が 1 名、2 月より男性教員が 1 名、育休を取得中もしくは取得の予定である）や、休業時における他の教員による授業の分担など、育児・介護環境の改善に努めている。管理職への女性の登用も順調に進んでおり（平成 28 年度において、副研究科長 2 名中 1 名が、法科大学院の副院長は 2 名ともに女性)、今後も女性教員の採用、管理職への登用を積極的に推進していく。

経済学研究科

経済学研究科の男女共同参画ＷＧは、委員長の増田教授と２名の委員、猿渡教授、川名教授の計３名（男性２名、女性１名）で構成されている。本年度に関する報告は以下の通りである。

○委員会等の開催状況

本ＷＧでは、男女共同参画にかかわる問題等について随時メール等を用い審議・意見交換を行うとともに、必要に応じてミーティングを開催するという機動的な体制で業務に臨んでいる。また、学内及び部局内各種委員会とも連携し、イベント開催の協力を行うなど、男女共同参画の達成に向け高い成果を上げることができるよう工夫を重ねている。

○活動記録

経済学研究科では男女共同参画に資する以下の活動を行った。

１ 各種の機関で専門委員を務めている。主なものは下記の通り。

① 石垣政裕講師

１）宮城県家庭教育支援チーム協議委員

２）父親の家庭教育参加を促進する「お父さんたちのネットワーク」の代表世話人として情報交換会を開いている。

３）子どもたちの生活習慣改善のための組織「早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城」の副委員長

４）家庭教育支援のための講演

2016 年 5 月　平成 28 年度第 1 回宮城県家庭教育支援チーム研修会　講師
「宮城県版親の学びのプログラム『親の道しるべ』」

2016 年 6 月　子育てサポーターリーダー研修会（石巻）
「父親の家庭教育参画」講師

2016 年 6 月　平成 28 年度父親の家庭教育参画支援事業（富谷町）
「今こそ出番だ！おやじたち」講師

2016 年 7 月　父親の家庭教育参画支援事業（名取）
「お父さんと遊ぼう！！親子で楽しむ遊びの楽校」コーディネーター

2016 年 12 月　子育てサポーターリーダ研修会（仙台）「地域活動プランの作成」講師

② 若林緑准教授
基盤研究 B「出産・育児が女性の就業に与える影響：性別選好・介護・家族関係の観点から」に関する分担研究者

③ 吉田浩教授
2016 年 6 月 17 日　リベラルアーツサロン第 41 回 にて講演（「男女共同参画の経済科学」～義務ではなく経済・経営戦略として考える男女共同参画～ ）
本学全学教育のオムニバス講義（「ジェンダーと人間」）において２回の授業（第１、第２セメスター各１回）を提供している。

④ 古谷豊准教授:
今年度の学内保育園（川内けやき保育園）保護者会においては，本人が会長をつとめている。

２ 研究科内において、育児と仕事の両立支援策を継続的かつ積極的に進めてきた。

現在、事務室職員（1 名）が平成 28 年 6 月より短時間勤務制度を利用して勤務している。
また、子の看護のための休暇（特別休暇）の制度（小学生未満の子の看護・病院受診や予防接種、健康診断等受けさせる際に取得できる）も、平成 28 年度に 6 名（事務室 4 名、助手 1 名、准教授 1 名）が利用している。

部局長より
経済学研究科におきましても、今後、男女共同参画というよりも多様性：ダイバーシティの観点からの施策は以前にも増して必要であると感じました。大学全体で集約的に検討すべき部分と、よりローカルに対処すべき部分との棲み分けは自ずからあるべしと拝察致しますが、女性教職員当事者の何を目標とすべきかについての問題意識や解決に向けてのアイデアを吸い上げるメカニズムが現状で充実しているとは言い難く、特に手を打つ必要を感じております。研究科内でも WG を中心に引き続き検討をしていきたいと思っております。

理学研究科

理学研究科男女共同参画推進委員会は、平成 14 年 9 月に設置された「男女共同参画推進 WG」を前身とし、平成 17 年 4 月から理学研究科の正式な委員会として発足し、組織的な取り組みを行っている。委員長は全学の「男女共同参画委員会」委員を兼ね、各委員は専攻教員各 2 名と事務・技術職員から成る 15 名（男 9 名、女 6 名：教員 10 名、事務職員 3 名、技術職員 2 名）のメンバーと、委員会内に設置した WG（セミナー企画、広報、女性院生支援、環境改善検討）の実務をサポートするオブザーバー2 名（男 1 名、女 1 名：教員 1 名、技術職員 1 名）から構成されている。

理学研究科男女共同参画推進委員会開催状況

今年度は委員会を開催せず、メールにより第 13 回男女共同参画シンポジウム平成 29 年 1 月 29 日(日)の案内と参加の依頼を行った。

活動内容

1　東北大学男女共同参画推進センターによりオープンキャンパスの企画の一つとして主催された下記の催しの広報ならびに運営を支援した。

・ 平成 28 年 7 月 27 日（水）12:00～13:30　28 日（木）12:00～13:30
オープンキャンパス for 女子高校生 2016
理学研究科・合同 A 棟 2 階 第 2 ならびに第 3 共通講義室（204 号室、205 号室）にて、前半は女子高校生向けに本学の教員ならびに大学院生（東北大学サイエンス・エンジェル）が研究を紹介。第二部では昼食を取りながら女子高校生と東北大学サイエンス・エンジェルとのグループトークによる進路相談会と若手女性研究者によるキャリア・研究紹介を実施した。

2　女性休憩室利用ガイダンス開催
理学研究科・合同 A 棟 3 階 303 号室において女性休憩室利用説明会および利用者登録を実施した。

・ 第 1 回：平成 28 年 4 月 22 日（金）12:20-13:00　参加者 38 名。
・ 第 2 回：平成 28 年 4 月 28 日（木）12:20-13:00　参加者 30 名。
・ 第 3 回：平成 28 年 10 月 26 日（水）12:20-13:00　参加者 9 名。
・ 第 4 回：平成 28 年 10 月 28 日（金）12:20-13:00　参加者 7 名。
※現登録者数 97 名（留学生・外国人研究員 14 名を含む）

部局長より

理学研究科では、女性教員の比率は極めて低い。承継ポスト枠で女性教員を採用した場合にはスタートアップ経費を措置する制度を設けて、女性教員の増加に向けた取組をしているが、その効果は限定的である。この問題に対して抜本的な解決を図ることは容易ではないが、母集団を増やすという意味において、女子大学院生からアカデミックを志望する院生を増やすように努力することも重要であると考えている。

医学系研究科

医学系研究科男女共同参画推進委員会は、委員として朝倉京子（委員長）、大隅典子（男女共同参画担当総長特別補佐）、青木洋子、石井恵子、伊藤潔、北本哲之、木村芳孝、佐藤敬浩（総務課長）の男性 4 名、女性 4 名の計 8 名で構成されている。

男女共同参画推進委員会開催状況

平成 28 年

今年度の活動方針、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）の募集要項の改訂作業、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）第二回受賞候補者の審査、第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウムの案内と動員依頼のため、メールにて

複数回の会議を実施した。

平成 29 年

2 月 27 日　東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）の受賞候補者を決定するため、会議を実施した。

活動内容

1　東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）第一回受賞者の授賞式および受賞講演会の開催

平成 28 年 5 月 21 日に開催された東北大学艮陵同窓会総会にて、東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）の第一回受賞者（平成 27 年度受賞者）3 名の授賞式を執り行った。続いて、1 名の最優秀者による受賞記念講演会を開催した。授賞式並びに受賞記念講演会の様子は、河北新報を始めとする各種メディアで報道された。

2　東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）の募集要項の改訂作業

東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）の募集要項について、応募者の多様な専門分野の業績審査に耐えうる書式への改訂、応募者自身による自己アピール書の追加、その他、事務的な改訂を行った。

3　東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）平成 28 年度受賞者の審査並びに受賞候補者の決定

東北大学大学院医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）について、平成 28 年度の受賞候補者を決定するために審査を実施し、合議にて受賞候補者を決定した。受賞者は、平成 29 年 3 月の医学系研究科教授会にて審議し決定する予定である。

部局長より

医学系研究科の女性教員在籍率（平成 28 年度）は 22%であり、東北大学における女性教員在籍率の中期目標（19%）を既に達成している。引き続き、女性研究者の活躍の推進と、女性教員の積極的採用及び幹部職への積極的登用に努める。

歯学研究科

歯学研究科・歯学部男女共同参画 WG は、委員として熊本裕行（委員長）および歯学研究科、大学病院歯科部門、歯科技工士学校から選出された男性 1 名、女性 5 名の計 7 名で構成されている。本年度、男女共同参画に寄与する活動として、下記をセミナーの企画ならびに運営を行った。

活動内容

1　フォーラムの開催

1)　平成 28 年 12 月 15 日に、PMDA 審査専門員の森友理恵先生をお招きし、「女性歯科医師のキャリアパスについて」の講演を頂き、女性の社会進出･ワークバランスの取り方などについての提言を受けた。

2) 平成 29 年 2 月 9 日に、厚労省歯科保健専門官の高田淳子先生(本学 33 回生)をお招きし、「歯科保健施策の動向について」の講演を頂き、女性歯科医師の活躍についての提案を受ける予定である。

部局長より

歯学部は、学生の男女比率においても女性比が約 40%と高く、これを反映して歯学研究科の教員の女性比率も 24%（平成 28 年度）と他部局と比較し高い。すなわち女性が既に活躍している部局でもある。しかしながら、講師・准教授・教授における女性比率となると現在のところ 5%（平成 28 年度）とそれほど高くはない。任用に関する条件等で性別を考慮しているわけではないので、キャリアアップを支援する体制の整備が必要であるものと感じている。すなわち、妊娠、出産を機に教育職・研究職から離れる女性教員が多いことも事実である。この要因は、男女を問わず、歯学独特の学生個々を対象とした教育でのデユーティ、さらに臨床系においてはこれに加え、ほぼ毎日の日中の臨床業務があり、キャリアアップを図るうえで必要となる研究はどうしてもこれらの業務の合間、あるいは夜間に行わざるを得ない、という環境があげられる。効率的な時間の使い方、タイムシェアの考え方等を、積極的にとり入れ、女性がキャリアアップを図るための活動を、生活と両立できる環境整備を図っていくことが必要であると思われる。

薬学研究科

薬学研究科では、5 名の教員により男女共同参画推進委員会を運営し、うち１名が全学の男女共同参画委員を兼任している。本研究科における男女共同参画に関する活動は、事務職員の協力のもと、本委員会が中心となり実施している。なお、研究科の教授1名は、男女共同参画推進センターの協力教員も兼任している。

男女共同参画推進委員会開催状況

会議は定期教員会議の場あるいはメールを用いて、意見交換・情報提供を行う形をとっている。

活動内容

以下の取組を行うよう努めている。

１ 次世代の女性研究者・女性リーダー育成のため、日本薬学会や薬学部同窓会と連携しながら、薬学分野で活躍している女性研究者を招聘し、学生向けの講演会を行う。

２ 学生を対象とした東北大学サイエンス・エンジェル制度の説明会を開催し、学部生・大学院生の男女共同参画活動に対する意識の向上を図る。また、研究科内で現役東北大学サイエンス・エンジェルの講演会等を開催し、学生・教職員との交流を推進する。全学の男女共同参画委員会や男女共同参画推進センターの活動について教員会議で報告するとともに、メールで教職員へ周知した。

部局長より

日本薬学会や薬学部同窓会と連携し、薬学分野で活躍している女性研究者による、学生・教職員向けの講演会を行って、女性研究者・女性リーダーの育成に努める。

研究科からの東北大学サイエンス・エンジェルへの申請数をより増やすように、教職員からも、学部生・大学院生の男女共同参画活動に対する意識の向上を図るよう努めていく。

また、東北大学「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」に積極的な参加を推進する。

工学研究科

工学研究科等男女共同参画委員会は全学男女共同参画委員である川崎亮教授を委員長とし、教員 14 名（教授 10 名、准教授 4 名）と総務課長の計 15 名（男性 13 名、女性 2 名）で構成されている。

本年度は以下のように会議を開催し、ミニフォーラム「工学にかける私の夢」（東北大学工学部オープンキャンパス）を主催した。また、工学系男女共同参画委員会のもとに平成 25 年度より情報科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、災害科学国際研究所、未来技術共同研究センターおよび環境保全センターと連携して東北大学工学系研究科等女性研究者育成支援推進室（ALicE）を設置しており、①女子学生・女性研究者の育成・支援、②工学分野における男女共同参画意識の醸成、③女子学生が将来継続的に働く意識を高めるためのグランドデザインの策定の 3 項目を主目的として、各種活動を継続的に行っている。

これらの活動が学内にとどまらない工学系女性研究者の研究環境整備として評価され、平成 28 年度「女性のチャレンジ支援賞」（内閣府）を受賞した。

平成 28 年度「女性のチャレンジ支援賞」授与式（6 月 27 日　於 内閣総理大臣官邸）および表彰状・楯

工学研究科等男女共同参画委員会開催状況

平成 28 年

5 月 17 日

前期 STEP-ALICE プログラムへの 1 件の申請を受けて審議を行い、これを採択とした。オープンキャンパスで開催している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を今年度も開催することにし、講師の選定および広報等について審議した。また全学男女共同参画委員会の内容と ALicE の平成 26 年度決算と平成 27 年度予算（案）などについて報告が行われ、種々意見交換が行われた。

11 月 15 日

教員の異動に伴う委員変更の報告の後、「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」についての説明と、それを受けて各部局・系における女性教員比率向上のための方策や問題点、全学への要望事項について議論を行った。また、オープンキャンパスミニフォーラムおよび ALicE の平成 28 年度「女性のチャレンジ支援賞」受賞などについて報告が行われた。

12 月 6 日

（メール審議）前期 STEP-ALICE プログラムへの 2 件の申請を受けてメール審議を行い、これを採択とした。

活動内容

1　女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」の開催

東北大学工学研究科等男女共同参画委員会の主催により、例年、オープンキャンパス特別企画として女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を開催している。この企画は多くの女子学生に工学の魅力を伝え、進路選択の参考にしてもらうことを目的としている。本年 7 月 27 日、28 日に工学部中央棟２階の大会議室を会場として開催し、27 日は約 70 名、28 日は約 100 名の女子学生および保護者らが聴講した。フォーラムでは工学研究科等男女共同参画委員長による趣旨説明および ALicE による女子学生・女性研究者支援についての紹介に引き続き、工学部の女性教員および企業で活躍する女性卒業生による講演が行われた。講演者・講演タイトルについては次の通りである。

２７日：古川　幸　助教（都市・建築学専攻）
『大学（最後の学生生活）、そしてその後』
中嶋　有美　氏（東北電力株式会社　火力原子力本部　火力部）
『「よりそう」ための工学　～メンテナンスと運用の現場から～』
２８日：伊賀　由佳　准教授（流体科学研究所）
『液体ロケットエンジン・ターボポンプインデューサの研究
～下町ロケットを目指して～』
石田　華緒梨　氏（花王株式会社　加工・プロセス開発研究所）
『“よきモノづくり”をめざして　～私らしさとバイタリティ～』

講演に引き続き、工学部 5 学科に所属する女子学生がそれぞれの学科の特色やキャンパスライフを伝える『クロストーク』が行われた。各学科から修士 1～2 年の女子大学院生が 1 名ずつ登壇し、学科選択の理由や現在の研究内容、入学してから成長したこと、中高生へのメッセージなどを伝えた。

参加した女子学生・保護者からは「実際の大学生活について具体的なお話を聞くことができて良かった」、「受験に向けてモチベーションを上げることができました」、「とても楽しい時間でした。東北大学に入りたいと思えるよい機会でした」、「女子学生を積極的にサポートされていることを知り、親として安心しました」といった感想が寄せられた。

オープンキャンパスミニフォーラム「工学にかける私の夢」

2　工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）の活動

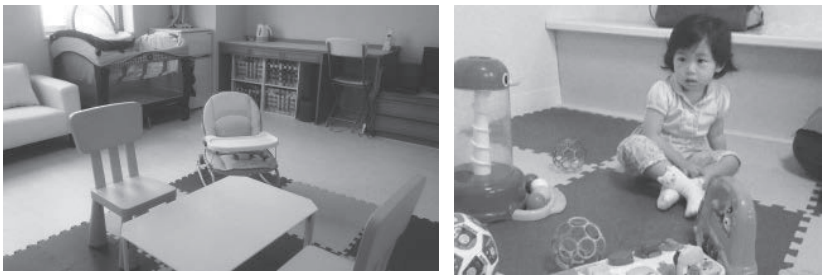
工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）では I. 研究活動の支援、II. 女性研究者の見える化・工学魅力の発信、III. 情報共有による問題解決、Ⅳ. ALicE の活動紹介について継続的に取り組んでいる。それぞれについて、平成 28 年度の活動内容を以下に示す。

I. 研究活動の支援

・　女性研究者の研究に係る出張経費を助成する『STEP-ALICE（Supporting Travel Expenses Program to Activate Lady’s International Collaboration in

Engineering）プログラム』を平成 26 年度から実施している。平成 28 年度前期は 1 名、後期は 2 名の女性研究者へ助成を行った。

- 育児期の女性教員や社会貢献を行う女性教員の研究との両立支援のため、事務補佐員の派遣を行っている。平成 28 年度は 3 名の女性教員を支援している。
- 工学系研究者（男女問わず）を対象とした、育児と研究の両立支援のための『工学系ベビーシッター利用料等補助』を平成 26 年度から実施している。平成 28 年度の申請は随時受付中である（他、全学支援制度に前後期合わせて 10 名採択）。
- 青葉記念会館内に一時託児や学会保育に利用が可能な保育室、および体調不良時や授乳・搾乳等に利用可能な静養室（男女）を設置しており、就学研究と育児の両立や安心して研究に取り組むための環境整備に取り組んでいる。平成 28 年 9 月には当該保育室を利用した学会一時託児が実施された。



託児室内部および学会一時託児の様子

II.　女性研究者の見える化・工学魅力の発信

- Web「宮城の新聞」とのコラボレーション連載として、下記 4 件の記事を掲載した。
  - ①　【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃014】東北大学工学部、女子高生向けに進路選択支援フォーラム開催［2016.09.09 掲載］
  - ②　【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃015】松八重一代さん（東北大学教授）に聞く／ポジティブシンキングが切り拓く「経済学×工学」の融合領域［2016.12.07 掲載］
  - ③　【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃016】工学部電気・情報系 OG の多様なキャリア知って／東北大学で「女性フォーラム」［2017.01.12 掲載］
  - ④　【東北大学 ALicE×宮城の新聞 ＃017】阿部博志さん（東北大学助教）に聞く／（育児と研究の両立）［掲載準備中］

Web「宮城の新聞」掲載記事

- 上記 Web 記事を編集した「宮城の新聞」紙媒体 50,000 部を発行し、全仙台市立中学校の生徒と仙台市内の高校 16 校の生徒全員に平成 29 年 2 月下旬～３月上旬にかけて配布予定である。

・ 工学系における女子大学院生の研究やライフスタイルを伝える座談会を開催し、その内容をまとめたリーフレット 8,500 部をを工学部オープンキャンパス来場者全員へ配布した。
・ 平成 28 年 7 月 17 日（日)、サイエンス・エンジェル、カタールサイエンスキャンパスと共同で、小中学生向け科学体験プログラム「ちくちく縫って LED が光るかわいい小物作り」を開催した。女子小中学生やその保護者を中心に、100 名が参加した。

工学系女子大学院生座談会記事（左）および科学体験プログラムの様子（中央・右）

III. 情報共有による問題解決

・ 女子女性学生･女性女子研究者や育児期の研究者へ Web やメーリングリストを通じ、保育情報や各種支援プログラムについて、日本語および英語での情報提供・共有を行っている。
・ 女子学生・女性研究者に関する問題対応への助言を行う「おはなし窓口」にて、各種相談･問い合わせをメールや電話、対面にて受け付けている (H28 年度:相談件数：15 件)。

IV. ALicE の活動紹介

・ ALicE の活動周知や次世代への工学の魅力発信のため、ALicE の Web において各種イベント報告や支援制度利用者の報告、女子学生・女性研究者の受賞等の活躍を紹介している。
・ ALicE 活動紹介リーフレットを更新し、工学系の各研究科長からの男女共同参画に関するコメントを掲載した。
・ 工学部・工学研究科の新入学生向けに入学ガイダンスにおいて ALicE の活動紹介リーフレットおよび『宮城の新聞』紙媒体を配布した。
・ 平成 28 年 7 月 13 日の工学部教授会において、田中真美 ALicE 室長が ALicE の活動および工学系の男女共同参画について報告を行った。
・ 平成 28 年 4 月および 10 月に開催された工学研究科等新規採用等教職員合同研修において田中真美 ALicE 室長が男女共同参画に関する講義を実施している。

ALicE 活動紹介リーフレット表紙および各研究科長からのメッセージ

部局長より

工学研究科では、関連する工学系部局との連携のもとに男女共同参画委員会を組織し、様々な取り組みを実施している。特に ALicE による活動は女性研究者支援の環境整備として高い評価を受けており、今後も一層の充実を図るところである。研究科としてはダイバーシティ教育・研究環境の実現を重視しており、多様な入試設計による入学者選抜のみならず、教員人事においても国籍やジェンダーを問わず、広く公募による任用選考を進めている。

他方、工学系博士課程への女子学生進学率の低迷を反映して、女性教員比率が低いのが実情である。学部や大学院博士前期課程の女子学生比率は増加の傾向にあるものの、博士後期課程への進学率向上にはつながっていない。工学系の女子学生在籍比率は他分野に比べ低く、この部分から要因の解析と対応を進めていかなければならない。啓蒙活動や広報等を通じて、女子学生にも積極的に工学分野の魅力発信に努めているところであるが、初等・中等教育課程での（未来の進路選択の）指導が重要でもあり、長期的視野に立って、今後の検討を進めていく所存である。

農学研究科

農学研究科男女共同参画委員会は、委員長（教員）、副委員長（教員）、３専攻それぞれから教員２名、技術部と事務部から各１名の合計１０名で構成されている。本年度の委員は、宮尾光恵（委員長）、冬木勝仁（副委員長）、本間香貴、伊藤絹子（資源生物科学専攻）、日出間志寿、石田宏幸（応用生命科学専攻）、磯貝惠美子、後藤知子（生物産業創成科学専攻）、伊東久美子（技術部）、千葉史朗（事務部）で、男性４名、女性６名である。委員の任期は２年であり、毎年５名が入れ替わる。本年度４月には、委員長を含む５名が新たに委員となった。

男女共同参画委員会開催状況

平成 28 年

5 月 12 日　男女共同参画委員会主催の講演会の開催経費の要求（メール審議）

6 月 24 日　第１回男女共同参画委員会開催

（１）本年度の活動予定

１）講演会開催の可否：キャンパス移転があることから、本年度は講演会を開催しないこととした。

２）FD 開催：農学研究科執行部に開催を要請することを決定した（3 月に開催予定）。

３）両立支援のための取り組み：

・求められる両立支援のあり方について意見交換を行った

・本年度青葉山新キャンパスに移転するが、29 年度１年間は青葉山キャンパスの保育室を利用できないことから、ベビーシッターの利用補助の拡大、保育料の一部補助等、支援の拡大を要請する必要があることを確認した。

・要請に先立って、農学研究科内のニーズを把握するため、全職員を対象にアンケート調査を行うこととした。

（２）女性教員比率増大のための問題点等、意見交換を行った。

活動内容

委員長が 4 月 1 日に東北大学に着任し状況がつかめなかったこと、10 月からキャンパス移転作業が始まったこと（移転完了は 29 年 3 月末）から、予定していた活動（アンケート調査）を行うことができなかった。しかし、6 月に男女共同参画委員会を開催し、直接意見交換することで、農学研究科としての活動方針を確認することができた。

今後は、本年度予定していた活動を可能な限り進める。また、本年度できなかった 4 月のオリエンテーションでの全学の取り組みの紹介等を実施したいと考えている。

部局長より

平成 28 年度は、農学研究科の青葉山新キャンパスへの移転があり、とくに 10 月以降男女共同参画の活動の上でも制約を受けている。しかし、男女共同参画委員会の活動は続けられてきており、年度内に男女共同参画をテーマとしたＦＤの開催を行う。これは、３年連続の実施である。

また、農学研究科の運営会議（執行部）では、女性教員の栄転（流出）が続いている事態を重く受け止め、女性教員減少に対する具体的な方策について話し合っている。例えば、大学本部が推進している「外国人教員雇用促進経費」を活用し、女性の外国人教員を指定して推薦するなどの具体策を練っていく必要性があることを改めて確認した。

国際文化研究科

国際文化研究科男女共同参画推進委員会は、委員長・副委員長を含めて 4 名（教授 1 名・准教授 3 名／女性 2 名・男性 2 名）で構成され、研究科の諸委員会・窓口と連携して男女共同参画に関連する教育・研究環境の整備に努めた。本委員会の開催状況ならびに本委員会の活動を含む国際文化研究科の活動内容は下記の通りである。

開催状況

平成 28 年第 1 回男女共同参画推進委員会

4 月 28 日　平成 27 年度からの引き継ぎ事項および平成 28 年度の活動計画について

以後、随時メール会議を開催した。

活動内容

1　男女共同参画推進委員会専用のメールアドレスを研究科内に周知することで、より相談しやすい環境を整えている。メールアドレスの管理は委員長が行っている。

2　研究科主催の新入生オリエンテーションにおいて男女共同参画にかかわる大学内および研究科内の状況を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかけた。また、男女共同参画推進委員会が相談窓口の機能を併せ持っていることも広報した。

3　平成 23 年度に設置した女性職員用休憩室（兼授乳室、必要な場合は学生の使用も可）に必要な備品等を購入し、ひきつづき整備に努めた。

4　国際交流・学生支援室にハラスメントならびに男女共同参画関係の書籍等を追加購入し、従来備え付けられていたものと合わせて、学生に利用を呼びかけている。

5　新任教員 2 名（妙木忍准教授・朱琳講師）が「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」による「スタートアップ研究費」の支援を得て、積極的に研究を進めている。

今後の取り組み

1　女性職員用休憩室（授乳等の必要のある女子学生も使用可）の一層の整備を図り、女性職員や女子学生がより安心して勤務や研究活動に従事できる環境の整備に取り組む。
2　研究科 FD では、今年度は「障害者差別解消法」の施行を踏まえてバリアフリー問題、また昨年度は科学研究費補助金の応募要件となった研究倫理に関する研修が必須となったが、今後は、一昨年までのような男女共同参画に関わる FD の開催も検討し、教職員・学生のさらなる意識向上を図る。
3　引き続き研究科の新入生オリエンテーション等において男女共同参画にかかわる研究科内の状況と活動を紹介し、男女共同参画に対する理解を呼びかける。
4　男女共同参画やハラスメントに関連する学生用書籍購入等の措置を続けるとともに、男女共同参画に関する研究科内の環境改善や意識向上のためのさらなる施策を検討する。
5　男女共同参画シンポジウムを初めとする全学的な活動に積極的に参加する。

部局長より

昨年末に開催された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」キックオフシンポに参加して、男女共同参画推進では自然なコンセンサスができるなどはある意味幻想に過ぎないこと、トップダウン型の意思決定もときには必要であることを痛感しました。本研究科では平成 27 年度の改組後、将来構想を見据えた戦略的人事を進めていますが、今後とも人材の多様性にも目配りした人事配置、採用を考えてゆきたいと考えます。

情報科学研究科

大学院情報科学研究科では、尾畑伸明（情報科学研究科長補佐）を委員長とした研究科運営検討委員会において全学の中期目標である男女職員数の格差是正のための制度に対して検討を行っている。また、具体的な事案の検討のため、徳山豪研究科長の他に教員４名と事務長の計６名で構成されている男女共同参画ＷＧが設置されている。

開催状況

運営検討委員会は、月 1 回程度を基本として開催している。平成 28 年度は、ＷＧは開催されていない。

活動内容

1. 教員公募時に当該研究領域における女性教員のサーベイを行うこととし、教員選考委員会においてその実施状況と女性応募者の有無などについての報告を義務付けている。また、女性教員の比率向上に関する施策の検討を引き続き行っており、外部の識者を交えた運営協議会や外部評価委員会から意見聴取を行い、対策を協議している。
2. 運営検討委員会では、男女共同参画に向けて研究科の環境整備の検討を行っている。
3. 東北大学サイエンス・エンジェル、澤柳記念賞への応募の呼びかけや男女共同参画関連の講演会やシンポジウムへの出席など、学生や教員への男女共同参画意識の啓蒙に努めている。

部局長より

情報科学研究科では、男女共同参画に向けて、教員の公募時のサーベイなどを行い、積極的に採用を目指している。また、女性休憩室の設置や、3 号館の女子トイレの整備などの環境整備は実施している。研究科の学際的な性質上、多様な分野を持ち、小講座が多く、またほぼ充足している状況のため、女性教員を組織的に増加する仕組みは現在作られていない。しかし、研究科全体での女性枠の確保を含めた対策の検討をおこない、今後も全学の目標に向けて、戦略的な取り組みを行うよう、努力を行う。

生命科学研究科

生命科学研究科男女共同参画委員会は、教員 3 名（うち 1 名は女性教員）で構成されている。 常時メールなどにて必要事項の連絡を行っている。今年度は以下の活動を行った。

活動内容

1　平成２８年 4 月 7 日(木):生命科学研究科新入生オリエンテーションにおいて、本学及び研究科の男女共同参画への取組などについて説明すると共に、東北大学サイエンス・エンジェルへの参加を呼びかけた。

2　平成２８年5月２１日(土):仙台市（片平キャンパス）において開催された生命科学研究科の入試説明会・ オープンラボにおいて、研究科の男女共同参画への取組などについて説明を行った。

3　東北大学サイエンス・エンジェル制度への積極的な応募及び第１３回東北大学男女共同参画シンポジウム（平成２９年1月２９日開催）への参加を呼びかけた。

部局長より

生命科学研究科では、研究科における教員の女性比率が大学の数値目標に比して極端に低いことから、今後、女性教員を積極的に増やすことを基本方針として、そのための環境整備を計る。また、今後の教員人事において、女性教員の採用に向け引き続き努力すると共に、少なくとも1名の女性を教授として採用するように努力したい。

環境科学研究科

環境科学研究科では、男女共同参画委員と研究科運営委員会が連携し、研究科内の男女共同参画意識の向上に取り組んでいる。

開催状況

工学研究科記載の通り。

活動内容

1　工学研究科等男女共同参画委員会を通した活動

研究科単独ではなく、工学研究科等男女共同参画委員会を通した活動を行っている。

2　男女共同参画に関するシンポジウム等の案内を行った。

部局長より

本研究科では、これまで 2 人の女性教授を採用してきており、平成 28 年 10 月現在、女性教員が研究科全体の 16%であり、積極的に採用を実施し、採用率の増加に貢献している。また、研究科独自に、産休等の取得する女性教員の代替教員制度も設けており、昨年度に 1 名が本制度を活用しており、本年度よりさらにもう 1 名の活用が予定されている。

本研究科の解決策として考えられることは、短期的成果は難しいが、女子学生の博士課程進学を促し、女性研究者の育成を積極的に行っていくべきと考える。

医工学研究科

1.医工学研究科では、平成25年度より設立された工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHｅ等と共同で「東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE」にて活動を行っている。ALicEに所属の部局と共同での工学系男女共同参画員会を開催し種々の問題について検討対応等をしている。ALicEや工学等男女共同参画委員会活動の詳細は工学研究科の欄を参照されたい。

2.独立行政法人科学技術振興機構(JST)主催のサイエンスリーダーズキャンプ「革新的な未来を拓く医工連携人材育成の現場」が8月17日から20日の3泊4日で、講義、実習、研究室訪問、研究施設見学、交流会・懇親会、グループ討論・総括が行われており、女性研究者育成支援の取り組みについて女性教員が講義で発表するだけでなく、最終日には4日間の活動で体得したこと、境界領域研究・次世代の研究開発人材育成・女子の理工系進路選択支援について知り得たこと、今後の理数教育に活かせる知見、方策などについて発表していただいている。また、このサイエンスリーダーズキャンプ自体を女性准教授が中心となって行っており、キャンプだけでなく、参加理科系高校教員へ女性研究者の活動を見せる機会となっており、男女共同参画の意識啓発を積極的に促すことにつながっている。

3.医工学研究科では、出前授業を行っているが、そのうち3回を各女性教員が担当し、高校生へのキャリアパスやロールモデルの提示につながっている。また、今年度は女性教員2名がオープンキャンパス時に、工学系のキャンパスにて講演を行っている。

部局長より

女性教員が様々なプロジェクトならびに部局運営において、リーダーシップを発揮する機会を増やし、環境を整備し、文化を醸成するマネジメントを進めていくことが肝要であると考える。機会は既存の活動の中での女性参加を促すこと、環境は新たな仕組みや制度により女性参加の機会を増やすこと、文化は機会や環境への取組みを当然と考える意識の変容にそれぞれ関わる。

教育情報学研究部・教育部

教育情報学研究部では、男女共同参画委員会は教授会構成員の内 1 名から構成されている。本研究部は現在(平成 28 年度)教授、准教授、助教合わせて 9 名の小規模な独立大学院であり、女性教員は創立当時から採用されていなかったが、平成 27 年度に女性教員を 1 名採用した(助教)。

今年度、教員募集（29 年 4 月採用）の機会があったが女性からの応募は無かった。今後も採用の機会があれば女性教員の採用を念頭に人選に取り組んでいきたい。

委員会開催状況と活動内容

研究部教授会において男女共同参画委員は以下のような活動を行った。

1 男女共同参画委員会の活動、および他部局の取り組みを報告した。

2 男女共同参画に関連するシンポジウムなどの活動への参加を促した。

現在、教育情報学教育部は現在(平成 28 年度)博士前期課程 27 名、後期課程 24 名が在籍しており、そのうち各 78%、33%が女子学生である。そこで、女性教員を学生相談担当とし、特に前期課程の女子学生が気軽に相談できるような体制を充実させている。

教育情報学はまだ新しい領域であるため、教育情報学教育部では長期的な視野に立ち、女性研究者、女性専門家の育成に努めている。

部局長より

教育情報学教育部の博士前期課程は女性学生が比較的多い。そこで相談のための部屋を設置するとともに、女性の助教を学生相談の担当として学生が気軽に相談できる体制を整えており、学生からも高評価を得ている。今後もこの体制を維持していきたいと考えている。
教育情報学という学問領域の研究者は多く無いが、博士課程を修了する女性も徐々に出てきており、今後採用の機会があれば積極的に女性教員を採用していきたいと考えている。

金属材料研究所

金属材料研究所男女共同参画ＷＧは、委員として教員が淡路智(委員長)、梅津理恵、佐藤豊人、出浦桃子、技術職員が大村和世、井元勇吉、事務職員が百束広道、小谷美智、米永一郎（オブザーバー）の男性 5 名、女性 4 名の計 9 名で構成されている。本年度はメールを使用した相談とセミナー活動を行った。

金属材料研究所男女共同参画ＷＧ開催状況

平成 28 年

① 女性休憩室について、所の予算措置に基づく定期清掃と男女共同参画 WG の女性委員が中心となった利用と整頓状況の毎月の確認。

② TUGUM 支援事業への応募や男女共同参画シンポジウムへの参加等について、メールやチラシによる案内に努めた。

平成 29 年
2 月 1 日　平成 28 年度ダイバーシティ研究実現のための部局等による取組支援プログラムで採択された金属材料研究所男女共同参画セミナー「女性研究者に応援の気持ちを込めて」を開催した。豊橋技術科学大学教授・学長補佐（男女共同参画担当）中野裕美先生の講演の後と所長を交えて本所における課題や対策について質疑応答、意見交換を行った。その中では、女性教員のロールモデルの必要性、管理職の意識改革の必要性が共通認識となった。なお、講演会の前に、講師とワーキンググループメンバーとのランチミーティングを行った。

部局長より

金属材料研究所ではここ 2 年間女性教員数の増加と比率の改善が急速に進んでいるが、これをさらに推し進める。またそのために、管理職セミナーを開催するなどにより、教授層の意識改革を進める。

加齢医学研究所

加齢医学研究所に、現状は男女共同参画の WG や委員会などはないが、総務・人事委員会が男女共同参画について所掌しており、男女共同参画委員会の委員が 1 名いる。また、この委員は星陵地区男女共同参画ネットワーク会議の委員も兼ねている。全体として、以下のような活動を行った。

1. 男女共同参画委員会の活動報告を教職員グループウェアで行った。
2. 男女共同参画委員会主催のシンポジウムへの参加を促す呼びかけを行った。
3. 星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に参加し、立場、境遇等に類似点の多い部局の取り組みを参考に改善を検討した。

部局長より

1 名の女性助教が新規採用されたことにより、徐々に女性教員比率は上昇している。また、加齢医学研究所で受け入れている、平成 28 年度の博士課程後期の女子大学院生の比率は 25%、博士課程前期の女子大学院生の比率は 55%となっており、多くの女子大学院生に対して研究指導が行われている。星陵地区男女共同参画ネットワーク会議に出席することによって、各部局における現状と課題に対する対応策について、最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員および学生の意識改革を進め、長期的な視野に立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

流体科学研究所

流体科学研究所男女共同参画ワーキンググループは、3 名の教授会構成員（男性 2 名、女性 1 名）で構成されている。流体科学研究所は構成分野が主として工学研究科機械系の協力講座となっており、女子学生、女性研究者の非常に少ない研究分野ながらも、男女共同参画意識向上に向けて、以下の取り組みを継続的に行ってきている。

男女共同参画 WG 開催状況

平成 28 年度の委員会は、主としてメール審議形式で行ってきた。男女共同参画に関する情報等の展開・伝達は教授会等で案内し、かつ総務係より所内宛一斉メール送信で行ってきた。

活動内容

1　職場環境改善に関する活動

育児等の理由がある教員（男女問わず）の研究活動をサポートするため、技術補佐員支援制度を設けている。本年度は 1 件の申請があり、これを採用して 1 名の技術補佐員を雇用し、産休・育児休暇中の女性教員の支援を行った。また、部局執行部と女性教職員が一堂に会する機会を設け、職場環境改善に関する意見交換会を開催した。

2　男女共同参画に関する活動

流体科学研究所の新規教員公募時には、「なお、東北大学は、男女共同参画を積極的に推進している。子育て支援の詳細等、男女共同参画の取組については下記ＵＲＬを参照のこと。」の文言を公募要領入れ、男女共同参画を強く推進していることを広く案内してきた。平成 28 年度ではテニュアトラック准教授・助教の公募時にこれに相当する文言を追記して公募を行い、1 名の女性教員を助教として採用した。

また、流体科学研究所は任期制を取り入れているが、男女を問わず、育児休業等を取得した場合はそれを考慮して任期を通常より延長できるようにしている。合わせて、研究所のホームページ内に「女子学生の方へ　女性科学者として生きる」というページを設け、実際に研究者として活動している教職員の声を掲載し、当該分野における女子学生の育成活動を行ってきた。

部局長より

本部局を構成する研究分野は主として流体工学の研究分野に属しており、女性研究者の絶対数が少ないという問題がある。このような背景の中、当部局は積極的に女性教員の登用を目指した取り組みを行ってきたが、特に平成 28 年度は、テニュアトラック普及・定着事業により女性限定公募を行い、テニュアトラック助教を採用した。また、女性教員にとって働きやすい環境の整備に努めている。それはハートおよびソフトの両面で進めており、現職員からの意見のフィードバックも進めている。今後は、協力講座として関係の深い工学部・工学研究科とも連携を進め、更なる職場環境の整備に努めていく。

電気通信研究所

電気通信研究所　男女共同参画検討 WG は、総務担当副所長、総務委員会幹事（准教授）、事務長、総務係員で構成され、男女共同参画にかかる諸活動を所内の関係する委員会と連携して行っている。

取組状況

平成 28 年

4 月	TUMUG 支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）の応募の呼びかけを所内全構成員に行った。
5 月	東北大男女共同参画・女性研究者支援事業仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の応募の呼びかけを所内全構成員に行った。
7 月	東北大学オープンキャンパスにて交流ルームでの女子高校生対応学生ボランティア参加を促し、最終的に学部学生 2 名、博士前期学生 4 名が参加した。
10 月	TUMUG 支援事業（研究スキルアップ経費）の応募の呼びかけを所内全構成員に行った。

平成 28 年

1 月	第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウムのポスター掲示を行うとともに、所内全構成員に参加呼びかけを行った。
2 月	「東北大学男女共同参画セミナー　研究者ってなに？「留学・海外滞在」編」の参加呼びかけや，男女共同参画推進センターが実施した研究環境に関するアンケートの協力依頼を、所内全構成員に行った。
2 月	平成 28 年度男女共同参画委員会報告書の報告のために、今年度の活動内容について総括した。

電気通信研究所における現状

電気通信研究所における女性教員は依然として低い状況であるが、①平成 25 年度に策定した部局ビジョンに従い自主財源による「女性教員特別枠」を新設して女性教員を積極的に雇用すると共に、②学内頭脳循環の一環として、本所教授選考プロセスを経た後、原子分子材料科学高等研究機構（AIMR）に赴任する人事を実施した。この結果、平成 27 年度実績（女性教員：助教 1 名雇用、教員比率：1.52%）と比べ、平成 28 年度は教員比率（女性教員 3 名雇用（教授 1 名（AIMR 赴任分）、准教授 1 名、助教 1 名）、教員比率：4.48%）の向上を達成した。また、男女共同参画に関連する各種情報をこれまで以上に積極的に所内全構成員に通知して啓蒙活動を進めるなど、成果を挙げつつある状況である。

現在女性教員は依然として低い状態にあるが、生体情報や医工学に関連した研究分野など、女子学生が比較的多い研究分野を中心に、オープンキャンパスや研究所一般公開などの機会をとらえ、女子学生が研究者の道に積極的に進めるような働きかけを強めていく等、男女共同参画への取組を進めていく。実際に平成 27 年 7 月に行われたオープンキャンパスでは、学部生 2 名、博士前期課程学生 4 名の女子学生ボランティアが参加し、女子学生のロールモデルを高校生に紹介しており、このような取組を継続して実施していく。

部局長より

電気通信研究所では、自主財源による女性教員特別枠を設定しており、これからも継続してこの枠の維持に努めます。女性教員の構成員比率が低い原因の一つに、電気通信研究所が対象とする研究分野では女子学生が 5-10%と多くないことがあります。各職位で女性比率がその割合となるよう今後も努力すると共に、その底上げを行うべく、これまで同様にオープンキャンパス、研究所一般公開の機会をとらえて研究内容の広報活動を行うと共に、女子学生に対して積極的にアピールを進めていきます。

多元物質科学研究所

平成 28 年度の多元物質科学研究所男女共同参画委員会は、永次　史　教授（委員長）、埜上　洋教授、高岡　毅　講師、宇井美穂子　助教、相馬　出　技術職員、南 裕 子　総務係主任を構成員とし、下記のように活動した。全学の男女共同参画委員会の審議事項、シンポジウムなどについては、教授会において報告し、必要に応じメールなどで周知した。

本年度の取り組み

1．研究所の男女共同参画の Web サイト（URL： http://www.tagen.tohoku.ac.jp/danjyo/ ）を随時更新した。

2．2016 年 9 月 6 日(火) 12:00 より、女子学生・女性研究員・女性教員の交流会である、クローバーの会を開催した。10名弱の参加者で、昼食をとりながら、議論を行った。

3．2016 年 11 月 8 日(火)星陵キャンパス 星陵オーディトリアム 大会議室にて行われた第2回 TUMUG Forum に、本研究所より3人参加した。多元研助教である朱先生が本シンポジウムで発表を行った。非常に興味深いシンポジウムであり、今後、若手女性教員の多元研からの発表をエンカレッジできればと思っている。

活動内容

1　第 4 回多元研男女共同参画推進セミナーを昨年度３月２３日に開催した。講師として Hee Young Paik 教授をお招きし、「Gendered Innovations for Science and Health Researches」というタイトルでご講演頂いた。ご講演は Paik 教授の専門である生活科学、栄養学の視点から性差やジェンダーに関する知見を活かした研究に関する講演であり非常に興味深い講演であった。
講演終了後 Paik 先生を囲んで茶話会を開催した。女子学生、女性教員を中心に１５名ほどの参加があり、活発な議論が交わされた。

２．文部科学省 科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）よりご支援を頂き第５回多元研男女共同参画推進セミナー　～女性科学者が語る研究・人生の楽しみ方～を２月２０日に開催予定である。今回のセミナーの聴衆の対象は女子学生及び若手教員であり、未来のロールモデルとして研究とライフイベントを両立されてきた先生方として、下記2名の先生方をお呼びし下記タイトルで講演頂く。また講演会終了後には茶話会を予定しており、講師を囲んで、ざっくばらんな会になるものと期待している。

程　久美子　先生（東京大学大学院理学系研究科）「女性研究者のトリレンマ」

永澤　秀子　先生（岐阜薬科大学）「化学とライフのバランス、がんの創薬研究者を目指して」

部局長より

多元物質科学研究所では，女性教員比率を上げるべく，男女共同参画推進のための種々のイベントを開催しており，今後も実施していく予定である．特に，来年度以降は，多様性のある人の幅広い参画を促すための，ダイバーシティ共同参画に視点を広げつつ，研究所に所属する全教職員，学生らの意識改革を中心に，より深く長く，実施していきたいと思う．

災害科学国際研究所

災害科学国際研究所では、以前より、工学研究科、医工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHe と共同で設立した「東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE」の枠組みで男女共同参画に関する活動を行ってきた。今年度はこの枠組みで行われている工学研究科等男女共同参画委員会が 2 回開催された。また、所内には男性教員 1 名、女性教員 1 名の計 2 名で構成された男女共同参画 WG がハラスメント委員会の下部組織として設置されており、ハラスメント委員会が下記のように開催された。

災害科学国際研究所において人事採用を行うのは今年度が 4 年目であるが、昨年度に引き続き積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっている。これを反映して、全体の女性構成員比率（助手・助教含む）は平成 26 年度 19.7%、平成 27 年度 20.0%、平成 28 年度 20.6%、女性構成員比率（助手・助教除く）は平成 26 年度 13.5%、平成 27 年度 13.5%、平成 28 年度 13.9%と上昇している。

ハラスメント委員会開催状況

平成 28 年

6 月 10 日　本部から依頼のあったハラスメントに関するアンケートの実施について報告し、今年度の委員会活動の方向性について議論した。また今年度のハラスメント相談窓口担当者を確認し、研究所拡大会議等を通じて所員への周知を図ることにした。

【メール審議他】11 月 17 日～12 月 7 日　女性教員増に対する各部局・専攻の方策・要望について、部局の運営会議等にも諮りつつ審議を行った。

平成 29 年

1 月 16 日　全学男女共同参画委員会の報告・審議事項について報告し、報告内容についての審議を行った。

活動内容

1　全学および工学研究科等男女共同参画委員会の報告および周知

今年度全学および工学研究科で開催された男女共同参画委員会の報告・審議事項について、所内の WG において共有した。また、全学および工学研究科等男女共同参画委員会の

女性研究者支援事業の募集等に関する情報を所内で共有した。所内から複数の女性教員がこれらの支援を受け、研究環境が改善されている。

2　女性教員採用状況に関するデータ分析の実施

これまでの女性教員の採用条件・公募時の男女別の応募数等のデータを参考にし、以下の分析結果が得られた。

① 新規採用がない場合の今後の女性教員数の変化について試算した。その結果、現在当研究所に所属する女性教員 14 名のうち任期なし教員は 2 名であり、平成 32 年度までに任期あり教員 12 名は退職する見込みであった。これに伴い、新規採用がない場合には女性教員比率が毎年 3%程度の割合で急激に減少する。

② 過去 4 年間の間に行われた教授・准教授 21 件の公募（任期付き含む）について，男女別の応募者数と女性の採用数を分析した。その結果、工学系 8 件の公募のうち 5 件は女性応募者がいなかった。また、理学系と医学系の各 3 件の公募についても、いずれもうち 2 件は女性応募者がいなかった。理系分野においては、女性応募者がいたとしてもその数は極めて少なく、14 件の公募の被採用者はすべて男性であった。これに対し、人文社会系とその他の公募 7 件については,いずれも女性応募者数が全体の 2～3 割程度であり、公募 7 件のうち 2 件の被採用者が女性であった。

以上のことから，当研究所において女性教員割合 19%を達成するには、今後の任期付き女性教員の減少割合分を補う以上の女性教員の雇用を行う必要があり、新規採用可能数を考慮すれば目標達成は極めて困難な状況にあることが判明した。教授・准教授に限った分析ではあるが、理系分野においては公募への女性応募者数が少なく、女性の人材不足が深刻であることがデータにより示された。この分析結果をもとに「女性教員増に対する各部局・専攻の方策・要望」についてメール審議を行った。

部局長より

研究所の発足当時から，男女共同参画の活動に多いに支援をさせていただき，新規採用において女性教員の比率は約 20%を達成した．しかしながら，多くは任期付教員であり今年度に終了される．残念ながら予算の減少により同じ数を補充できず，一部公募したとしても女性教員を採用できるかは応募状況による．

東北アジア研究センター

東北アジア研究センターでは、センター長（岡洋樹教授）、副センター長 2 名（千葉聡教授、高倉浩樹教授）、事務長（玉水敏明国際文化研究科事務長）及び全学男女共同参画委員会委員（柳田賢二准教授）によりセンター長直属の専門委員会として「男女共同参画ワーキンググループ」を設置し、全学の男女共同参画委員会委員を座長として活動を行っている（平成 28 年度は男 5 名、女 0 名の計 5 名）。また、執行会議（センター長、上記両副センター長のほか総務委員 2 名（平野直人准教授、上野稔弘准教授）の計 5 名で構成。男 5 名、女 0 名）においても男女共同参画に関わる議論を行っている。【注：以上の人名はいずれも平成 28 年度。】

さらに、本センターは小部局であることの利点を活かして全教員、研究支援者、各種研究員等

の全員で構成する「東北アジア研究センター全体会議」でセンター長および男女共同参画委員から全員に対して男女共同参画関係の行事を周知し、また、男女共同参画に関する認識の徹底を図っている。また、議事とすべき事項は准教授以上全員によって構成される教授会相当会議である運営会議の議事とするという態勢を取っている。

男女共同参画ワーキンググループでは、毎回の全学男女共同参画委員会が開催された際のほか必要のあるごとにメールによる会議を行い、さらに、センター長より毎月開催される執行会議に報告を行っている。また執行会議では男女共同参画委員会の活動内容についてそのつど報告を受け、議論を行い、さらにセンター全構成員が出席して毎月開催される全体会議において周知するとともに、構成員からの質疑に答えている。

東北アジア研究センター男女共同参画ワーキンググループの活動

本年度は、センター全体会議において次のように全学の男女共同参画に向けた活動の周知・徹底に関する活動を行った。

平成 28 年 5 月 23 日　センター全体会議において、5 月 10 日開催の全学の第 98 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。この中で、全学委員会の資料についても URL を周知し、センター構成員の閲覧に供した。

平成 28 年 5 月 24 日　第 5 回仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の募集についてメールで全教員に周知した。

平成 28 年 5 月 25 日　センター全構成員に対し、第３回澤柳記念賞公募についてメールにより周知した。

平成 28 年 7 月 25 日　センター全体会議において、7 月 14 日開催の第 99 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。

平成 28 年 10 月 31 日　第２回 TUMUG Forum（11 月 8 日開催）については 10 月中に全員にチラシを配布してあったが、この日のセンター全体会議において、男女共同参画委員よりあらためて全員に対しこのことについて周知を徹底した。

平成 28 年 12 月 26 日　センター全体会議において、12 月 13 日開催の第 100 回男女共同参画委員会の議事内容について報告を行い、周知した。前回同様、同委員会の資料について URL を周知し、センター構成員の閲覧に供した。特に、H28 年度現在で本学の女性教員比率は 11.4%であるが、「第３期中期計画」(H28 年度-H33 年度)に H33 年度末で女性教員比率を 19%とし、うち教授・准教授の女性教員が 10%となることを目指す旨明記されており、そのためには毎年の新規採用の 30%（40 名）を女性とすることが必要であるということについて改めて全員に周知を徹底した。また、第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウム「男性性を問う」について周知し、特に学問的関心のある者は参加するよう要請した。

平成 28 年 12 月 28 日　センター構成員全員に対し、改めてメールで第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウム「男性性を問う」について参加方周知を行った。

平成 29 年 1 月 6 日　金属材料研究所男女共同参画セミナー「女性研究者に応援の気持ちを込めて」（2 月 1 日開催）についてメールにて周知した。

平成 29 年 1 月 30 日　センター全体会議において、男女共同参画委員より、前日開催された第 13 回東北大学男女共同参画シンポジウム「男性性を問う」が盛会であった旨報告があった。

部局長より

本センターでは、今後も人事の機会があれば、男女共同参画の精神にのっとった対応をするよう心掛ける所存である。また承継枠教員のみならず、外部資金や特定プロジェクトで雇用する時間雇用職員などについても同様の対応を心掛ける。

また全学での男女共同参画の企画への参加や、ハラスメントなどの研修の実施などによって、教職員が働きやすい環境をつくるよう、引き続き努力していきたい。

病院

1．　星陵キャンパスの部局（医学系研究科、歯学系研究科、加齢医学研究所、病院、東北メディカル・メガバンク機構）からの東北大学男女共同参画委員会委員が各部局での現状と課題に関して情報交換を継続している。

2．　平成 27 年度の取り組み報告後に、病院の事務部門や看護部と協力し、全職員に対してアンケートにより、院内保育所のニーズを調査した。これは下記３．の院内保育所開設を検討する際の需要予測に有用な情報となった。

3．　平成 28 年度は、病院で予定定員 120 名の保育所を開設することが決定され、平成 30 年度の開所にむけた作業に着手した。

4．　女性医師支援推進室が活動を継続している。

①　上記 3. の平成 30 年度の稼働が予定されている保育所のあり方に関するワーキンググループに参画し、利用者の視点にたって提言、要望を行っている。

②　医学科 1 年生、4 年生を対象とした、キャリアパスを含むワークライフバランス講義にあたり部局所属の女性教員が講義を担当した。

③　女子医学生と女性医師との交流を目的とした昼食会の企画や実施に参画し、病院における女性医師の働き方のイメージづくりを支援する。

5．　３．女性休憩室の運営、病後児保育室の運営に関しては、病院、研究科、医学部教室員会から委員を出すなどして協力体制がとられている。

6．　短時間勤務医員は平成 28 年 4 月現在で 21 名、以後新規に 6 名の採用が行われた。キャリア継続を支援する取組として活用されている。

7．　星陵キャンパスの部局合同で男女共同参画の推進を目的とした企画、運営をする。

部局長より

篤志家より大学に寄附された土地を有効活用するために院内保育所建設に向けた計画を進めている。2018年3月の開所を目指し院内で保育所 WG を設置し、建設図面作成や運用方針の策定を行っている。

2017年4月に新立体駐車場が稼動を始めること、患者用立体駐車場が 2016 年度に稼働していることで、大学病院周辺の交通渋滞が解消してきた。今後は育児中の職員に対する駐車場優遇措置を考えたい。

高度教養教育・学生支援機構

高度教養教育・学生支援機構は、平成 26 年 4 月に、高等教育開発推進センター、国際交流センター、国際教育院、 グローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション博士人財育成センターを統合し、新たに設置された部局である。設置以降の 3 年間で、11 名の女性教員を新規採用するなど、男女共同参画の推進に取り組んでいる。平成 28 年度は、男女共同参画委員が以下の活動を行った。

1　男女共同参画シンポジウムの周知

2　学生の課外活動における対人トラブルへの注意喚起のための資料作成への協力

男女共同参画推進センターより依頼を受け、学友会・サークル等に所属する学生の中で起こりうる対人トラブル（セクハラやストーカー問題を含む）への注意喚起のための資料作成に協力した。

また、機構内の業務センターでは、男女共同参画の推進のために以下の取組を実施した。

1　学生相談・特別支援センターにおける取組

研究と育児の両立に関する相談や、進路・キャリアに関する相談への個別支援の他、ハラスメント全学学生相談窓口における相談対応、ハラスメント防止に関する FD・予防教育、工学部機械知能系女子学生交流会への参加等を通した連携による女子学生支援体制作りなどを実施した。

2　キャリア支援センターにおける取組

女子大学院生を対象とした個別相談や、キャリア支援プログラム「ビジネスマナー（女子学生向け)」などを実施した。

部局長より

上記のとおり、本機構は平成 26 年 4 月に既存の 6 組織を統合して発足したが、教員数は既存組織の教員数に加え、大学全体の理解のもとに新たに 30 名の増員が措置された。この人事が現在も進められているところである。ここ 3 年間の具体的な女性教員の構成員比率や、新規採用者における女性比率は、5 の項目に記載されている通りであるが、この一連の人事の中で機構所属の女性教員数は着実に増加してきた。このことは、本機構が所掌する分野の教育活動や、学生相談に代表される業務センターの活動が、男女を選ばない、あるいは積極的に女性教員が望ましいものであったからである。このような立場からの人事は、これからも継続されるであろう。したがって、女性構成員比率も新規採用者における女性比率も、さらにいっそう向上していくものと理解している。

本部事務機構

研修の受講

1　参加状況

本学の求める人材像は、「高い倫理観に立脚し、国際水準の大学を支える職員の自覚と問題意識を持ち、変化に適応し、チャレンジブルに行動し、自ら成長しつつ本学の発展に寄与できる自立的な人材」である。事務職員等の研修については、求める人材像に基づき、各職員の組織における職務と責任の遂行に必要な知識・技術及び将来に向かって必要となる知識等の付与並びに自己啓発の機会を与えることによって、業務の遂行能力の向上を図ることを目的に実施している。

研修の実施にあたっては、性別に関係なく、各研修の目的や内容に応じ研修参加者を

選考している他、幅広く研修への参加を周知し、公募を行っている。

2　平成２８年度における主な研修の実施状況（東北大学主催）

項目	研修名	参加者数	女性参加者（内数）	女性参加比率（%）
階層別研修	初任者研修（4 月）	37 名	18 名	48.6
	初任者フォロー研修（9 月）	37 名	18 名	48.6
	キャリアプランセミナー①（10 月）	36 名	17 名	47.2
	キャリアプランセミナー②（12 月）	37 名	18 名	48.6
	キャリアプランセミナー③（ 2 月）	36 名	17 名	47.2
	係長研修（11 月）	25 名	8 名	32.0
	プレマネジメント研修（ 2 月）	21 名	9 名	42.9
	新任管理者等研修（ 9 月）	26 名	7 名	26.9
その他の研修	自己啓発研修（放送大学（通年)）	65 名	28 名	43.1
	自己啓発研修（通信教育（通年)）	250 名	152 名	60.8
	女性職員のキャリア形成支援研修（10 月）	12 名	12 名	100.0
	事務職員海外研修（中級者対象）（11 月）	10 名	6 名	60.0
	事務職員海外研修（上級者対象）（11 月）	3 名	1 名	33.3
	SDP 大学変革力育成講座（8 月～12 月）	3 名	0 名	0
	再雇用準備セミナー（10 月）	29 名	13 名	33.3

第５章　行動指針、中期目標・中期計画達成のための各部局における取組について

文学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	4 名／45 名中（9%）	4 名／44 名中（9%）	4 名／42 名中（10%）
准 教 授	6 名／33 名中（19%）	6 名／36 名中（17%）	7 名／35 名中（20%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	5 名／18 名中（28%）	5 名／17 名中（29%）	4 名／13 名中（31%）
計（助手･助教含む）	15 名／96 名中（15%）	15 名／97 名中（15%）	15 名／90 名中（17%）
計（助手･助教除く）	10 名／78 名中（13%）	10 名／80 名中（13%）	11 名／77 名中（14%）
大学院学生※2 （博士後期課程）	72 名／169 名中（43%）	70 名／166 名中（42%）	71 名／167 名中（43%）
大学院学生※2 （博士前期課程）	77 名／173 名中（45%）	79 名／164 名中（48%）	81 名／170 名中（48%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／4 名中（25%）	2 名／10 名中（20%）	2 名／10 名中（20%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

文学研究科では、新規採用者の公募に際し、男女共同参画を推進していることを明記している。

３．前年度より改善された点

文学研究科では、平成 16 年度策定の基本方針に基づいて、女性教員の採用を行っており、毎年必ず 1 名以上は女性が採用されている。平成 28 年度は、前年度と同じく、新規採用者 10 名の内 2 名が女性であり、准教授以上の女性教員が 1 名増加した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

文学研究科では、特段の障害は存在しないが、募集分野によっては女性の応募が得られない場合もある。今後一層積極的採用に努める必要がある。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、公募書類に男女共同参画の推進をうたい、この方針を学内外に周知することで女性研究者の応募の増加を図る。研究者・大学院生のジェンダーバランスが分野ごとに大きく異なる現状にどう対応できるか、さらに検討を進めたい。

教育学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	１名／１８名中（６％）	１名／１４名中（７％）	１名／１３名中（８％）
准 教 授	２名／１３名中（１５％）	２名／１５名中（１３％）	３名／１６名中（１９％）
講　　師	０名／０名中（０％）	０名／０名中（０％）	０名／１名中（０％）
助教・助手	１名／６名中（１７％）	０名／３名中（０％）	０名／３名中（０％）
計(助手･助教含む)	４名／３７名中（１１％）	３名／３２名中（９％）	４名／３３名中（１２％）
計(助手･助教除く)	３名／３１名中（１０％）	３名／２９名中（１０％）	４名／３０名中（１３％）
大学院学生※2 (博士後期課程)	４１名／７８名中（５３％）	３８名／６５名中（５９％）	２７名／５４名中（５０％）
大学院学生※2 (博士前期課程)	５０名／７５名中（６７％）	４１名／６７名中（６１％）	４４名／７５名中（５９％）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の数、平成 28 年度は１月１日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
０名／２名中（０％）	０名／２名中（０％）	１名／３名中（３３％）

※平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の比率、平成 28 年度は１月１日の比率

教育学研究科では、平成 28 年度に女性教員を１名採用したことにより新規採用者の女性比率を上げることができた。

３．前年度より改善された点

教育学研究科では、女性教員１名の採用があったが、全体的な女性教員比率に大きな変化はないと言える。大学院生に占める女子学生の比率は依然として高水準を保っている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

教育学研究科では、改善の上で特に障害となっている点は特にないと思われる。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度以降も、教員の公募において、東北大学の男女共同参画に関する考え方を積極的に公表し、優秀な女性教員候補者を集めることに努力する。

法学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	5 名／33 名中（15%）	5 名／36 名中（14%）	6 名／37 名中（16%）
准 教 授	6 名／19 名中（32%）	7 名／16 名中（44%）	5 名／12 名中（42%）
講　　師	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／2 名中（50%）
助教・助手	4 名／10 名中（40%）	4 名／10 名中（40%）	3 名／7 名中（43%）
計（助手・助教含む）	16 名／63 名中（25%）	17 名／63 名中（27%）	15 名／58 名中（26%）
計（助手・助教除く）	12 名／53 名中（23%）	13 名／53 名中（25%）	12 名／51 名中（24%）
大学院学生※2 （博士後期課程）	12 名／40 名中（30%）	10 名／36 名中（27%）	10 名／41 名中（24%）
大学院学生※2 （博士前期課程）	3 名／15 名中（20%）	7 名／15 名中（46%）	5 名／16 名中（31%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／6 名中（17%）	2 名／10 名中（20%）	0 名／2 名中（0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

３．前年度より改善された点

数値としての改善点は、教授層での女性比率の向上である。教授層では16%の女性比率であるが、准教授層で40%を越えており、今後も教授層での順調な増加が見込まれる。全体として高い女性比率を維持しており、また、各教員区分において 1 名以上の女性が在籍 している状況は、平成 25 年度から継続している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

法学研究科では、女性構成員の比率が高い状態が続いており、男女共同参画の実現に対する大きな障害はないと考える。また女性准教授層における出産や育児も当然のことになっている。ただし、単身赴任者や家族との別居者も多いことから、今後も高い女性比率を維持し、より改善するためには、育児・介護環境等の改善にも留意が必要である。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度以降も、高い女性構成員比率を維持することができるよう努力をする。特に、新規採用者における女性比率の向上や大学院学生の女性比率の向上に、引き続き務める予定である。

経済学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	2 名／33 名中（6.1%）	2 名／36 名中（5.6%）	2 名／36 名中（5.6%）
准 教 授	6 名／24 名中（24%）	5 名／24 名中（20.8%）	4 名／20 名中（20%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	1 名／2 名中（50%）	1 名／3 名中（33.4%）
助教・助手	5 名／5 名中（100%）	6 名／9 名中（66.7%）	5 名／8 名中（62.5%）
計（助手・助教含む）	13 名／64 名中（20%）	14 名／71 名中（19.7%）	12 名／67 名中（18.0%）
計（助手・助教除く）	8 名／57 名中（13.8%）	8 名／62 名中（12.9%）	7 名／59 名中（11.9%）
大学院学生※2（博士後期課程）	21 名／64 名中（32.8%）	22 名／59 名中（37.3%）	21 名／55 名中（38.1%）
大学院学生※2（博士前期課程）	47 名／111 名中（42.3%）	67 名／131 名中（51.1%）	65 名／127 名中（51.1%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／3 名中（33.3%）	2 名／12 名中（16.7%）	0 名／3 名中（0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

新規採用者の女性比率に関しては低下傾向にあるものの、経済学研究科全体の女性構成員比率は概ね横ばいではあり、極端に低いわけではない。

３．前年度より改善された点

前年度に比べ際だった改善は見られないものの、博士前期課程に在学の女子大学院学生の比率は、昨年度と同様、５割を超えている。こうした傾向は将来、男女共同参画に資するものと考えられる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

経済学研究科では、女性構成員比率を高めるため、人事採用において評価が同等であれば女性を優先し採用する方針をとっている。しかし、教員・スタッフの新規採用の機会自体に限りがあるため、早期に比率の大幅な改善を見込むことは難しい状況にある。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、人事採用等において、女性構成員比率向上に向け努力する。

理学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	1 名／77 名中（1%）	1 名／77 名中（1%）	0 名／73 名中（0%）
准 教 授	3 名／77 名中（4%）	3 名／79 名中（4%）	2 名／77 名中（3%）
講　　師	0 名／5 名中（0%）	0 名／4 名中（0%）	0 名／4 名中（0%）
助教・助手	6 名／96 名中（6%）	4 名／89 名中（4%）	2 名／89 名中（2%）
計（助手・助教含む）	10 名／255 名中（4%）	8 名／249 名中（3%）	4 名／243 名中（2%）
計（助手・助教除く）	4 名／159 名中（3%）	4 名／160 名中（3%）	2 名／154 名中（1%）
大学院学生※2（博士後期課程）	46 名／290 名中（16%）	46 名／289 名中（16%）	50 名／297 名中（17%）
大学院学生※2（博士前期課程）	87 名／583 名中（15%）	96 名／574 名中（17%）	90 名／563 名中（16%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／16 名中（0%）	0 名／15 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

理学研究科では、平成 26 年度～29 年 1 月 1 日までの女性教員の採用者数は 0 名と、採択が無く、低迷したままである。女性教員の総数は平成 26 年度の 10 名と比較し、4 名にまで落ち込み、深刻な状況にある。

３．前年度より改善された点

理学研究科では、平成 26 年度以降、博士前期課程、後期課程の女子大学院生が 15～17%を推移しており、安定してきている。在籍している女子大学院生が、今後、女性教員として職を得ることを期待したい。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

理学研究科では、准教授、助教で採用されていた女性研究者が人事異動により転出したことで、この３年間で女性教員の比率が大幅に落ち込んでいる。優秀な女性研究者を育成しても、人件費削減による影響から学内でのプロモーションが難しくなっていることが問題になっていると考えられる。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画の精神のもとで人事選考を行うよう努める。大学院博士後期課程に進学した者に対して大学でのキャリアを考える女子学生が増えるよう、進路の指導を行う。

医学系研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	13 名／92 名中（14%）	14 名／94 名中（15%）	12 名／91 名中（13%）
准 教 授	9 名／72 名中（13%）	9 名／70 名中（13%）	10 名／67 名中（15%）
講　　師	7 名／35 名中（20%）	6 名／30 名中（20%）	7 名／25 名中（28%）
助教・助手	39 名／137 名中（28%）	46 名／146 名中（32%）	42 名／137 名中（31%）
計（助手･助教含む）	68 名／336 名中（20%）	75 名／340 名中（22%）	71 名／320 名中（22%）
計（助手･助教除く）	29 名／199 名中（15%）	29 名／194 名中（15%）	29 名／183 名中（16%）
大学院学生※2（博士後期課程）	195 名／676 名中（29%）	198 名／704 名中（28%）	186 名／723 名中（26%）
大学院学生※2（博士前期課程）	88 名／168 名中（52%）	99 名／179 名中（55%）	111 名／192 名中（58%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数
※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
9 名／55 名中（16%）	17 名／45 名中（38%）	12 名／34 名中（35%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

医学系研究科は女性研究者の比率が高い保健学専攻看護学コースを含むため、従来から教員の女性比率は比較的高めである。そういった状況を加味しても、平成２７年度と平成２８年度には新規採用者における女性比率が３５％を超えたことは特筆すべきであり、男女共同参画の観点から高く評価できる。

３．前年度より改善された点

新規採用者における女性比率が、平成２７年度から二か年に渡り３５％を超えていること、平成２８年度は准教授職、講師職の女性比率が増加したこと（准教授１３％→１５％、講師２０％→２８％）は大きな改善点である。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

医学系研究科では従来から、大学院生に占める女性比率が高めであるのに対し、上位職に占める女性教員の割合が低い傾向が続いているが、平成２８年度は准教授、講師における女性比率が増加しているため、今後、上位職に占める女性比率が高まることが期待できる。しかしながら医学系研究科においても、女性在籍率の改善には男性中心的な雇用慣行が主要な阻害要因になっていると考えられ、このような雇用改善を是正する取り組みが求められる。

５．次年度の具体的対応策

平成２９年度は、これまでと同様、男女共同参画の理念に基づいた人事選考に取り組むことについて、教授会で継続的に働きかける。同時に、男性中心的な雇用慣行の是正に向けて、研究科内の

主要な役職者、人事関連の委員会等に働きかける。加えて、平成２７年度に医学部創立百周年を記念して創設した医学系研究科女子大学院生奨励賞（七星賞）を、今後も優秀な女子大学院生に授与することを通して、女性研究者が教育研究のキャリアで活躍することをエンカレッジする。

歯学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	1 名／ 22 名中（ 5%）	1 名／ 21 名中（ 5%）	0 名／ 19 名中（ 0%）
准 教 授	1 名／ 14 名中（ 7%）	1 名／ 16 名中（ 6%）	1 名／ 16 名中（ 6%）
講　　師	1 名／ 7 名中（14%）	1 名／ 8 名中（13%）	1 名／ 8 名中（13%）
助教・助手	16 名／ 55 名中（29%）	21 名／ 61 名中（34%）	23 名／ 60 名中（38%）
計(助手･助教含む)	19 名／ 98 名中（19%）	24 名／106 名中（23%）	25 名／103 名中（24%）
計(助手･助教除く)	3 名／ 43 名中（ 7%）	3 名／ 45 名中（ 7%）	2 名／ 43 名中（ 5%）
大学院学生※2 (博士後期課程)	49 名／164 名中（30%）	56 名／173 名中（32%）	57 名／166 名中（34%）
大学院学生※2 (博士前期課程)	11 名／ 16 名中（69%）	13 名／ 20 名中（65%）	11 名／ 15 名中（73%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数
※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
4 名／9 名中（44%）	6 名／14 名中（43%）	2 名／ 9 名中（22%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

歯学研究科における女性比率は、教授は 0%、准教授は約 6%、講師は約 13%、助教は約 38%、大学院学生（博士後期課程）は約 34%、大学院学生（博士前期課程）は約 73%となっている。

３．前年度より改善された点

歯学研究科では、人事委員会が男女共同参画に配慮しつつ教員人事を所掌している。

平成 28 年度は、助教、大学院学生（博士後期課程）及び 大学院学生（博士前期課程）における女性比率が向上した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

歯学研究科では、教職員の意識、制度、環境 及び 設備等において障害となっている点はないが、教員を募集する際、女性からの応募が少ない場合があり、そのことが、教授、准教授及び講師における女性教員比率に影響しているかもしれない。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、教員選考の際は女性の参画に配慮しながら、優秀な人材を集める。

薬学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／20 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）
准 教 授	3 名／14 名中（21%）	3 名／14 名中（21%）	3 名／13 名中（23%）
講　　師	1 名／5 名中（20%）	1 名／5 名中（20%）	1 名／5 名中（20%）
助教・助手	9 名／35 名中（26%）	8 名／33 名中（%）	9 名／33 名中（27%）
計（助手･助教含む）	13 名／74 名中（18%）	12 名／72 名中（17%）	13 名／71 名中（18%）
計（助手･助教除く）	4 名／39 名中（10%）	4 名／39 名中（10%）	4 名／38 名中（11%）
大学院学生※2（博士後期課程）	16 名／79 名中（20%）	23 名／79 名中（29%）	19 名／86 名中（22%）
大学院学生※2（博士前期課程）	36 名／124 名中（29%）	25 名／124 名中（20%）	24 名／129 名中（19%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
2 名／10 名中（20%）	1 名／7 名中（14%）	1 名／9 名中（11%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

薬学研究科では、１名の女性の助教を新規に採用した。

３．前年度より改善された点

今年度の薬学研究科の女性教員数及び割合は昨年とほぼ同じである。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

保育園等の空きがなく、子供を預けられない。

教員のポストに空きがない。

５．次年度の具体的対応策

博士前期課程大学院生や学部学生（含６年制コース）に対して、東北大学サイエンス・エンジェル制度等の本学における女性研究者育成事業の周知を行なうとともに、薬学研究科または本学主催の関連セミナーへの参加を呼びかける。

女性研究者を対象とした助成金等に積極的に応募するよう促す

工学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	1 名／117 名中（1%）	1 名／112 名中（1%）	1 名／114 名中（1%）
准 教 授	4 名／108 名中（4%）	4 名／117 名中（3%）	3 名／118 名中（3%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）
助教・助手	14 名／140 名中（10%）	14 名／121 名中（12%）	15 名／128 名中（12%）
計（助手･助教含む）	19 名／367 名中（5%）	19 名／353 名中（5%）	19 名／361 名中（5%）
計（助手･助教除く）	5 名／227 名中（2%）	5 名／232 名中（2%）	4 名／233 名中（2%）
大学院学生※2（博士後期課程）	47 名／516 名中（9.1%）	49 名／534 名中（9.2%）	56 名／506 名中（11.1%）
大学院学生※2（博士前期課程）	147 名／1482 名中（9.9%）	161 名／1488 名中（10.8%）	184 名／1525 名中（12.1%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数
※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
3 名／32 名中（9%）	2 名／28 名中（7%）	3 名／26 名中（12%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

工学研究科では、平成 28 年度に新規採用された女性教員の人数は例年並みであるが、その女性比率は１２％であり、過去２年間に比べて大幅に増加した。しかし、教員における女性の比率は依然として横ばいであるので、今後も女性教員数の増加に向けて更なる努力が望まれる。

女子大学院生の前期課程の比率は前年度より約 1.5%上昇し、後期課程の比率も約 2%上昇しており良い傾向にある。今後もこの傾向を維持するように努力することが望まれる。

３．前年度より改善された点

工学研究科では、過去 3 年間、女性教員の絶対数はほぼ変わらず、維持されてきており、工学系女性研究者育成支援推進室 ALicE による各種支援活動がその維持に効果を発揮しつつあると思われる。さらに大学院前期課程および大学院後期課程の女子学生数の増加は、オープンキャンパス時に開催している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」や ALicE による広報活動が功を奏してきていると思われる。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

工学研究科では、伝統的に女子学生・女子大学院学生の比率が小さい。このため，これに応じて女性教員比率も少なくなる傾向があると考えられる。また、工学研究科における教育と研究以外の大学運営のために、現教員は極めて長い時間を割く必要があり、現教員のオーバーワークの状態が日常化している。このことも、女性教員の比率を高める障害になっていると考えられる。また、工学研究科は多様な分野があるため、障害となる原因も多様であると考えられ、その問題把握などが重要であると言える。

５．次年度の具体的対応策

オープンキャンパスにおいて例年実施している女子学生のためのミニフォーラム「工学にかける私の夢」を平成 29 年度も行い、工学分野の魅力と将来性を継続的にアピールする。さらに女子学生の博士後期課程への進学を促す方策として、出産・育児による在学期間延長に関する制度を検討する。

農学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	2 名／42 名中（5%）	2 名／39 名中（5%）	3 名／41 名中（7%）
准 教 授	4 名／42 名中（10%）	4 名／43 名中（9%）	5 名／40 名中（13%）
講　　師	0 名／0 名中（%）	0 名／0 名中（%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	9 名／38 名中（24%）	9 名／43 名中（21%）	6 名／37 名中（16%）
計（助手･助教含む）	15 名／122 名中（12%）	15 名／125 名中（12%）	14 名／118 名中（12%）
計（助手･助教除く）	6 名／84 名中（7%）	6 名／82 名中（7%）	8 名／81 名中（10%）
大学院学生※2（博士後期課程）	32 名／107 名中（30%）	31 名／98 名中（32%）	27 名／86 名中（31%）
大学院学生※2（博士前期課程）	103 名／262 名中（39%）	103 名／264 名中（39%）	122 名／276 名中（44%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／3 名中（0%）	1 名／12 名中（8%）	2 名／8 名中（25%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

農学研究科では、平成28年度に2名の女性の新規採用があったところであるが、全体としては、教授 3 名(7%)、准教授 5 名(13%)と、依然として女性教員の比率は低い状況である。採用にあたっては、公募を行っているため、女性研究者からの応募があるときもあるが、これも少ない。

農学研究科はもともと女子学生が多く、大学院進学率も高いが採用に反映されていない。教授および准教授の割合はともに 10%前後であるため、今後も継続して女性教員の採用に向けての努力が必要と考えられ、目標達成に向けた検討と具体的な対策をとる必要がある。

３．前年度より改善された点

農学研究科では、平成 27 年度には 1 名であった女性新規採用が 28 年度には 2 名であった。これは新規採用者割合(2/8)でみると、25%となる。女性教員の採用に向けては公募要領に男女共同参画に関する情報等を記載し、女性研究者への応募を呼びかけている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

農学研究科には公募を課さない教員特別選考制度があり、年度によっては杜の都ジャンプアップ事業の活用と併せてその制度を適用し、女性教員の採用を進めてきた結果、一時的に女性研究者を多数採用した。しかしながら、若手の研究者であればあるほど、次のステップとして、他機関へ転出することも多く、今後は制度に依存せずとも女性教員比率が高まっていくことが望ましい。そのためには何よりも研究科構成員の更なる意識の向上が必要である。

教員ポストの流動化が思う様に進まないことは農学研究科に限った問題ではなく、全学的な問題としてもとらえるべきと考える

青葉山新キャンパスへの保育園の設置については、大変ありがたく、大いに活用していきたい。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度も引き続き、農学研究科の人事委員会に対して、教員選考において女性候補者の採用に十分配慮するとともに、新規採用等に当たっては特別選考制度を運用し、積極的に女性教員を登用する様に要請していく。さらに、組織運営においても、大学を支える女性教員の確保・活用を図れる人事システムを構築する様に、研究科長等に要請していく。

昨年度は、男女共同参画委員会主催の講演会を開催したが、今年は新キャンパスへの移転もあり、実施ができなかったため、次年度以降は、継続的にこうした講演会を開催したい。

女性教員(含む技術職員)増加のための方策については下記のとおりである。

① 女性の目線から見た現状あるいは問題点(課題点)の提示
② 男女共同参画委員会企画講演会等の実施
③ FD 開催への提言: 東北大学の男女参画の取り組みや他大学との比較、農学研究科への要望などに関する講演を行う。
④ 人事委員会との連携-女性研究者応募状況の報告と意識の共有
⑤ 女性技術職員が活躍するための他大学職員による講演の企画など。

国際文化研究科

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	4 名／25 名中（16%）	4 名／25 名中（16%）	4 名／24 名中（ 17%）
准 教 授	1 名／12 名中（8%）	1 名／13 名中（8%）	2 名／15 名中（ 13%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	1 名／ 1 名中（100%）
助教・助手	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（ 0%）
計（助手・助教含む。）	5 名／37 名中（14%）	5 名／38 名中（13%）	7 名／40 名中（18%）
計（助手・助教除く。）	5 名／37 名中（14%）	5 名／38 名中（13%）	7 名／40 名中（18%）
大学院学生（博士後期課程）	42 名／64 名中（66%）	47 名／74 名中（64%）	41 名／65 名中（63%）
大学院学生（博士前期課程）	55 名／81 名中（68%）	43 名／65 名中（66%）	39 名／64 名中（61%）

※平成 26 年度は 1 月 1 日、平成 27 年度および平成 28 年度は 12 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／0 名中（0 %）	0 名／2 名中（0 %）	2 名／4 名中（50 %）

平成 26 年度は 1 月 1 日、平成 27 年度および平成 28 年度は 12 月 1 日の数

国際文化研究科では、過去３年間の新規採用者６名のうち２名が女性であり、女性比率は徐々に上がっている。

３．前年度より改善された点

女性構成員の比率は全体比で 18%、教授については 17%であり、比較的高めの水準を維持している。科内の男女共同参画推進委員会専用メールアドレスを設置し、より相談しやすい環境を整備している。平成 23 年度に設けた女性職員休憩室は、授乳等の必要がある場合は女子学生も使用可能としており、引き続き設備充実等の環境改善を進めている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

国際文化研究科では、制度的には特に障害となっていると思われる点はないが、本学の中でも早期に女性教員の積極的採用を始めたことから、今後の数年間で定年による女性教員の退職が続く見込みである。

５．次年度の具体的対応策

教員・学生ともに女性の比率は学内でも比較的高いレベルにあるが、女性教員はなお男女共同参画の理念に照らせば不十分であり、今後も採用人事において（単純な数確保だけではない）配慮を払う必要がある。第３期中期目標期間中に、女性教員比率 20%を目指す取組みを行う予定である。

情報科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／33 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）
准 教 授	5 名／30 名中（17%）	4 名／32 名中（13%）	5 名／34 名中（15%）
講　　師	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）
助教・助手	1 名／21 名中（5%）	2 名／32 名中（6%）	2 名／31 名中（6%）
計（助手・助教含む）	7 名／85 名中（8%）	7 名／98 名中（7%）	8 名／99 名中（8%）
計（助手・助教除く）	6 名／64 名中（9%）	5 名／64 名中（8%）	6 名／68 名中（9%）
大学院学生※2（博士後期課程）	23 名／111 名中（21%）	23 名／118 名中（19%）	22 名／132 名中（17%）
大学院学生※2（博士前期課程）	30 名／296 名中（10%）	35 名／291 名中（12%）	51 名／301 名中（17%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
２名／10 名中（20%）	１名／16 名中（6%）	０名／11 名中（0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の比率、平成 28 年度は１月１日の比率

情報科学研究科では、全体の教員数については多少の増加傾向がみられるのに対して、女性教員の比率は８％前後にとどまっており、ここ数年比率の改善がみられない状況にある。また博士後期課程の比率については減少傾向にあり、女性研究者の育成についても難しい状況にあるといえる。

３．前年度より改善された点

情報科学研究科では、上記に反して、平成 26 年度以降の博士前期課程における女子学生の比率が、10%、12%、17%とへと増加傾向にある。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

情報科学研究科では、多様な分野に分かれている構造から、研究科全体での女性採用枠の設定が容易ではない現状である。また、研究科の大きな部分である工学分野では女性研究者数が少なく、優秀な候補者をサーベイする努力を行っているにも関らず、採用に成功するのが難しいのが現状である。

５．次年度の具体的対応策

女性研究者のサーベイを続け、採用に努力すると共に、女性研究者育成に重点を置き、運営検討および将来計画委員会に働きかけ、男女比率の是正に努力する。

生命科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	１名／25 名中（4%）	２名／26 名中（8%）	３名／27 名中（11%）
准 教 授	０名／16 名中（0%）	０名／16 名中（0%）	０名／16 名中（0%）
講　　師	０名／２名中（0%）	０名／２名中（0%）	０名／２名中（0%）
助教・助手	５名／26 名中（19%）	５名／32 名中（16%）	５名／37 名中（14%）
計(助手･助教含む)	６名／69 名中（7%）	７名／76 名中（9%）	８名／82 名中（10%）
計(助手･助教除く)	１名／43 名中（2%）	２名／44 名中（5%）	３名／45 名中（7%）
大学院学生※2 (博士後期課程)	21 名／73 名中（29%）	17 名／74 名中（23%）	17 名／81 名中（21%）
大学院学生※2 (博士前期課程)	57 名／196 名中（29%）	62 名／195 名中（32%）	85 名／204 名中（42%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の数、平成 28 年度は１月１日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
２名／11 名中（ 18%）	２名／10 名中（ 20%）	２名／９名中（22%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の比率、平成 28 年度は１月１日の比率

生命科学研究科では、平成２４年度から外部資金等で雇用できる特任助教（研究）の内規を定め、女性教員の採用に努力している。特に、平成２８年度は女性教授１名を採用した。

３．前年度より改善された点

生命科学研究科では、外部資金等で雇用できる特任助教（研究）の内規を定めたことにより、女性教員も採用しやすくなり、平成２８年度は１名の女性特任助教（研究）を雇用した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

生命科学研究科では、教員の採用において多くが公募になっているが、応募のなかで女性研究者の割合が小さいことが原因の一つとして考えられる。

また、博士前期課程の大学院学生における女性比率は増えているが、博士後期課程における女性比率が伸びていないことも助教への採用が少ない一因と思われる。

５．次年度の具体的対応策

生命科学研究科では、研究科における教員の女性比率が極端に低いという厳然たる事実を踏まえ、今後、女性教員を積極的に増やすことを基本方針として、そのための環境整備を計ること、今後の教員人事において、これを改善するためにできるだけの努力をすることを基本方針として、引き続き努力する。

具体的な対応策として、以前に決定した次の４つを引き続き行う。

１．これから行われる教員人事において、各公募分野について女性候補者の推薦を選考委員会が積極的に行うことにより、女性候補者の割合が増えるように努力する。

２．公募する際に、この人事が男女共同参画を目指したものであることを明記する。

３．人事選考の最終段階に女性候補者が残りながら、採用にいたらなかった場合には、人事選考委員会はその理由を説明する責任を負う。

環境科学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／19 名中（0%）	1 名／16 名中（6%）	1 名／17 名中（6%）
准 教 授	0 名／18 名中（0%）	0 名／20 名中（0%）	0 名／17 名中（0%）
講　　師	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）	1 名／1 名中（100%）
助教・助手	5 名／20 名中（25%）	6 名／21 名中（29%）	7 名／22 名中（32%）
計（助手・助教含む）	6 名／58 名中（10%）	7 名／58 名中（12%）	9 名／57 名中（16%）
計（助手・助教除く）	1 名／38 名中（3%）	2 名／37 名中（5%）	2 名／35 名中（6%）
大学院学生※2（博士後期課程）	24 名／90 名中（27%）	24 名／73 名中（33%）	27 名／90 名中（30%）
大学院学生※2（博士前期課程）	33 名／199 名中（17%）	29 名／209 名中（14%）	39 名／198 名中（20%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／6 名中（16%）	3 名／4 名中（75%）	2 名／6 名中（33%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

環境科学研究科では、過去 3 年間に 16 名が新規採用され、そのうち 6 名(38%)が女性教員であった。着実に女性の比率が増加している。今後も女性教員採用の増加に向けて努力したい。

３．前年度より改善された点

昨年度に引き続き今年度も女性教員が採用され、女性教員比率が増加した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

すでに多くの男性教員が在職しているため、女性教員を多く採用しても、女性比率としては少ししか増加しない。また、環境科学研究科の対象とする学問領域において研究者に占める女性の割合が少ないため、教員の公募の際に男女共同参画を推進している旨を謳っているにもかかわらず、女性の応募が少なく、採用に至らないケースが多い。

５．次年度の具体的対応策

研究科独自に産休等の取得する女性教員の代替教員制度も設けており、これらの若手女性教員サポートを継続したい。また、即効性のある対応策ではないが、女子学生に対し博士課程後期課程への進学を促し、地道に研究者数を増やすことを継続して取り組みたい。

医工学研究科

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	1 名／19 名中（5%）	1 名／22 名中（5%）	1 名／20 名中（5%）
准 教 授	2 名／7 名中（28%）	2 名／7 名中（29%）	1 名／8 名中（13%）
講　　師	0 名／0 名中（-%）	0 名／1 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）
助教・助手	1 名／7 名中（14%）	1 名／7 名中（14%）	2 名／7 名中（29%）
計(助手･助教含む)	4 名／35 名中（11%）	4 名／37 名中（11%）	4 名／36 名中（11%）
計(助手･助教除く)	3 名／36 名中（8%）	3 名／30 名中（10%）	2 名／29 名中（7%）
大学院学生※2 (博士後期課程)	7 名／53 名中（13%）	7 名／54 名中（13%）	8 名／51 名中（16%）
大学院学生※2 (博士前期課程)	16 名／82 名中（20%）	8 名／77 名中（10%）	7 名／71 名中（10%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／3 名中（33%）	0 名／3 名中（0%）	2 名／5 名中（40%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

医工学研究科では、今年度の途中、女性准教授が本学の他部局に昇任転出したため、准教授の比率が下がり、助手助教を除く女性教員の比率が下がった。小さい部局であるため年度における採用数は少ないが、新規採用の比率は良かったと言える。大学院学生博士前期課程の女性比率は平成 26 年度は 20%と高かったが、平成 27 年度、28 年度は 10%程度と低くなっている。大学院生博士課程後期は 16%と前年度前々年度に比べ 3%上昇しており、これは、平成 26 年度の博士前期課程の女性比率が 20%と大きかったことに影響していると考えられる。

３．前年度より改善された点

医工学研究科は工学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科、災害科学国際研究所、環境保全センター、NICHE と共同で東北大学 工学系研究科 女性研究者 育成支援推進室 ALicE(Association of Leading Woman Researchers in Engineering) において、女子学生や女性教員を対象に支援活動が行われている。また、工学系の合同の男女共同参画委員会も複数回行われ、他部局も交えての問題の認識、情報の共有化などが行われている。また、サイエンスリーダーズキャンプにて、東北大学の男女共同参画の取り組みや ALicE の活動についても紹介がなされ、高校の教員などに対する女子学生の理系啓発に関する活動が行われている。また、出前講義やオープンキャンパスでも女性教員が講演を行うなどしており、中高生などの次世代にキャリアモデルやロールモデルを示す機会となっている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

医工学研究は工学を基盤とするため、特に女性教員の上位職に関しては候補者が少ない状況である。また、小さい部局であるが若手教員の多いため、人事の大きな動きがないことも挙げられる。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度もこれまでと同様に ALicE により、データの整理や解析などを行いながら、女子学生の活躍や女性教員の活躍をより見えるようにすることや、他部局と連携して共同で課題に対応しながらの支援について、引き続き有効な支援などを検討しながら支援活動等を行っていく。

サイエンスリーダーズキャンプでも東北大学の男女共同参画活動や支援や、ALicE の支援活動を引き続き紹介し、女子学生の進路選択に大きく関わる高校教員の男女共同参画の意識啓発について行う。また、出前授業やオープンキャンパスでも積極的に女性教員の見える化を図り、次世代の女子学生や保護者などの意識啓発を行う。

採用については、外部資金での積極的な女性教員の採用や、各分野の学会での当該女性教員の発掘などを積極的に行っていくことなどを検討している。

教育情報学研究部・教育部

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／4 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）
准 教 授	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
講　　師	名／名中（%）	名／名中（%）	名／名中（%）
助教・助手	0 名／3 名中（0%）	1 名／4 名中（25%）	1 名／4 名中（25%）
計(助手･助教含む)	0 名／9 名中（0%）	1 名／9 名中（11%）	1 名／9 名中（11%）
計(助手･助教除く)	0 名／6 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）
大学院学生※2 (博士後期課程)	8 名／23 名中（35%）	7 名／26 名中（27%）	8 名／24 名中（33%）
大学院学生※2 (博士前期課程)	15 名／24 名中（63%）	18 名／26 名中（70%）	21 名／27 名中（78%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／0 名中（%）	1 名／1 名中（100%）	0 名／0 名中（%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

教育情報学研究部・教育部は小さい部局であるため採用数も少ないのが現状である。平成 27 年度は女性 1 名（助教）を採用した。28 年度の採用は無かった。

３．前年度より改善された点

女子学生の比率も博士課程前期に関しては年々増加傾向にある。大学院生博士前期課程の比率は前年度より増加し 78%となった。後期課程の比率はここ数年概ね 3 割を維持している。女性の博士後期課程修了者も出てきており、今後女性研究者が増えていくことが期待される。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

教育情報学研究部は平成 14 年の創立の教員数 10 名ほどの小規模な独立大学院で歴史も浅い。そのため、教員の新規採用の機会になかなか恵まれないことが女性教員の割合が増えない原因である。また教育情報学はまだ新しい研究領域であるため、他大学においても採用枠そのものが少なく、そのため女性研究者が長く研究を続けられる環境にないことも一因となっていると思われる。

５．次年度の具体的対応策

教員の新規採用の機会においては、今後とも女性教員の採用に積極的に取り組みたい。

金属材料研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／33 名中（0%）	0 名／31 名中（0%）	0 名／33 名中（0%）
准 教 授	2 名／37 名中（5%）	2 名／34 名中（6%）	3 名／34 名中（9%）
講　　師	0 名／2 名中（0%）	0 名／3 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）
助教・助手	3 名／62 名中（5%）	6 名／68 名中（9%）	8 名／69 名中（12%）
計（助手・助教含む）	5 名／134 名中（4%）	8 名／136 名中（6%）	11 名／138 名中（8%）
計（助手・助教除く）	2 名／72 名中（3%）	2 名／68 名中（3%）	3 名／69 名中（4%）
大学院学生※2（博士後期課程）	9 名／71 名中（13%）	10 名／72 名中（14%）	13 名／64 名中（20%）
大学院学生※2（博士前期課程）	15 名／142 名中（11%）	12 名／124 名中（10%）	9 名／119 名中（8%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／15 名中（0%）	3 名／20 名中（15%）	4 名／20 名中（20%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

金属材料研究所では、今年度女性教員 4 名の新規採用、1 名の転出の結果、女性教員数が 3 名増加して 11 名となった。その比率は昨年度比 2%増の 8%になった。

３．前年度より改善された点

金属材料研究所では、今年度女性教員３名増の 11 名、比率は 2%増の 8%となった。一昨年の女性教員５名（４%）の状況から２年連続して改善されており、その比率は過去最大となった。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

金属材料研究所では、昨年度、今年度と女性教員の新規採用が 3-4 名、比率 15-20%と在籍者数を越えており、改善が進展した。今後ともこの勢いを維持することが不可欠である。特に、分野の女子学生の増加と安定職を考える上での任期制について、間挙げる必要があろう。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度から平成 30 年度までに、金属材料研究所への助教として、および上位職への応募における粘り強い勧誘のために、以下の対策を検討する。

① 教員公募要項への“男女共同参画を推進している”旨の記載の励行。
② 女性教員数の増加に向けたより積極的な施策の検討。
③ 女性教員の活躍促進のための各種所内委員会へ登用。
④ 女性教員の研究活動支援にむけた優遇策の検討。
④ 女子学生・研究者の増加に向けて、学会等を通じた一層の活動。
⑤ トイレ、休憩室等環境設備のニーズに合った継続的整備。
⑥ 子育て中の男女教職員を支援するための情報交換会、セミナー等の開催。

加齢医学研究所

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	２名／21 名中（10%）	２名／21 名中（10%）	２名／20 名中（10%）
准 教 授	０名／10 名中（0%）	０名／７名中（0%）	０名／８名中（0%）
講　　師	０名／３名中（0%）	０名／３名中（0%）	０名／３名中（0%）
助教・助手	２名／22 名中（9%）	３名／25 名中（12%）	４名／30 名中（13%）
計（助手･助教含む）	４名／56 名中（7%）	５名／56 名中（9%）	６名／61 名中（10%）
計（助手･助教除く）	２名／34 名中（6%）	２名／31 名中（6%）	２名／31 名中（6%）
大学院学生※2 （博士後期課程）	12 名／61 名中（20%）	15 名／60 名中（25%）	17 名／68 名中（25%）
大学院学生※2 （博士前期課程）	13 名／40 名中（33%）	12 名／33 名中（36%）	18 名／33 名中（55%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の数、平成 28 年度は１月１日の数
※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
０名／４名中（0%）	２名／11 名中（18%）	１名／６名中（16%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の比率、平成 28 年度は１月１日の比率

加齢医学研究所では、平成 27 年度に２名、平成 28 年度に１名の女性助教が新規採用された。

３．前年度より改善された点

加齢医学研究所では、1 名の女性助教が新規採用されたことにより、徐々に女性教員比率は上昇している。また、加齢医学研究所の所属教員が指導教員となっている女子大学院の比率も上昇している。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

加齢医学研究所では、特別に障害となっている点は少ないと思われる。大学院生の所属が、医学研究科、生命科学研究科、歯学研究科、医工学研究科と多岐にわたっているため、より一層の改善のためには、それぞれの研究室での努力に委ねられているところも大きいと思われる。

５．次年度の具体的対応策

星陵地区男女共同参画ネットワークに出席することによって、各部局における現状と課題に対する対応策について、すなわち最も身近な事例を参考にして、改善を図っていく。次年度以降の教員の採用の際に、男女比率の改善を目指して努力する。教職員および学生の意識改革を進め、長期的な視野煮立ち、現在受け入れている女子大学院生、女性研究者を育成していく。

流体科学研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／15 名中（0%）	0 名／15 名中（0%）	0 名／15 名中（0%）
准 教 授	1 名／11 名中（9%）	1 名／12 名中（8%）	1 名／12 名中（8%）
講　　師	1 名／2 名中（50%）	0 名／1 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	0 名／13 名中（0%）	0 名／13 名中（0%）	1 名／14 名中（7%）
計(助手･助教含む)	2 名／41 名中（4%）	1 名／41 名中（3%）	2 名／41 名中（4%）
計(助手･助教除く)	2 名／28 名中（7%）	1 名／28 名中（4%）	1 名／27 名中（3%）
大学院学生※2 (博士後期課程)	3 名／42 名中（7%）	2 名／39 名中（5%）	2 名／39 名中（5%）
大学院学生※2 (博士前期課程)	1 名／98 名中（1%）	6 名／102 名中（6%）	8 名／119 名中（6%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／3 名中（0%）	0 名／2 名中（0%）	1 名／2 名中（50%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

流体科学研究所では、今年度に 1 名の女性教員を新規採用し、准教授 1 名および助教 1 名が教員として在籍することとなった。女性教員の割合は全教員数の 4%程の割合となっている。研究所

を構成する研究分野が主として工学部の機械系に協力講座として属しており、研究分野からしても女性研究者の少ない状況は変わらず、女性教員獲得に向けて努力をはらわなければならない。ここ数年女性教員の在籍を維持してきた実績があるので、引き続き教員新規採用においては積極的な女性登用を推し進めていく。

３．前年度より改善された点

流体科学研究所では、女性教員の積極的な新規採用に向けて、昨年度に引き続き本年度のテニュアトラック外国人准教授公募においても、女性を積極的に採用すること、および文部科学省のプログラムを利用し、スタートアップ研究経費を配分することとした。これにより 1 名の女性教員が助教として着任することになり、部局として積極的にスタートアッププログラムが利用できるよう環境を整えた。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

流体科学研究所では、在籍女性教職員の職場環境の改善と今後の新規女性教員の採用に最大の努力をはらっているが、先述の通り研究分野における女性研究者の絶対数が少ないところが障害となっている。中長期的な視野に立ち、当該分野における女子学生の育成を理系他部局と協力して進めていくことをしなければならない。今後、東北大学サイエンス・エンジェルや工学系女性研究者育成支援推進室（ALicE）のような全学的な活動にも、部局として積極的に協力していくことが必要になるかと思われる。

５．次年度の具体的対応策

平成 29 年度においても、引き続き教員公募の際に「東北大学は男女共同参画を推進している」および「子育て支援の詳細等、男女共同参画の取り組みについては下記の URL を参照のこと」に相当する文言を明記し、女性研究者が申請しやすい公募体制を取り、広く採用者への周知を図っていく。また、新たに着任いただいた女性教員に、男女共同参画 WG の活動についてオブザーバ的立場から意見をいただく機会を設けていく。

電気通信研究所

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／24 名中（0.%）	0 名／22 名中（0%）	0 名／24 名中（0%）
准 教 授	0 名／19 名中（0%）	0 名／19 名中（0%）	1 名／22 名中（4%）
講　　師	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）	0 名／0 名中（0%）
助教・助手	1 名／24 名中（4%）	1 名／23 名中（4%）	0 名／20 名中（0%）
計（助手・助教含む）	1 名／67 名中（1%）	1 名／64 名中（1%）	1 名／66 名中（1%）
計（助手・助教除く）	0 名／43 名中（0%）	0 名／41 名中（0%）	1 名／46 名中（2%）
大学院学生※2（博士後期課程）	2 名／37 名中（5%）	1 名／36 名中（3%）	1 名／36 名中（2%）
大学院学生※2（博士前期課程）	8 名／124 名中（6%）	13 名／122 名中（11%）	11 名／135 名中（8%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／6 名中（0%）	1 名／4 名中（25%）	1 名／6 名中（20%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は３月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

電気通信研究所では、①平成 25 年度に策定した部局ビジョンに従い自主財源による「女性教員特別枠」を新設して女性教員を積極的に雇用すると共に、②学内頭脳循環の一環として、本所教授選考プロセスを経た後、原子分子材料科学高等研究機構（AIMR）に赴任する人事を実施した。この結果、平成 27 年度実績（女性教員：助教 1 名雇用、教員比率：1.52%）と比べ、平成 28 年度は教員比率（女性教員 3 名雇用（教授 1 名（AIMR 赴任分）、准教授 1 名、助教 1 名）、教員比率：4.48%）の向上を達成した。研究分野の性格上女子学生や女性研究者が元々少ないという現状ではあるものの、引き続き男女共同参画への取組をより一層強化し、女性比率のさらなる向上に努めたい。

３．前年度より改善された点

TUMUG 支援事業、仙台 I ゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業、男女共同参画シンポジウムなど、男女共同参画に関連する各種アナウンスを全構成員に積極的に行うなど、所内への男女共同参画事業に関する啓蒙活動を進めた。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

研究分野の性格上、女性研究者及び女子学生の数が少ないことが大きな障害になっている。まずは、女子学生の数を増やし、若手女性研究者の母集団を増やすことが重要であると考えられる。そのため、女子学生の積極的な大学院への進学等の進路指導や、新しい学際領域の創成など様々努力をしているところである。実際に、7 月に行われたオープンキャンパスにおいて、学部生 2 名、博士前期課程学生 4 名の女子学生ボランティアが参加して、女子学生のロールモデルを高校生に紹介した。このような努力もあり、女子学生の割合は前年度に比べ倍増した平成 27 年度の人数をほぼ維持しており、徐々にではあるが成果が出つつあると思われる。

５．次年度の具体的対応策

引き続き、男女共同参画への取組に努力する。平成 28 年度に新規で採用した女性准教授の研究環境支援に向けてスタートアップ研究費などの情報を伝えると共に、女子学生、特に博士後期課程の女子学生の数が増えるよう、積極的な大学院への進学等の進路指導を行う。また、研究所公開などで女性研究者・女子学生の活躍の様子を積極的に紹介する。

多元物質科学研究所

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	1 名／44 名中（2%）	1 名／42 名中（2%）	2 名／47 名中（4%）
准 教 授	0 名／33 名中（0%）	0 名／32 名中（0%）	0 名／29 名中（0%）
講　　師	0 名／3 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）	0 名／6 名中（0%）
助教・助手	4 名／60 名中（7%）	4 名／58 名中（7%）	5 名／72 名中（7%）
計（助手・助教含む）	5 名／140 名中（4%）	5 名／137 名中（4%）	7 名／154 名中（5%）
計（助手・助教除く）	1 名／80 名中（1%）	1 名／79 名中（1%）	2 名／82 名中（2%）
大学院学生※2（博士後期課程）	4 名／62 名中（6%）	8 名／68 名中（12%）	7 名／72 名中（10%）
大学院学生※2（博士前期課程）	25 名／222 名中（11%）	27 名／223 名中（12%）	37 名／199 名中（19%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
1 名／7 名中（14%）	1 名／9 名中（11%）	2 名／32 名中（6%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

多元研では今年度２名の女性教員を採用した。今年度新規採用の母数が増えているため、割合としては昨年より減少しているが、採用人数としては増加した。

３．前年度より改善された点

多元研では平成 24 年度に「女性教員比率向上への対応に関する申合せ」を制定し、女性教員特別枠を設けている。しかし、今年度はその枠での採用はなかった。今年度は承継職員枠で１名を採用しており、今後につながるものと考えている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

多元物質科学研究所の研究分野である理工系（特に工学系）には、女性研究者が少なく候補者が少ないことが障害となっていると思われる。女性教員のサポートだけではなく、女子学生のサポートにも力を入れていき、博士課程の学生を増やす必要がある。また教員数が多いため、女性教員の比率の改善はなかなか困難であるが。

５．次年度の具体的対応策

来年度は、引き続き女性教員の採用を人事委員会の努力目標として喚起し、比率の回復を図るほか、女子学生へのサポートも行っていく。来年度早々には女子学生の博士後期課程への進学をエンカレッジメントするセミナーを開催予定である。

さらに女性教員数の向上をめざすために下記２点を行う。

１．　財政的優遇措置については、所内経費により女性教員特別枠を設けて、女性採用を促進する。
２．　新規採用の公募に関して女性教員の採用について努力する。

災害科学国際研究所

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／20 名中（0.0%）	0 名／21 名中（0.0%）	0 名／21 名中（0.0%）
准 教 授	4 名／15 名中（26.7%）	4 名／14 名中（28.6%）	4 名／14 名中（28.6%）
講　　師	1 名／2 名中（50.0%）	1 名／2 名中（50.0%）	1 名／2 名中（50.0%）
助教・助手	8 名／29 名中（27.6%）	8 名／28 名中（28.6%）	9 名／32 名中（28.1%）
計（助手・助教含む）	13 名／66 名中（19.7%）	13 名／65 名中（20.0%）	14 名／68 名中（20.6%）
計（助手・助教除く）	5 名／37 名中（13.5%）	5 名／37 名中（13.5%）	5 名／36 名中（13.9%）
大学院学生※2（博士後期課程）	6 名／23 名中（26.1%）	6 名／25 名中（24.0%）	10 名／32 名中（31.3%）
大学院学生※2（博士前期課程）	11 名／50 名中（22.0%）	12 名／44 名中（27.3%）	16 名／54 名中（29.6%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
3 名／5 名中（60.0%）	1 名／6 名中（16.7%）	1 名／2 名中（50.0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

災害科学国際研究所では、積極的に女性教員の拡充を目指した採用方針をとっている。これを反映して、全体の女性構成員比率（助手・助教含む）は平成 26 年度 19.7%、平成 27 年度 20.0%、平成 28 年度 20.6%、女性構成員比率（助手・助教除く）は平成 26 年度 13.5%、平成 27 年度 13.5%、平成 28 年度 13.9%と上昇している。

３．前年度より改善された点

災害科学国際研究所では、東北大学工学系研究科女性研究者育成支援推進室 ALicE での取り組みもあり、女性研究者の就業環境は改善されている。特に研究助成プログラムは当研究所の女性研究者にとっても貴重な研究費となっている。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

現時点で大きな障害はない。

５．次年度の具体的対応策

今後も引き続き、教員の採用においては、男女比率のより一層の向上を目指して努力する。また、全学やALicEにおける男女共同参画への取り組みを所員に一層浸透させ、男女ともに働きやすい職場環境を目指して、男女共同参画を推進していく。

東北アジア研究センター

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／10 名中（0%）	0 名／11 名中（0%）	0 名／10 名中（0%）
准 教 授	0 名／6 名中（%）	0 名／6 名中（0%）	0 名／6 名中（0%）
講　　師	名／名中（%）	名／名中（%）	名／名中（%）
助教・助手	1 名／7 名中（14%）	1 名／7 名中（14%）	1 名／6 名中（14%）
計（助手・助教含む）	1 名／23 名中（4%）	1 名／24 名中（4%）	1 名／22 名中（4%）
計（助手・助教除く）	0 名／16 名中（0%）	0 名／17 名中（0%）	0 名／16 名中（0%）
大学院学生※2（博士後期課程）	6 名／22 名中（27%）	6 名／21 名中（28%）	6 名／20 名中（30%）
大学院学生※2（博士前期課程）	2 名／13 名中（15%）	0 名／14 名中（0%）	4 名／18 名中（22%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数
※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
0 名／0 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）	0 名／1 名中（0%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

東北アジア研究センターでは、平成 28 年度に 1 件の助教の採用人事を行ったが、女性の応募者がいなかった。しかし、本センターが参加する全国プロジェクトを運用する外部組織が雇用して派遣する研究員 1 名を客員研究支援者として受け入れた。またサバティカル中の他大学の女性教員 1 名を客員研究支援者として受け入れた。

３．前年度より改善された点

東北アジア研究センターでは、本年度上述の助教採用人事 1 件のほか専任の人事案件がなかったことから女性教員比率向上を達成できなかったが、客員研究支援者として女性 2 名を受け入れたことにより、女性研究者に研究の場を提供できた。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

東北アジア研究センターは、承継枠定員 23 名の比較的小さな部局であることと、予算削減などの影響もあって新規人事を起こす機会自体が限られている。しかしながら、承継枠定員以外の助教・教育研究支援者については、女性の採用に最大限努力している。

５．次年度の具体的対応策

女性研究者の着実な増加を期すための方策を男女共同参画ワーキンググループおよび執行会議で検討し、全体会議で周知する。もし教員採用人事が発生した場合には「男女共同参画推進のための東北大学宣言」の理念に則ってこれを実施する。

平成 28 年度から平成 33 年度までに本学「第 3 期中期計画」における女性教員比率の達成目標実現に寄与するため、新規採用の 30%を女性とすることに努力する。

病院

１．女性構成員比率の推移（過去 3 年間）

職 名 等	平成 26 年度*	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	0 名／5 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）	0 名／5 名中（0%）
准 教 授	3 名／17 名中（18%）	3 名／17 名中（18%）	2 名／18 名中（11%）
講　　師	6 名／60 名中（10%）	6 名／61 名中（10%）	5 名／62 名中（8%）
助教・助手	63 名／279 名中（23%）	76 名／292 名中（26%）	77 名／287 名中（27%）
計(助手･助教含む)	72 名／361 名中（20%）	85 名／375 名中（23%）	84 名／372 名中（23%）
計(助手･助教除く)	9 名／82 名中（11%）	9 名／83 名中（11%）	7 名／85 名中（8%）

※　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去 3 年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
16 名／84 名中（19%）	25 名／83 名中（30%）	16 名／65 名中（25%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

病院では、平成 28 年度、新規採用者の女性比率は 25%であった。しかし、助教・助手を除く教員数は 85 名中、女性教員が前年度 9 名から 7 名（8%）となった。

３．前年度より改善された点

定点、新規採用ともに前年度からの女性教員の登用を示す数字は不変ないしは減少した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

1)　星陵キャンパス内で部局間（例：病院と医学系研究科等）の異動が発生している。
2)　市中病院の女性医師支援策が徐々に充実してきており、働き方が多様化してきた。
3)　医学科卒業生は大学院博士課程修了時に既に 30 歳台半ばに至る者も多いため、競争的研究資金、両立支援策等における本人や子の年齢制限が障害となる。
4)　大学病院の教員は勤務医の役割、研究、教育も担うことから労働時間が長くなりやすい。

５．次年度の具体的対応策

平成 30 年度開所予定の保育所への職員の意見をできる限り反映させる。

専門領域の学会規定に沿い、出産育児との両立を意識した専門医研修プログラムを策定する。医学系各部局での課題を共有し、学内外の男女共同参画推進策を積極的に利活用する。

高度教養教育・学生支援機構

１．女性構成員比率の推移（過去３年間）

職 名 等	平成 26 年度※1	平成 27 年度	平成 28 年度
教　　授	2 名／18 名中（11.1%）	3 名／21 名中（14.2%）	4 名／20 名中（20.0%）
准 教 授	3 名／17 名中（17.6%）	3 名／17 名中（17.6%）	5 名／25 名中（20.0%）
講　　師	3 名／15 名中（20.0%）	6 名／19 名中（31.5%）	9 名／24 名中（37.5%）
助教・助手	9 名／24 名中（37.5%）	6 名／19 名中（31.5%）	6 名／18 名中（33.3%）
計（助手･助教含む）	17 名／74 名中（22.9%）	18 名／76 名中（23.7%）	24 名／87 名中（27.6%）
計（助手･助教除く）	8 名／50 名中（16.0%）	12 名／57 名中（21.0%）	18 名／69 名中（26.1%）

※1　平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の数、平成 28 年度は 1 月 1 日の数

※2　各研究所における大学院学生数は指導教員が各研究所に所属する場合のみ記入

２．新規採用者（教授・准教授・講師・助教・助手）における女性比率（過去３年間）

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
3 名／8 名中（37.5%）	2 名／8 名中（25.0%）	6 名／17 名中（35.3%）

※平成 26 年度、平成 27 年度は 3 月末の比率、平成 28 年度は 1 月 1 日の比率

高度教養教育・学生支援機構では，教員公募の際，「東北大学は男女共同参画の促進に積極的に取り組んでおります」と記載している。

３．前年度より改善された点

平成 28 年度の新規採用者における女性比率は，6 名／17 名中（35.3%）と，平成 27 年度に比べて大幅に増加した。この結果，平成 28 年度の女性教員数とその比率は，全ての教員区分において前年度よりも向上した。

４．改善の上で、障害となっていると思われる点

高度教養教育・学生支援機構では，この 3 年間で女性構成員の比率が増加しており，男女共同参画の実現において大きな障害はないと思われる。ただし，今後も高い女性比率を維持していくためには，育児・介護環境等の改善にも努めていくことが必要である。

５．次年度の具体的対応策

引き続き，公募の際に男女共同参画の推進に取り組んでいることを記載し，女性教員の応募の増加を図る。

本部事務機構

事務系職員の人事

1　採用状況

平成 28 年度の本学事務系職員の新規採用数は 32 名である。そのうち、女性職員は 17 名であり、新規採用者全体に占める割合は 53.1%となっている。

2　職種別女性職員在職状況

H29. 1. 1 現在

職　種	全体数	女性職員数（内数）	比　率（%）
部　長	14		0.0%
課長・事務長	63	3	4.8%
課長補佐等	72	10	13.9%
係長等	288	65	22.6%
主任	276	121	43.8%
一般職員	286	153	53.5%
再雇用職員	20	4	20.0%
計	1,019	356	34.9%

技術系職員の人事

1　採用状況

平成 28 年度の本学技術系職員の新規採用数は 5 名である。そのうち、女性職員は 1 名であり、新規採用者全体に占める割合は 20.0%となっている。

2　職種別女性職員在職状況

H29. 1. 1 現在

職　種	全体数	女性職員数（内数）	比　率（%）
統括技術専門員	11		0.0%
技術専門員	29	2	6.9%
技術専門職員	158	33	20.9%
技術一般職員	151	36	23.8%
再雇用職員	33	3	9.1%
計	382	74	19.4%

注）医療技術職員（看護師、臨床検査技師等）を除く。

3　今後の方針（人材の確保）

国立大学法人等職員統一採用試験職員(法人試験)の合格者に第 2 次試験(面接等)を実施し採用者を決定するほか、新卒学生等を対象とした独自採用試験、民間企業等での経験を有する者を対象とした独自採用試験、本学の非常勤職員等を対象とした職員登用試験を平成 29 年度も実施する。試験は男女の区別はなく、能力主義、人物本位に行っており、公平性に留意し実施している。

大学の業務は、広範・多岐にわたっており、これまでの教育研究活動の支援業務にとどまらず、大学運営の企画立案に積極的に参画し、大学運営の専門職能集団としての機能を発揮することが求められており、これらの趣旨に添った資質・能力をもった職員の採用・人材育成を行っていく必要がある。

第６章　男女共同参画推進センター及び杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の取組

１　男女共同参画推進センターについて

１）男女共同参画推進センター概要

男女共同参画推進センターは、「男女共同参画推進のための行動指針」（平成２５年８月策定）に基づき、本学の男女共同参画活動を円滑に推進することを目的として平成２６年４月に設置された。センターは男女共同参画委員会の指示の下、女性研究者育成支援に関する施策の実施を中心として男女共同参画推進に取り組んでいる。現在、センター長（担当理事）１名、副センター長（兼務教員）３名、協力教員１名、特任講師１名、助教１名、事務補佐員２名、派遣職員 １ 名の体制で、女性研究者向けイベントの実施、東北大学サイエンス・エンジェル活動の運営、ニュースレターの発行、調査研究等を行っている。

２）構成員

センター長	植木　　俊哉	理事（総務・国際展開・事務統括担当）
副センター長	大隅　　典子	総長特別補佐（男女共同参画担当）／医学系研究科教授
副センター長	米永　　一郎	金属材料研究所 教授
副センター長	田中　　真美	医工学研究科／工学研究科 教授（兼務）
協力教員	倉田　　祥一朗	薬学研究科 教授
専任教員	藤村　　維子	特任講師（主任URA）
専任教員	保坂　　雅子	助教
事務補佐員	野中　　久美	事務補佐員
事務補佐員	中戸川　政江	事務補佐員
派遣職員	飛田　　萌子	事務補佐員

３）センターミーティング開催状況

センターでは、副センター長（兼務教員）３名、総務課職員５名、センタースタッフからなるセンターミーティングを毎月１－２回開催し（今年度は合計 20 回の開催）、センター業務の遂行に関わる重要事項を議論している。

４）男女共同参画推進センター愛称・ロゴマーク

当センターでは、大学構成員のセンターへの愛着を高め、男女共同参画へのより深い理解を促すため、センターの使命を分かりやすく表現した愛称とロゴマークを設けている。

愛称　「TUMUG（つむぐ）」

「TUMUG（つむぐ）」とは Tohoku University（東北大学）、Movement（運動、活動）、United（団結、協力）、Gender（ジェンダー、男女）からなる頭字語（アクロニム）。

東北大学が「紡ぐ」男女共同参画の取組が、ムーブメントとして拡がっていくことを目指している。

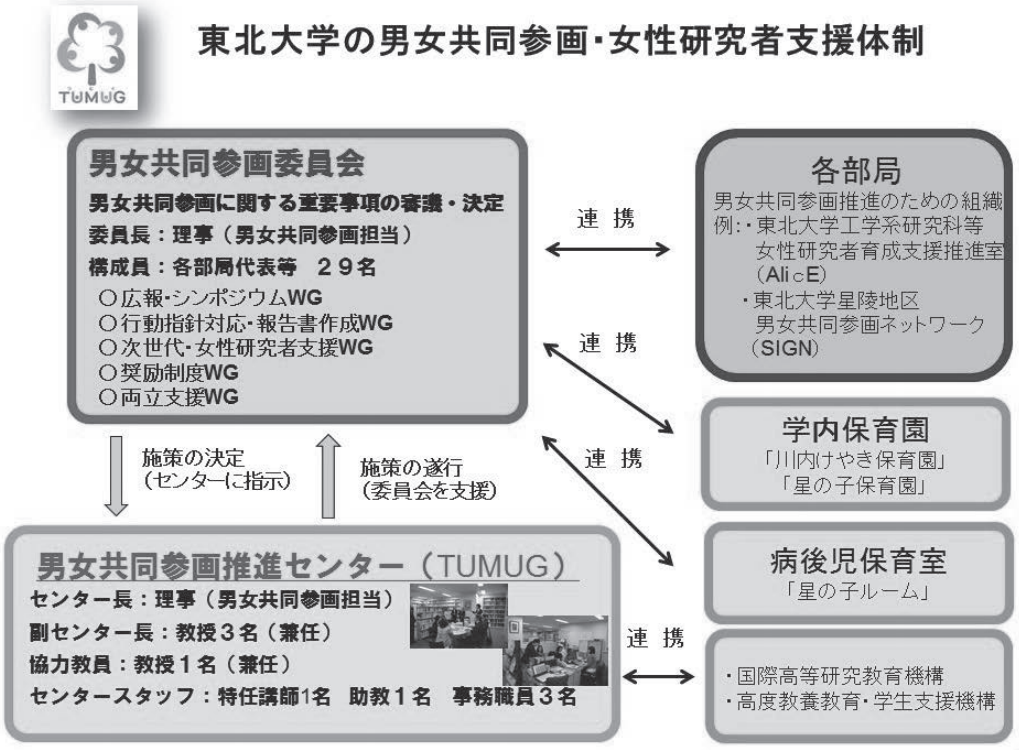
ロゴマーク

杜の都仙台を象徴するケヤキの木をモチーフに、人々が手を取り、支え合う様子をイメージしている。また、葉の形は四葉のクローバーにも見え、幸せな未来も想像される。

東北大学男女共同参画推進センターは、年齢・性別等を問わず、誰もが夢や希望を持って、あらゆる分野で活躍できる社会を目指して、男女共同参画の推進に取り組んでいく。

愛称・ロゴマークは、本センターの設置に伴い平成 26 年８月頃に一般から募集された。全国各地から愛称 126 点、ロゴマーク 30 点の応募があり、その中で最優秀賞として選定されたものである。

５）男女共同参画推進体制における男女共同参画推進センターの位置づけ



２　平成２８年度活動状況

２．１　両立支援・環境整備

当センターでは、ホームページや女性研究者メーリングリスト、フェイスブック、ニュースレターを通じて両立支援に関する制度等に関する情報提供を行った。具体的には、「TUMUG 支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）（以下、TUMUG 支援事業)」募集（１月)、けやき保育園の園児募集（随時)、星の子ルームのニュースレター（年３回)、地域の保育情報等である。特に男女共同参画委員会による TUMUG 支援事業及び杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の両立支援のためのプログラム（研究支援要員・ベビーシッター利用料等補助）の募集にあたっては、メーリングリストで女性研究者へ直接案内し、さらにニュースレター第８号で特集記事を組んで大学構成員への広報･周知に尽力した。

平成２７年度から始めた研究と育児の両立を目指す大学構成員が昼食を囲んで交流する場である TUMUG Café については３回開催した。

杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の一環として、今年度は女性研究者に対象を限定して研究支援要員（C 型）を創設した。

（１）第 2 回 TUMUG Café「仙台市の子育て支援の現状と課題」の開催

○日時・場所

２０１６年４月２０日（水）１２：００－１３：３０

男女共同参画推進センター

○活動概要

子育て中の教職員等を対象に、伊藤仟佐子氏（「のびすく仙台」館長・せんだいファミリーサポート・ネットワーク代表理事）を話題提供者に迎えてカフェ形式で情報提供・意見交換を行った。伊藤氏は、「のびすく仙台」の活用状況や子育て中の親に対するアドバイスを提供した。参加者からは仙台市の保育施設や「のびすく仙台」に関する質問があり、その後、意見交換が行われた。当日は 22 名が参加した。

○実施者

センター：田中真美（医工学研究科　教授）、保坂雅子、野中久美、中戸川政江

（２）第 3 回 TUMUG Café 「どうやって作る？自分の時間・・・」の開催

○日時・場所

２０１６年１０月５日（水）１２：００～１３：３０

男女共同参画推進センター

○活動概要

福與なおみ助教（東北大学病院・遺伝科/遺伝子診療部（兼小児科））を話題提供者として意見交換を行った。福與からは、女性特有のライフイベントで忙しい時期に仕事も大事にしながら上手く仕事と子育てを両立する上での工夫について話題提供があった。助教を中心とする女性研究者１３名（内訳：助教７名、その他４名、センタースタッフ２名）が参加した。

○実施者

男女共同参画推進センター：保坂雅子、野中久美

（３）第４回 TUMUG Café の開催

○日時・場所

２０１７年2月１６日（木）１２：００～１３：３０

男女共同参画推進センター

○活動概要

テーマを特に定めずに自由に子育ての現状や課題について話し合う場を設けた。入試の負担や子どもの体調管理等について女性研究者ら(参加者16名)が話し合った。

○実施者

男女共同参画推進センター：田中真美（医工学研究科　教授）、藤村維子、保坂雅子、野中久美、中戸川政江

２．２　女性リーダー育成

当センターでは、女性リーダー育成支援の一環として、女性研究者向けの交流会や研究活動に役立つセミナーを開催している。本学では、平成２１年度より人物ならびに学識においてすぐれた女性教授を「沢柳フェロー」と称し、ランチミーティング等の実施により若手女性研究者に対するメンターおよびロールモデルとしての役割を積極的に果たしていただいている。今年度は「沢柳フェローランチミーティング」を３回（通算１７回～１９回目）開催して、女性研究者のネットワーク作りに貢献した。うち１回は、例年通り外部資金獲得セミナーとともに実施した。また、平成２７年度に初開催した TUMUG Forum（女性研究者による研究発表・交流会）では、着任後５年以内の女性研究者が研究内容および研究成果を発信し、女性に限らず学内の研究者と交流する場を提供した。

女性研究者の研究活動を支援するため、各種公募情報、研修情報、男女共同参画委員会が女性リーダー育成を目的として行う TUMUG 支援事業（リーダー研究支援要員、スタートアップ研究費、研究スキルアップ経費）に関する情報提供も行っている。

杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の一環として、今年度は女性研究者を対象に「科学研究費助成事業」フォローアップ及び国際学術論文作成のための英文校閲費用補助を創設した。

最後に、本学の女性教員の活躍に光を当てることを目的として、年２回（５月、１月）、

受賞・登用調査を行ってホームページ上で公表している。

（1） 平成２８年度第１回沢柳フェローランチミーティングの開催

○日時・場所

２０１６年5月２５日（木）１２：００－１３：３０

片平北門会館 2F セリシィール

新任女性教員を迎え、沢柳フェロー５名を含む２５名が集い、ランチミーティングを開催した。フェローを代表し、杉本亜砂子教授（生命科学研究科）から生命科学研究科の女性教員の現状報告と自信を持って挑戦することの大切さについてアドバイスをいただいた。その後、軽食を取りながら思い思いに情報交換しました。

○実施者

男女共同参画推進センター：大隅典子（医学系研究科教授）、保坂雅子、野中久美、中戸川　政江

（2）外部資金獲得セミナー・平成２８年度第２回沢柳フェローランチミーティングの開催

○日時・場所

２０１６年9月2日（金）１２：００－１３：３０

片平キャンパス　生命科学プロジェクト総合研究棟会議室 103 号室

○活動概要

講師にリサーチプロフェッサーである栗原和枝教授（多元物質科学研究所）を迎え、外部資金獲得のための情報交換を目的とした沢柳フェローランチミーティングを開催した。当日は、栗原先生の他にも４名の沢柳フェローが参加し、「出願区分の賢い選び方」や「読みやすさの工夫」に関して具体的な助言があった。合計１８名が参加し、参加者の間で活発な質疑応答も交わした。参加者からは「いろいろためになりました」、「早速取り入れて準備したいと思います」等の満足の声が聞こえた。

参加者内訳：教授５、准教授３、助教５、助手２、その他１、センタースタッフ２

○実施者

男女共同参画推進センター：田中真美（医工学研究科教授）、保坂雅子、野中久美、中戸川　政江

（3）第 2 回 TUMUG Forum（女性研究者研究発表・交流会）の開催

○日時・場所

２０１６年１１月８日（火）９：３０－１２：００

星陵キャンパス　星陵会館大会議室・小会議室

○活動概要

本学女性研究者の研究発信および異分野間の人的ネットワーク形成促進を目的としてTUMUG Forum（女性研究者研究発表・交流会）を実施した。２部構成とし、それぞれ沢柳フェローを座長におき、計５名の女性教員が各々20 分間自らの研究を分かりやすく説明した。新任の沢柳フェローも講演を行った。

発表会終了後には、沢柳フェローランチミーティングとして研究交流会を実施し、参加者同士のネットワーク作りに貢献した。当日は５名の沢柳フェローを含む３７名が参加した。

参加者内訳：教授６、准教授２、講師２、助教１４、助手１、その他９、センター関係者３

【講演一覧】

研究発表（第１部）　座長：永次　史（多元物質科学研究所　教授）

・発表１「昆虫腸内共生系から学ぶ腸内フローラと健康の関係」
　大坪　和香子（農学研究科・助教）

・発表２「Effective Monolayer Formation of Ferroelectric Polymer for Organic Electronic」
　朱　慧娥（多元物質科学研究所・助教）

・発表３「金属得意な微生物を利用した汚染浄化と資源回収技術の開発」
　簡　梅芳（環境科学研究科・助教）

研究発表（第２部）　座長：藤田　恭子（国際文化研究科　教授）

・発表４「医学博物館とスリーピング・ヴィーナスをめぐる国際比較研究」
　妙木　忍（国際文化研究科・准教授）

・発表５「内藤湖南の「唐宋変革」論およびその射程」
　朱　琳（国際文化研究科・講師）

沢柳フェローによる講演　座長：大隅　典子（医学系研究科　教授）

「時計回りの器官形成を支える集団細胞移動」

倉永　英里奈（生命科学研究科・教授）

○実施者

男女共同参画推進センター：大隅典子（医学系研究科　教授）、保坂雅子、野中久美、中戸川政江

２．３　次世代育成

当センターでは、平成１８年度より東北大学サイエンス・エンジェルを運用して次世代育成を推進している。東北大学サイエンス・エンジェルは、自然科学系研究科に所属する女子大学院生が中高生を対象とした出張セミナーやオープンキャンパス、そして小学生を主な対象とした科学イベントの実施等を通して次世代育成に貢献しつつ、自らも成長するというプログラムである。なお、東北大学サイエンス・エンジェルは、仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援とともに男女共同参画委員会による TUMUG 支援事業の一環として実施されている。

杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の一環として、研究職に関するセミナーを2つ開催し、学生用のリーフレットを作成した。

最後に、次世代育成の取組の一つとして昨年度開講した、全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」を継続して開講した。また、各研究科での大学院生オリエンテーションにおいて本センターのリーフレットを配布する等により、本学における男女共同参画の取組の紹介を行った。

今年度の東北大学サイエンス・エンジェル採用者数は、修士５１名、博士１０名の計６１名であった。

／年度	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
理学	10	8	8	4	8	3	10	9	9	12	9
医学系	4	5	6	7	5	3	1	5	12	14	9
歯学	4	2	1	3	4	5	4	1	4	2	1
薬学	5	7	8	6	6	6	8	7	7	4	4
工学	3	8	9	4	6	8	8	11	9	14	15
農学	1	6	5	3	4	5	4	9	10	15	14
情報科学	1	1	2	1	1	1	3	1	0	1	0
生命科学	11	11	7	6	4	4	7	14	13	19	8
環境科学	0	4	2	4	4	3	8	3	3	4	1
医工学	–	–	2	1	2	3	4	3	4	5	0
合計	39	52	50	39	44	41	57	63	71	90	61
修士	19	21	26	23	35	30	42	44	62	72	51
博士	20	31	24	16	9	11	15	19	9	18	10

（１）　全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」の提供

ジェンダー教育を目的として平成２７年度に再開講した全学教育科目基幹科目（社会論）「ジェンダーと人間社会」（木曜２限、前期・後期各 15 回、2 単位、コーディネーター：三隅　多恵子法学研究科講師、大隅　典子医学系研究科教授、保坂　雅子本センター助教）では、本センターの副センター長３名及び専任教員が担当教員として担当し、１年生を中心とする学生の男女共同参画への意識醸成に努めた。

「ジェンダーと人間社会」の担当教員および講義内容は以下の通り。

担当教員（５０音順）	講義内容
朝倉　京子（医学系研究科・教授）	「ジェンダーとケアワーク」
大隅　典子（医学系研究科・教授）	「性はどのように決まるか？」
瀧　　靖之（加齢医学研究所・教授）	「画像から見る脳の発達、加齢と性差」
田中　真美（医工学研究科/工学研究科・教授）	「工学系における女性研究者・技術者育成の取組と展開」
中村　文子（学際科学フロンティア研究所・助教）	「国際社会とジェンダー」、「国際社会とジェンダー：人身売買と女性」
保坂　雅子（男女共同参画推進センター・助教）	「イントロダクション」、「教育とジェンダー」、「働くこととジェンダー」、「まとめ」
山元　大輔（生命科学研究科・教授）	「脳と遺伝子からみたジェンダー:ハエが教えてくれたこと」
吉田　浩（経済学研究科・教授）	「男女共同参画社会の経済科学的証明」
米永　一郎（金属材料研究所・教授）	「男女共同参画への東北大学の取組」
李　　善姫（東北アジア研究センター・教育支援協力者）	「「再生産労働」のグローバル化と移動する女性たち」、「震災とジェンダー」

（2）セミナー「研究職の魅力を伝える」

○日時・場所

２０１７年2月２４日（金）１３：３０－１６：００

片平キャンパス　生命科学プロジェクト総合研究棟会議室 A

○活動概要

本学卒業生による講演の後、グループトークで、講師およびサイエンス・エンジェルを囲んで、研究職の実際について話した。SA が東北大学サイエンス・エンジェルの活動について紹介した。

【講演一覧】

「機械系から病気を探る・治療する」

安西　眸氏（東北大学　学際科学フロンティア研究所　助教）

「自立した女性の条件～研究で磨かれる問題解決能力と創造性～」

大野　直子氏（北海道大学　大学院工学研究院　材料科学部門　助教）

「女性研究者のリアル」

戸谷　梓氏（中外製薬株式会社　製薬研究部（合成技術担当）研究員）

○実施者

男女共同参画推進センター：大隅典子（医学系研究科　教授）、藤村維子、　保坂雅子、

野中久美、中戸川政江
実施 SA：3 名
滝沢翠里（工学 M2）、近藤なな（生命科学 M2）、秋山佳央（生命科学 M1）

（3）東北大学男女共同参画セミナー「研究者ってなに？～留学・海外滞在編～」
○日時・場所
２０１７年3月２５日（土）１３：３０―１５：３０
TKP ガーデンシティ仙台 アエル 13F 会議室
○活動概要
文部科学省科学技術人材育成費補助金ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業（H28～H33)」の一環としてセミナーを開催した。女性研究者の長期海外留学経験者や海外で活躍する研究者などを招き、留学することで「何が得られ」「何が大変で」「どうしたら安全に過ごし帰国できるか」「海外で活躍する研究者になるにはどうしたらよいか」「一流の社会人になるために留学は必要か」「人生設計や人との出会いにおける留学経験とは何か」「留学のホンネとタテマエとは何か」「東北大学の留学支援はどのようになっているか」などを紹介していただいた。終了後、懇談会も開催した。

【講演一覧】
「夢を叶える方法～If you can dream it, you can make it come true.～」基調講演
木村 基祝（三菱重工業株式会社）
「サプライチェーンを通じた資源利用と環境・社会的責任」
松八重 一代氏（東北大学環境科学研究科 教授）
「スタンフォード・シリコンバレーの空は青かった
鈴木 杏奈氏（東北大学流体科学研究所 助教）
○実施者
男女共同参画推進センター：大隅典子（医学系研究科　教授）、田中真美（医工学研究科教授）、藤村維子、　野中久美、中戸川政江

(4)「サイエンス・エンジェル活動」
１）平成２８年度　サイエンス・エンジェルオリエンテーション
○日時・場所
２０１６年6月４日（土）１３：３０－１５：３０
片平キャンパス　片平北門会館　エスパス
○活動概要

平成 28 年度に任命された東北大学サイエンス・エンジェル（SA）を対象に、オリエンテーションを実施した。第一部では、副センター長の田中真美先生（医工学研究科/工学研究科教授）からの挨拶の後、協力教員である倉田祥一郎先生（薬学研究科教授）が SA の趣旨を説明した。SA 活動の紹介として、平成 27 年度の活動に参加した SA３名が出張セミナー、体験型科学イベント、オープンキャンパスでの体験を発表し、新しい SA に SA 活動の面白さを伝えた。第一部閉会の挨拶は副センター長の米永一郎先生（金属材料研究所教授）が行い、SA 活動を研究にも生かすようにメッセージを送りました。第二部では、各々が決めたテーマについて SA をインタビューする「交流タイム」を行った後、SA 活動を始めるにあたっての心得や注意事項、今年度の活動計画の説明を行った。オリエンテーション終了後、SA 輝友会と共催で茶話会を開き、SA 同士の交流を深めた。

○参加者

SA４３名

副センター長　米永一郎（金属材料研究所　教授）

副センター長　田中真美（医工学研究科/工学研究科　教授）

センター協力教員　倉田祥一朗（薬学研究科　教授）

SA 輝友会役員　高橋さやか（生命科学研究科 URA・広報担当特任助教）

センター３名（保坂雅子、野中久美、中戸川政江）

２）平成２８年度　サイエンス・エンジェル活動準備会

○日時・場所

２０１６年6月１日（水）１３：００－１４：３０

片平キャンパス　片平北門会館エスパス

２０１６年6月３日（金）１０：３０－１２：００

青葉山キャンパス　青葉記念会館

２０１６年6月６日（月）１４：００－１５：３０

星陵キャンパス　星陵会館大会議室・小会議室

○活動概要

サイエンス・エンジェルの活動経験がないＳＡを主な対象とし、サイエンス・エンジェル活動をする準備として、活動準備会を合計 3 回実施し、個別の活動内容および活動の手続きについて説明し、理解してもらった。参加者同士が個別に話をする時間を設け、SA と SA 関係者および SA 同士のコミュニケーション向上を図った。

○実施者

6 月 1 日

副センター長　米永一郎（金属材料研究所　教授）、磯貝恵美子（農学研究科　教授）、SA11 名、センター3 名（保坂雅子、野中久美、中戸川政江）

参加 SA：福與悠里 (理学 M1)、大澤沙優里 (薬学 M1)、遠藤夏奈江 (工学 M１)、鎌田さやか (工学 M1)、田中恵理 (工学 M1)、中林真悠 (工学 M1)、野田沙矢佳 (工学 M１)、細田夏光 (工学 M１)、小舘愛 (農学 M2)、那花友莉恵 (農学 M2)、鎌田しずか (生命科学 M1)

6 月 3 日

副センター長 田中真美（医工学研究科/工学研究科　教授）、瀬戸文美（工学系女性研究者育成支援推進室）、SA8 名、センター3 名（保坂、野中、中戸川）

参加 SA：佐々木花 (理学 M1)、熊谷祐穂 (理学 D1)、川口里紗 (薬学 M１)、松野優紀 (工学 M1)、後藤萌 (農学 M1)、小林エリ (農学 M1)、西山智穂 (農学 M1)、秋山佳央 (生命科学 M1)、

6 月６日

副センター長 大隅典子（医工学研究科　教授）、松生香生（医学系研究科 助教）、SA9 名、センター2 名（保坂雅子、野中久美）

参加 SA：菊地杏子 (医学系 M1)、佐藤花保 (医学系 M1)、宮本眞沙子 (医学系 M1)、山内しのぶ (歯学 D2)、宮間志帆 (工学 M1)、金戸悠梨子 (農学 M1)、新實香奈枝 (農学 M2)、古川睦実 (農学 M2)、新藤一葉 (生命科学 M1)

３）学都仙台・宮城サイエンスデイ２０１６への出展

「ちくちく縫って LED 体験」・「サイエンス・エンジェルと学ぼう」

〇日時・場所

２０１６年7月１７日（日）９：００－１７：００

青葉山キャンパス　東北大学カタールサイエンスキャンパスホール

〇活動概要

学都「仙台・宮城」サイエンスデイ２０１６（主催：ＮＰＯ法人 natural science）において、東北大学カタールサイエンスキャンパスを会場にして２つのプログラムを午前（１０:００～１２：００）及び午後（１３：３０～１５：３０）に2回実施した。「ちくちく縫って LED 体験」（２０１４年～）は、小学校３年生～中学校１年を対象に工学系女性研究者育成支援推進室(ALicE)と協力して実施した。参加者６１名（見学者３２名）が導電糸を使ってエコバックを作った。「サイエンス・エンジェルと学ぼう」（２０１５年～）では、小学校５年生～中学校３年の参加者３３名が３グループに分かれてブース（てこの原理でロケットを飛ばそう！・カラフル燃料電池をつくろう！・”変な形“の面積を求めよう！）を順に回り、原理について説明を聞いた上で、工作や実験をした。「ちくちく縫って LED 体験」は、サイエンスデイ AWARD で以下の２賞を受賞した。

・「将来の科学者になって欲しいで賞」（東北大学大学院工学研究科 入試広報企画室 特任教授 中瀬 博之）

・「心に鮮やかインプレッ賞」（理化学研究所 光量子工学研究領域　テラヘルツ光研究グループ グループディレクター　大谷知行）

○実施者
SA２０名（各プログラム１０名）、センター１名（保坂雅子）、
工学系女性研究者育成支援推進室１名（瀬戸文美）
SA：
＜ちくちく縫って LED 体験＞
【コア】鍋島史花(工学 M2)、畠山ありさ(生命科学 M2)、
【サポート】菊地杏子(医学系 M1)、安部瑛里奈(薬学 M2)、田中恵理(工学 M1)、松野優紀(工学 M1)、後藤萌(農学 M1)、西山智穂(農学 M1)、新藤一葉(生命科学 M1)、上野友紀(生命科学 M2)
＜サイエンス・エンジェルと学ぼう＞
【コア】滝沢翠里(工学 M2)、邉見ふゆみ(工学 M2)、小澤友美(理学 D3)
【サポート】佐々木花　　(理学 M1)、大澤沙優里(薬学 M1)、鎌田さやか(工学 M1)、大野敦子(工学 M2)、小林エリ(農学 M1)、新庄梨沙(農学 M1)、古川睦実(農学 M2)

４）オープンキャンパス for 女子高校生 2016
○日時・場所
２０１６年7月２７日（水）・２８日（木）いずれも１２：００－１３：３０
青葉山キャンパス　理学研究科合同Ａ棟 第２・３共通講義室（２０４・２０５号室）
○活動概要
理系学部への進学を志す女子高校生の進路選択の一助として、東北大学のオープンキャンパスに参加し、「オープンキャンパス for 女子高生２０１６ by サイエンス・エンジェル」を２日間にわたり実施した（共催：理学研究科）。各日、若手女性研究者２名および SA１名による講演（合計４５分間）および女子高校生とのグループトーク（進路相談・研究紹介）（４５分間）を行った。１日目は約１００名、２日目は約７０名の女子高校生及びその家族が来場した。

【講演一覧】
１日目
「微生物の力で生ゴミからエネルギーをつくる！」
多田千佳（農学研究科　准教授）
「動く！タンパク質～生物物理学とは？～」
林久美子（工学研究科応用物理学専攻　助教）
「シミュレーションで宇宙を探る」
石井彩子（工学研究科航空宇宙工学専攻　博士課程後期３年）

２日目
「物理学の側面から探る生体機能」
佐久間由香（理学研究科物理学専攻　助教）
「木から森へ： 災害学は森をみる研究」
Carine J. Yi（災害科学国際研究所　助教）
「サンゴが地磁気を記録する？」
熊谷祐穂（理学研究科地学専攻　博士課程後期１年）
○実施者
２７日　SA２１名、副センター長　米永一郎（金属材料研究所　教授）、副センター長　田中真美（医工学研究科/工学研究科　教授）センター３名（保坂雅子、野中久美、中戸川政江）
２８日　SA２１名、センター３名（保坂雅子、野中久美、中戸川政江）
実施 SA：
【コア】菊地杏子(医学系 M1)、宮原杏奈(医学系 M2)、川口里紗(薬学 M1)、大野敦子(工学 M2)、小舘愛(農学 M2)
【サポート】澁川友菜(理学 M1)、松島萌香(理学 M2)、中村美紗都(医学系 M2)、山内　しのぶ(歯学 D2)、大澤沙優里(薬学 M1)、遠藤夏奈江(工学 M1)、野田沙矢佳(工学 M1)、細田夏光(工学 M1)、井上和香(工学 M2)、金戸悠梨子(農学 M1)、後藤萌(農学 M1)、西山智穂(農学 M1)、那花友莉恵(農学 M2)、成田萌(農学 M2)、萱場敦子(生命科学 D2)
【講演者】熊谷祐穂(理学 D1)、石井彩子(工学 D3)

５）２０１６サイエンススクエアへの出展
「エコーマイクをつくろうーサイエンス・エンジェルと音の冒険―」
○日時・場所
２０１６年８月６日（土）・８月７日（日）終日
国立科学博物館（東京都）
○活動概要
本企画では、手軽に手に入るもの（プラスチックコップ、厚紙、針金）を使ってエコーマイクを作ることで、子どもたちに科学を身近に感じてもらった。まず指導者がやってみせた後に、個別に指導しながら子どもたちに工作をしてもらった。工作は、パーツ選び、穴あけ、バネ作り、マイクの装飾、パーツの組み合わせ等、段階を追って行った。工作修了後には、それぞれのマイクの出来栄えを試しあい、選んだパーツや作り方（マイクの長さ、バネのサイズ、コップの大きさ等）によって音が異なって聞こえることを実感してもらった。なお、工作の前後には、SA が音の発生や伝達の仕組み、音の速さ等についても楽器ややまびこ等を例に挙げながら説明をした。２日にわたり各日４回ずつ、それぞれ１時間に

わたり実施した。小学２年生（３９％）、３年生（２３％）を中心に、初日５５名、２日目５７名が参加した。
〇実施者
SA３名、センター１名（保坂雅子）
実施 SA：宮本眞沙子（医学研究科 M1）、宮澤咲紀子（工学研究科 M1）、宮間志帆（工学研究科 M1）

６）楽しい理科のはなし２０１６
～不思議な体験がいっぱい！～への出展
〇日時・場所
２０１６年8月２３日（火）　１０：３０－１７：３０
東京エレクトロンホール宮城（仙台市）
〇活動概要
主として小学校低学年の子どもを対象にした「楽しい理科のはなし２０１６～不思議な体験がいっぱい！～」（主催：河北新報社、東京エレクトロン宮城株式会社）に出展し、以下の３つのブースで科学の面白さを体験する機会を提供した。
・キラキラへんこう万華鏡
・化学の力でスーパーボールを作ろう！
・キッチンでわくわく化学実験
各ブースは４名の SA が担当した。来場者は約６００名であった。
〇実施者
SA１２名（コア６名、サポート６名）、センター３名（保坂雅子、野中久美、中戸川政江）
実施 SA：
【コア】井上和香(工学 M2)、多田日菜子(農学 M1)、小柳友佳子(農学 M2)、秋山佳央(生命科学 M1)、近藤なな(生命科学 M2)、畠山ありさ(生命科学 M2)
【サポート】大池里奈(理学 M1)、福與悠里(理学 M1)、熊谷祐穂(理学 D1)、安部瑛里奈(薬学 M2)、中林真悠(工学 M1)、那花友莉恵(農学 M2)

７）スキルアップ講習会
プレゼンテーション力向上研修会（全２回）
〇日時・場所
第１回
２０１６年9月７日（水）１５：００－１７：００
生命科学プロジェクト総合研究棟　会議室
第２回
２０１６年9月１５日（木）１５：００－１７：００

男女共同参画推進センター
〇活動概要
東北大学サイエンス・エンジェル（SA）活動において必要となるプレゼンテーション力を向上させるため、SA 研修会（全 2 回）を開催した。第 1 回では、研究発表や一般市民向けの講演等の経験豊富な女性研究者 3 名の講演（各 30 分）を聞き、ワークショップにも参加してプレゼンテーションのスキルを学んだ。第 2 回は、第 1 回で学んだことを踏まえ各自が用意してきた研究内容に関するスライドを使って、高校生向けの研究紹介を 5 分間で発表し、お互いに批評しあった。第 1 回は SA8 名、第 2 回は SA2 名が参加した。

研究プレゼンテーションに関する講義
「データを読み解き、伝える力」吉田眞紀子（大学病院検査部　助教）
「プレゼンの秘訣はお・も・い・や・り！ ー私が学んだサイエンスコミュニケーションを例にして」横山美沙（金属材料研究所　助手）
「理系のハートに火をつけて」磯貝恵美子（農学研究科　教授）
〇実施者
センター1 名（保坂雅子）

８）サイエンスアゴラ２０１６への出展
「理系女子を増やすためには：東北大生が思うこと 」
〇日時・場所
２０１６年１１月６日（日）１０：３０－１２：００
日本科学未来館（東京・お台場）
〇活動概要
サイエンスアゴラ２０１６（主催：科学技術振興機構）において、最終日に１階アゴラステージにて「理系女子を増やすためには：東北大生が思うこと 」と題してトークセッションを行った。３名の SA が各々15 分程度の理系女子を増やすというテーマのもと３つのトーク（「理系職業の魅力を知る」、「高校生の時に実践的な科学を経験する」、「暮らしの中のサイエンスに気づく」）を行って参加者に問題提起し、その後にディスカッションを行った。
〇実施者
副センター長 大隅典子（医工学研究科　教授）、SA3 名、センター１名（保坂雅子）
実施 SA：滝沢翠里（工学 M2）、邉見ふゆみ（工学 M2）、小舘愛（農学 M2）

９）仙台市八本松市民センター「親子で体験」講座
〇日時・場所
２０１６年１２月１０日（土）１０：００－１１：３０

仙台市八本松市民センター（仙台市）
〇活動概要
仙台市八本松市民センター主催事業「親子で体験　学ぼう！遊ぼう！元気ＵＰ！～親子で理科実験」において小学生とその保護者を対象に「おもしろ卵を作ってみよう！！」というテーマの下で２つの実験を行った。「あべこべ卵を作ってみよう」では、遠心力を利用して黄身と白身が反対になった卵を作り、「人造イクラを作ってみよう」では、化学反応で膜ができる仕組みを利用して人造イクラを作った。大人１９名、小学生２０名（１，２年生中心）および未就学児４名が参加した。
〇実施者
SA2 名、センター１名（保坂雅子）
実施 SA：新實香奈枝(農学 M2)、古川睦実(農学 M2)

１０）「女子中高生に科学の楽しさを伝えよう～東北大学サイエンス・エンジェルの取組～」
〇日時・場所
２０１７年3月1日（水）１３：００－１５：００
大阪大学吹田キャンパス　テクノアライアンス棟１階アライアンスホール
〇活動概要
大阪大学において教職員および学生に対して東北大学における男女共同参画推進センターの取組及び東北大学サイエンス・エンジェルの活動について講演した。
〇実施者
センター1 名（藤村維子）
SA
石井若菜（医学系研究科 M2）、成田萌（農学研究科 M2）、近藤なな（生命科学研究科 M2）

１１）高校生に対するセミナーの実施（出張セミナーおよびＳＡセミナー）

a）母校出張セミナー：宇都宮海星女子学院高等学校

○日時・場所

２０１６年7月１９日（火）

宇都宮海星女子学院高等学校(栃木県宇都宮市)

○活動概要

SA の母校である宇都宮海星女子学院中学校・高等学校にて、東北大学や研究の紹介、進路選択などについて講演を行い、講演終了後は、希望者と座談会を行った。中学 3 年～高校 2 年の生徒（約 120 名）が参加した。

○実施者

SA1 名

実施 SA：那花友莉恵(農学 M2)

b）出張セミナー　山形県立山形北高等学校

○日時・場所

２０１６年8月１９日（水）１４：００－１５：３０

山形県立山形北高等学校（山形県山形市）

○活動概要

２年生を中心とした女子高校生２０名に対して講演（２０分間）およびグループトーク（３０分間）を行った。講演では、進路選択の経験、研究内容、研究の魅力、理系学部の卒業後の進路について話した。

○実施者

SA２名

実施 SA：伊藤史織（薬学　M2）、新實香奈枝(農学 M2)

c）出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校

○日時・場所

２０１６年9月９日（金）・１０日（土）

９月９日（金）１３：３０－１７：００（学習相談会）

９月１０日（土）１３：２０－１５：２０（講演）

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校（茨城県竜ケ崎市）

○活動概要

学習相談会では、全学年全生徒を対象に自身の経験を踏まえた学習アドバイスや東北大学を目指す生徒に対してアドバイスを与えた。9 名が参加した。

1 年生の希望生徒を対象に行った SA セミナーでは、研究内容やキャンパスライフの紹介、進路決定に至る経緯や今後の展望等について各自 45 分間の講演を行い、進路決定の一助とした。33 名が参加した。
○実施者
SA２名
実施 SA：中村美紗都（医学系 M2）、小柳友佳子（農学 M2）

d）出張セミナー　山形県立山形東高等学校
○日時・場所
２０１６年９月１７日（土）１３：００－１５：００
山形県立山形東高等学校（山形県山形市）
○活動概要
理系学部への進学を希望している女子生徒 1，2 年生を対象として、山形県出身者 3 名を含む 4 名の SA が大学に入った後のイメージをわきやすくするように理系での大学での学習や研究について講演および（各 15 分間）およびグループトーク（30-40 分間）を行った。43 名の女子生徒が参加した。
○実施者
SA４名
実施 SA：佐藤花保（医学系 M1）、阿部瑛理奈(薬学 M2)、伊藤史織(薬学 M2)、田中絵里(工学 M1）

e）母校出張セミナー：四天王寺高等学校
○日時・場所
２０１６年９月２３日（土）１５：５０－１７：２０
四天王寺高等学校(大阪府大阪市)
○活動概要
出身者 1 名を含む 2 名の SA が理系の研究の面白さを伝え、理系進路選択を応援した。第一部では東北大学と仙台の紹介、第二部では研究内容及び大学での生活を講演、第三部ではグループトークを行った。11 名の女子生徒が参加した。
○実施者
SA2 名
実施 SA：大野敦子(工学 M2)、菊地杏子（医学系　M1）

f）出張セミナー　山形県立山形西高等学校
「不思議」な気持ちを呼び起こそう
○日時・場所

２０１６年１０月１５日（土）１３：３０－１６：３０
山形県立山形西高等学校（山形県山形市）
○活動概要
理系コースの高校２年生に大学での研究について知ってもらうことを目的として、高校での学習内容とのつながりのある化学もしくは生物の実験を指導した。実験に先立ち、SA４名がそれぞれ高校２年生から受験までの経験や大学での生活や研究紹介を行った。当日は17名（内訳：2年生15名及び1年生2名）が参加した。実験終了後は全体で集まり、各班での実験内容及び成果を報告した。
○実施者
SA４名、センター１名（保坂雅子）
実施SA：小柳友佳子（農学 M2)、成田萌（農学 M2)、上野友紀（生命科学 M2)、近藤なな（生命科学 M2)

g）東北大学サイエンス・エンジェル・セミナーfor 山形県立山形西高等学校
○日時・場所
２０１６年１０月２２日（土）１０：００－１４：３０
片平北門会館エスパス及び各研究室
○活動概要
山形県立山形西高等学校１学年の理系希望生徒24名に対して講演、グループトーク、および研究室見学を行い、理系学部での研究とはどのようなものかを伝えた。まず、4名のSAが自らの研究内容や大学生活について講演した後、１グループにつきSA１名、高校生３名でグループトークを行った。昼食をはさんで電気通信研究所および生命科学研究科の研究室を見学した。
○実施者
SA８名、センター１名（保坂雅子）
実施SA：
【コア】佐藤花保 （医学系 M1）、滝沢翠里 （工学 M2）、邉見ふゆみ（工学 M2）、鎌田しずか（生命科学 M1）
【サポート】澁川友菜 （理学 M1）、大澤沙優里（薬学 M1）、中林真悠 （工学 M1）、上野友紀 （生命科学 M2)

h）出張セミナー　仙台市立郡山中学校
○日時・場所
２０１６年１１月９日（土）１３：３０－１５：００
仙台市立郡山中学校（仙台市）
○活動概要

PTA 行事において SA２名が中学校 1 年生約 200 名を対象にした講演を行った。クイズを取り入れ、それぞれの研究内容や大学での生活について 30 分ずつ講演し、研究の面白さを伝えた。また、アクティビティとして東北大学 G-Safety の一員である SA が「防災ゲーム」を行った。PTA 行事には PTA や教員も 10 名程度参加した。

〇実施者

SA２名、センター1 名（保坂雅子）

実施 SA：成田萌（農学研究科 M2）、平田萌々子（理学研究科 D2）

i）出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校（通称：ミヤイチ☆キャンパス）

〇日時・場所

２０１６年１１月１７日（木）１３：４０－１４：３５（４校時）

宮城県宮城第一高等学校（仙台市）

理科講義室、第二生物実験室、第二化学実験室

〇活動概要

ミヤイチ☆キャンパスにおいて、SA6 名が 2 名ずつに分かれて大学での研究の内容や大学生活などについて講演し、生徒の進学意識や学習への意欲をより高める契機を提供した。理数科 1 年生 79 名の生徒は、希望に応じて３班（工学・農学系、薬学系、医療・農学系）に分かれた。1 人当たり 20 分間の講演を行い、最後の 10 分間で質疑応答を行った。

〇実施者

SA６名、センター1 名（保坂雅子）

実施 SA : 宮原杏奈 (医学系 M2)、大澤沙優里(薬学 M1)、川口里紗(薬学 M1)、宮間志帆(工学 M1)、鎌田しずか (生命科学 M1)、櫻田茜(生命科学 M2)

２．４　顕彰制度

当センターは、男女共同参画委員会が実施する澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞および同男女共同参画参画奨励賞の公募にあたっては関係諸機関にメールを送る等して周知に協力した。

２．５　地域連携

当センターが運用する東北大学サイエンス・エンジェルの活動は主に仙台市で行っているため、地域の高校やＮＰＯ法人、新聞社等との連携や協力を日常的に行っている。

２．６　国際化対応

当センターでは、ホームページの一部の情報を英語で表記する等して国際化対応を進めている。本年度は、杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業の一環として大幅に英語化を推進した。

２．７　支援推進体制

恒常的支援体制として、本センターを置き、男女共同参画活動を円滑に推進するために活動している。

２．８　その他の活動

センターでは、東北大学男女共同参画推進センター（TUMUG）の認知度を高め、見やすく、探しやすいサイトを目指し、平成２９年３月にホームページをリニューアルした。新たなホームページでは、最新の有益情報をまとめて入手してもらえるよう「イベント・公募情報」と、ターゲット別メニュー「女性研究者の方へ」「育児・介護中の方へ」「在学生の方へ」を設置した。また、スマートフォンでも見やすいレスポンシブ web デザイン対応にし、国際対応のため英文ミラーサイトの作成も進めている。また、近日開催予定のイベントの情報やイベント終了報告については、Facebook を通じても頻繁に情報発信を行っており、広く広報活動を展開している。

また、センターでは、東北大学グローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」（2008-2013）および２１世紀 COE プログラム「男女共同参画時代の法と政策ージェンダー法・政策・研究センター」(2003-2008)により購入した図書約 8,000 冊を所蔵している。今年度は、平成 28 年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）「エンパワーメント推進事業」採択を期に、図書数十冊を追加購入し、蔵書を充実させた。同時に、未配架図書の整理を行った、さらに、１月からは「男女共同参画推進センター図書利用規則」および「利用案内」を作成し、図書館資料として学内外に公開している。

以上に述べた活動の大半は、総務企画部総務課総務係と相互に協力し、連携しながら行われたものである。

平成28年度　男女共同参画推進センターの取組み実績一覧

日付	事項	区分
4月20日	第2回TUMUG Café	両立支援・環境整備
5月1日	平成28年度サイエンス・エンジェル第一次応募者採用	次世代支援
5月	新規教員情報およびML用の情報収集	支援推進体制
5月10日	Facebookサイト開設	支援推進体制
5月18日	仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業募集	次世代支援
5月20日	第3回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞募集	顕彰制度
5月25日	第1回沢柳フェローランチミーティング	女性リーダー育成
6月1日	平成28年度サイエンス・エンジェル第二次応募者採用	次世代支援
6月1日・3日・9日	平成28年度サイエンス・エンジェル活動準備会	次世代支援
6月4日	平成28年度サイエンス・エンジェルオリエンテーション	次世代支援
6月24日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター6号発行	支援推進体制
6月29日・7月6日	SAスキルアップ講習会「プレゼンテーション力向上研修会」全2回	次世代支援
7月17日	「学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2016」への出展	次世代支援
7月19日	母校出張セミナー　宇都宮海星女子学院高等学校	次世代支援
7月27日・28日	オープンキャンパスfor女子高校生2016への参加	次世代支援／女性リーダー育成
8月6日・7日	「2016サイエンススクエア」への出展 「エコーマイクをつくろう―サイエンス・エンジェルと音の冒険―」	次世代支援
8月18日	出張セミナー　山形県立山形北高等学校	次世代支援
8月23日	「楽しい理科のはなし～不思議の箱をあけよう～」への出展「サイエンス・エンジェルと学ぼう～科学のふしぎ～」	次世代支援
9月2日	「外部資金獲得セミナー」／第2回沢柳フェローランチミーティング	女性リーダー育成
9月6日	高度教養教育・学生支援機構主催「教育関係共同利用拠点提供プログラム」開講の案内	女性リーダー育成
9月7日・15日	SAスキルアップ講習会「プレゼンテーション力向上研修会」全2回	次世代支援
9月9日	国際高等研究教育機構・国際高等研究教育院主催「融合領域研究合同講義」開講の案内	女性リーダー育成
9月9日・10日	出張セミナー　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校	次世代支援
9月17日	出張セミナー　山形県立山形東高等学校	次世代支援
9月22日	第3回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞　受賞課題決定	顕彰制度
9月23日	母校出張セミナー　大阪四天王寺高等学校	次世代支援
9月26日	平成28年度「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」利用者の募集	支援推進体制
9月27日	「女性と留学生のためのキャリア」共催（キャリア支援センター高度イノベーション博士人材育成ユニット）	次世代支援
9月29日	高度教養教育・学生支援機構主催「教育関係共同利用拠点提供プログラム」開講の案内	女性リーダー育成
9月30日	国際高等研究教育機構・国際高等研究教育院主催「融合領域研究合同講義」開講の案内	女性リーダー育成
10月5日	第3回TUMUG Café	両立支援・環境整備
10月15日	出張セミナー（実験）　山形県立山形西高等学校	次世代支援
10月22日	東北大学サイエンス・エンジェルセミナーfor 山形県立山形西高等学校開催	次世代支援
10月17日	第13回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「国際的な視点から見た男女共同参画の推進」への参加	シンポジウム
11月1日	日経College Café「発信！理系女子」連載開始	次世代支援
11月8日	第2回TUMUG Forum（女性研究者研究発表・交流会）	女性リーダー育成
11月14日	「みやぎサイエンスフェスタ（主催：宮城県教育委員会）」への出展	次世代支援

11月14日・15日	「サイエンスアゴラ2015　つくろう、科学とともにある社会」への出展	次世代支援
11月20日	出張セミナー　宮城県石巻西高等学校	次世代支援
11月21日	東北大学サイエンス・エンジェルセミナーfor 山形県立山形西高等学校開催	次世代支援
11月4日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター7号発行	支援推進体制
11月6日	「サイエンスアゴラ2016　つくろう、科学とともにある社会」への出展「理系女子を増やすためには：東北大生が思うこと 」	次世代支援
11月9日	出張セミナー　仙台市郡山中学校	次世代支援
11月16日	**「ダイバーシティ研究環境実現のための部局等による取組を支援するプログラム」募集＊**	支援推進体制
11月17日	出張セミナー　宮城県宮城第一高等学校	次世代支援
12月3日	**「国際学術論文作成のための英文校閲費用補助」第4期利用者募集＊**	支援推進体制
12月10日	八本松市民センター「親子で体験」講座	次世代支援
12月19日	**「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業（H28-H33）」キックオフシンポジウム・第1回管理職セミナー＊**	支援推進体制
12月19日	スタートアップ研究費・研究スキルアップ経費利用者によるシンポジウムでのポスター発表	女性リーダー育成
1月27日	平成29年度TUMUG支援事業（男女共同参画・女性研究者支援事業）利用者の募集	支援推進体制
1月27日	**平成29年度「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業（H28-H33）」利用者の募集＊**	支援推進体制
1月29日	平成28年度第13回東北大学男女共同参画シンポジウム「男性性を問う」	シンポジウム
1月29日	スタートアップ研究費・研究スキルアップ経費利用者によるシンポジウムでのポスター発表	女性リーダー育成
2月1日	**研究環境に関するアンケート調査実施（～2月13日まで）＊**	支援推進体制
2月8日	男女共同参画推進センター（TUMUG）ニュースレター8号発行	支援推進体制
2月16日	第4回TUMUG Café	両立支援・環境整備
2月20日	男女経だ翁参画推進センター（TUMUG）ホームページリニューアル・英語版開設	支援推進体制
2月24日	**セミナー「研究職の魅力を伝える」開催＊**	次世代支援
3月	SAパンフレット「サイエンスエンジェル活動報告2016」発行	次世代支援
3月1日	大阪大学での講演「東北大学サイエンス・エンジェルの取組」	次世代支援
3月12日	「あきたサイエンスカンファレンス2017（ASC2017）」	次世代支援
3月25日	**東北大学男女共同参画セミナー「研究者ってなに？～留学・海外滞在編～」＊**	次世代支援

＊がついたものは文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）による

学外での活動（講演・調査・評価委員）

9月3日	お茶の水女子大学理系女性教育開発共同機構第2回シンポジウム「子どもがサイエンスに目覚める時−多くの女性が理系に進むために−」にて「リケジョの活躍が日本を救う！」講演	大隅典子
9月27日	Gender Parity in Science: Extended Defects in Semiconductors EDS 2016にて「Gender equality in Tohoku University and Japan」講演	米永一郎
10月21日	岩手大学文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）女性研究者の研究リーダー力向上支援セミナー「産学連携による共同研究の推進～異分野融合による触覚センサの開発に関する研究～」講演	田中真美
12月7日	東京医科歯科大学「女性研究者とダイバーシティー」	大隅典子
12月20日・21日	他大学・企業の取組調査：岡山大学	米永一郎、藤村維子、太田舞
12月22日	他大学・企業の取組調査：名古屋大学	藤村維子、村上亜矢子、野中久美
1月6日	他大学・企業の取組調査：長崎大学	米永一郎、木村賢一、村上亜矢子
1月20日	他大学・企業の取組調査：新潟大学	大隅典子、藤村維子、長越由美子
2月2日	平成27年度第2回四国5大学連携女性研究者研究交流発表会　講演	大隅典子
2月3日	他大学・企業の取組調査：九州大学	永次史、村上亜矢子、西川雄一
2月9日	他大学・企業の取組調査：早稲田大学・IBM	田中真美、藤村維子、中戸川政江

2月13日	学都仙台コンソーシアム講座仙台学2015「仙台の理系女子」	保坂雅子
2月17日	他大学・企業の取組調査：京都大学	斎藤仁、藤村維子、長越由美子
3月1日	他大学・企業の取組調査：理化学研究所	大隅典子、高木雅弘
3月7日	八戸工業高等専門学校　講演	田中真美

学内での活動（講演・調査）

4月5日	平成28年度第1回工学研究科等新規採用等教職員合同研修にて「東北大学および工学系における男女共同参画の取り組みについて」講義	田中真美
8月19日	平成28年度サイエンス・リーダーズ・キャンプ　講義 「理工系女性研究者育成支援の取り組み」	田中真美
8月19日	多元物質科学研究所シンポジウム　パネルディスカッション～女性教員採用に向けたシステムづくり～	大隅典子
9月27日	「女性と留学生のためのキャリア」にて「東北大学の女子学生と女性研究者への支援について～支援を利用した私の育児と研究～」講演	田中真美
10月6日	平成28年度第2回工学研究科等新規採用等教職員合同研修にて「東北大学および工学系における男女共同参画の取り組みについて」講義	田中真美
3月13日	総合技術部男女共同参画部会　講演	藤村維子

男女共同参画推進センターへの来訪

1月27日	The Sasakawa Peace Foundation(SPF) International Project Planning and Development DepartmentのProject CoordinatorであるLily Yu博士と、University of Colorado BoulderのPatricia	大隅典子、藤村維子
1月30日	宇都宮大学	藤村維子、村上亜矢子
2月28日	石川県西田幾多郎記念哲学館	藤村維子、野中久美
3月14日	マサチューセッツ工科大学（MIT）　Christine Pilcavage氏	藤村維子
3月24日	徳島大学AWAサポートセンター	藤村維子、村上亜矢子

取材/報道

5月7日	東京新聞「日本は少ないリケジョ　実は女性に最適職場」	東北大学サイエンス・エンジェル
7月29日	朝日新聞DIGITAL「国公立大学の特集：東北大学」	田中真美
9月2日	女の子のための理工系進学情報誌　Happy Technology「東北大学サイエンス・エンジェルが目指すものは？」	保坂雅子、石井彩子(東北大学サイエンス・エンジェル)
10月8日	河北新報夕刊「杜都　チャレン人　理系の魅力　浸透図る：東北大サイエンス・エンジェルで活動」	那花友莉恵（東北大学サイエンス・エンジェル）
10月28日	朝日新聞地方版「宮城教育リポート　理系な時間でリケジョ育成：東北大初企画　女子高生ら合宿」	大隅典子、田中真美、 東北大学サイエンス・エンジェル
11月28日	日本経済新聞朝刊「College café by NIKKEI　リケジョが伝えたいこと」	東北大学サイエンス・エンジェル
1月5日	化学工学会誌「自然科学系女子大学院生による次世代人材育成活動−東北大学サイエンス・エンジェルの挑戦−」	大隅典子、米永一郎、田中真美、倉田祥一朗、保坂雅子
2月27日	宮城の新聞「研究者って何？セミナー」告知掲載	男女共同参画推進センター
3月8日	朝日新聞「能力発揮するのが大切」	大隅典子

資料１

平成２８年度男女共同参画委員会委員名簿

平成28年12月14日現在

◎	理事（総務・国際展開・事務統括担当）		植木　俊哉
	総長特別補佐（男女共同参画担当）		大隅　典子
	文学研究科	教授	沼崎　一郎
	教育学研究科	教授	工藤与志文
	法学研究科	教授	水野　紀子
	経済学研究科	教授	川名　洋
	理学研究科	教授	寺田　眞浩
	医学系研究科	教授	朝倉　京子
	歯学研究科	教授	熊本　裕行
	薬学研究科	准教授	髙橋　信行
	工学研究科	教授	川崎　亮
	農学研究科	教授	宮尾　光恵
	国際文化研究科	教授	藤田　恭子
	情報科学研究科	講師	坂田　邦子
	生命科学研究科	教授	福田　光則
	環境科学研究科	准教授	上高原理暢
○	医工学研究科	教授	田中　真美
	教育情報学研究部	准教授	佐藤　克美
○	金属材料研究所	教授	米永　一郎
	加齢医学研究所	教授	千葉奈津子
	流体科学研究所	准教授	小宮　敦樹
	電気通信研究所	准教授	坂本　修一
	多元物質科学研究所	教授	永次　史
	災害科学国際研究所	准教授	有働　恵子
	東北アジア研究センター	准教授	柳田　賢二
	病院	准教授	宮崎真理子
	高度教養教育・学生支援機構（学生相談・特別支援センター）	助手	佐藤　静香
	男女共同参画推進センター	助教	保坂　雅子
	総務企画部	部長	齋藤　仁
	人事企画部	部長	佐藤　誠

◎ は委員長

○ は副委員長

＿＿ は平成28年度　新委員

平成２８年度東北大学男女共同参画委員会　委員会開催等記録

第９８回男女共同参画委員会　開催

（日時：平成２８年５月１０日（火）１４時００分から１５時４０分）

審議事項

１　審議事項

（１）各ワーキンググループの構成について

議長から、各ワーキンググループの座長及び構成員について提案があり、これを了承した。

（２）第３回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞について

奨励制度 WG 座長(田中副委員長)から､標記顕彰制度の公募について説明があり、これを了承した。

（３）第５回仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の公募について

奨励制度 WG 座長(田中副委員長)から､標記支援事業の公募について説明があり、これを了承した。

２　報告事項

（１）サイエンス・エンジェルの採用状況及び今年度の活動について

男女共同参画推進センター（保坂委員）から、平成２８年度の標記採用状況について報告があった。また、今年度実施する活動予定（学校行事）について説明があった。

（２）全学教育科目　基幹科目・社会論「ジェンダーと人間社会」について

男女共同参画推進センター（保坂委員）から、標記科目の実施状況について報告があった。

（３）TUMUG 支援事業採択状況について

次世代・女性研究者支援 WG 座長（米永副委員長）から、標記採択状況について報告があった。

（４）平成２７年度男女共同参画委員会報告書について

中期計画対応・報告書作成 WG 座長（米永副委員長）から、標記報告書の発行について報告があり、併せて作成における各委員の協力に対する謝辞があった。

（５）ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ女性研究者研究活動支援事業への申請について

大隅委員から、標記申請を行ったことについて報告があり、併せて状況に応じ各委員にご協力いただきたい旨付言があった。

（６）各部局等からの報告

・各部局での女性研究者比率向上策、問題点についての情報共有

各委員から、各部局における取組、問題点について報告があり、情報共有を行った。また事務部門における取組については、人事企画部（佐藤委員）より報告があった。

・APWiL Policy Round Table on Gender Equity への参加について

男女共同参画推進センター（保坂委員）より標記国際会議の参加報告があった。

第９９回男女共同参画委員会

（日時：平成２８年７月１４日（木）１３時３０分から１４時３０分）

審議事項

１　審議事項

（１）男女共同参画シンポジウムについて

広報・シンポジウム WG 座長（朝倉委員）から、資料１に基づき標記シンポジウムについて説明があり、これを原案として準備を進めていくことを承認した。また、シンポジウムは 1 月 29 日に行うことになった。

（２）第３回澤柳記念賞の選考委員会委員の選出について

奨励制度ＷＧ座長（田中委員）から、資料２－１、２－２に基づき標記選考委員会の構成について説明があり、これを承認した。次いで現在の応募状況について報告があり、引き続き応募締切日まで積極的な周知及び推薦をお願いしたい旨の発言があった。

２　報告事項

（１）第５回仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業の審査結果について

奨励制度ＷＧ座長（田中委員）から、資料３に基づき標記支援事業の審査会及び審査結果の概要について報告があった。

（２）平成 28 年度女性教員比率の速報値について

中期計画対応・報告書作成 WG 座長（米永委員）から、資料４に基づき報告があり、部局においても女性教員を増やすための方策があればご提案いただきたい旨の発言があった。

（３）各部局等からの報告

・工学系女性研究者育成支援推進室 ALicE

平成 28 年度女性のチャレンジ支援賞（内閣府）の受賞について

田中委員から、資料５に基づき標記賞を受賞した旨の報告があった。

・医学系研究科

医学系研究科女子大学院生奨励賞の第一回授賞式・受賞講演の実施について

朝倉委員から、資料６に基づき標記授賞式・受賞講演の実施報告及び、河北新報への記事の掲載について報告があった。

・男女共同参画推進センター

保坂委員から、下記３つの項目について報告があった。

① TUMUG ニュースレター第 6 号発行について

② 東北大学サイエンス・エンジェルの任命およびオリエンテーションの実施について

③ 東北大学サイエンス・エンジェルに対する取材対応について

（４）その他

・その他

大隅委員から、７月７日にダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ女性研究者研究活動支援事業のヒアリング審査が行われた旨付言があった。

第１００回男女共同参画委員会

（日時：平成２８年１２月１３日（火）１４時００分から１４時３０分）

審議事項

１　審議事項

（１）年度報告書の作成について

行動指針対応・報告書作成ＷＧ座長（米永委員）から、資料１に基づき年度報告書について提案があり、これを了承した。

なお、報告書のフォーマットについては後日事務局より送付することとなった。

また、研究所における女子学生数の取り扱いについては今後検討することとなった。

２　報告事項

（１）「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業(H28～H33)」について

ＥＴＦ座長（大隅委員）から、資料２～４に基づき、下記４点について説明を行い、各委員においても事業の推進に協力いただきたい旨、付言があった。

① 事業概要について

② 第１回女性研究者エンパワーメントタスクフォース(ETF)会議について
③「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業(H28～H33)」キックオフシンポジウム・第１回管理職セミナーの開催について
④「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業(H28～H33)」による男女共同参画推進センター専任ＵＲＡの採用について

（２）第１３回男女共同参画シンポジウムについて

広報・シンポジウム WG 座長（朝倉委員）から、資料５に基づき説明を行い、所属部局・所属学会等における周知・動員の要請があった。

（３）第３回澤柳記念賞の審査結果について

奨励制度 WG 座長（田中委員）から、資料６に基づき説明を行った。第１３回男女共同参画シンポジウムにおいて開催する授賞式及び受賞講演には、A 賞を受賞した名古屋大学男女共同参画室から束村博子室長が出席される旨、報告があった。

また、今年度新規に申請があった１件については次年度も審査対象とする旨、付言があった。

（４）大学入試センター試験時の川内けやき保育園での一時保育について

事務局（髙木課長）から、資料７に基づき報告があった。

（５）各部局等からの報告

・経済学研究科

経済学研究科（川名委員）から、経済学研究科　吉田教授による男女共同参画関係の授業提供について報告があった。

・男女共同参画推進センター

男女共同参画推進センター（保坂委員）から、下記３点について報告があった。
① TUMUG ニュースレター第 7 号発行について
② TUMUG Forum の実施について
③ SA 活動について（8 月以降の活動について）

（６）その他

・青葉山地区第３保育所設置に係るアンケートについて

事務局（髙木課長）から、全教職員を対象とした、青葉山地区第３保育所設置に係るアンケートを実施する旨報告の後、各部局における周知の要請があった。

資料２

平成28年度 文部科学省 科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）

杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業

TUMUG

東北大学男女共同参画推進センター
Tohoku University Center for Gender Equality Promotion

東北大学

日本初の「女子学生」

植木男女共同参画推進センター長（右から2番目）および副センター長

東北大学における男女共同参画のあゆみ

1913年	我が国の大学として初めて女性に門戸開放。
2001年	東北大学男女共同参画委員会設置。
2002年	男女共同参画推進のための東北大学宣言。
2003年	・21世紀COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策」採択（実施期間5年）。 ・男女共同参画奨励賞（通称:澤柳賞）創設。 ・各部局に「男女共同参画ワーキンググループ」設置。
2005年	学内保育所「川内けやき保育園」開設。
2006年	「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」採択。
2008年	・グローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択（実施期間:5年）。 ・「育児のための短時間勤務制度」、「育児休業等の取得による任期の延長」制度化。
2009年	・2番目の学内保育所「星の子保育園」設置（星陵地区）。 ・「杜の都ジャンプアップ事業for2013」採択。
2013年	・東北大学女子学生入学100周年記念事業。 ・東北大学における男女共同参画推進のための行動指針。
2014年	東北大学男女共同参画推進センター開設。
2016年	「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」採択。

沢柳フェローランチミーティング

東北大学 サイエンス・エンジェル

TUMUG（つむぐ）

東北大学男女共同参画推進センター
Tohoku University Center for Gender Equality Promotion
TEL 022-217-6092
〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平2−1−1
E-mail　tumug@morihime.tohoku.ac.jp
HP　www.morihime.tohoku.ac.jp

HP

facebook

発行日 2016年12月

事業の目標と行動計画

以下の5つの目標を達成するために行動計画に従って、ダイバーシティ研究環境を実現するのための取組を進めていきます。

本事業の目標

目標 1	女性教員在籍率19%を目指す。
目標 2	新規採用教員に占める女性比率30%を目指す。
目標 3	教授・准教授の女性比率10%を目指す。
目標 4	役員等での女性比率10%を目指す。
目標 5	女子学生の研究者志望への意識向上および 男性も含めた人的ダイバーシティへの意識醸成を行う。

事業期間中の目標値

※1 上位職…教授・准教授相当
※2 役員等…総長特別補佐を含む

	H28	H29	H30	H31	H32	H33
在籍教員における女性比率	12%	13%	14.3%	15%	17%	19%
新規採用における女性比率	16%	18%	20%	23%	26%	30%
上位職※1における女性比率	7.5%	8%	8.5%	9%	9.5%	10%
役員等※2における女性比率	3.8%	5.7%	5.7%	7.5%	9.4%	10%

行動計画

	H28	H29	H30	H31	H32	H33
ダイバーシティ研究環境整備のための取組	施策の検討	支援策の実施				評価・改善
	アドバイザリーボード設置	定期的な評価活動・取組への反映				
	施策の検討	学生・大学院生の育成支援の実施				評価・改善
		定期的な調査・分析と施策への反映				
女性研究者の研究力向上のための取組	URA配置	女性研究者のためのURAによる研究支援				評価・改善
		研究力育成・向上のためのセミナー等開催				
	施策の検討	研究業績の顕彰および研究費支援				
女性研究者の上位職への積極的登用に向けた取組	施策の検討	採用・昇任促進施策の実施				評価・改善
		意識啓発活動				
		メンタリング支援				

第三期中期目標・中期計画（抜粋）

男女共同・協働の実現

No. 60　次世代の学生の教育を担う機関として男女共同・協働を実現するため、「東北大学における男女共同参画推進のための行動指針」に基づく総合的・計画的な取組を推進し、第3期中期目標期間中に、女性教員比率を19パーセントに引き上げることを目指した採用等の取組及び管理職等(課長補佐級以上)の女性職員比率を15パーセントに引き上げることを目指した育成等の取組を強化する。

女性活躍推進法に基づく一般事業主行動計画(抜粋)

目標　管理職等（課長補佐以上）の女性職員比率を15%へ引き上げることを目指す。

《取組1》　女性のキャリア形成の阻害の要因の一つである労働環境の改善を実施する。

《取組2》　女性職員を対象として管理職育成を目的としたキャリア研修を実施する。

ご挨拶

東北大学　総長
里見 進

東北大学は平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）に採択されました。この事業は研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や、女性研究者の研究力向上のための取組、および上位職への積極採用に向けた取組を支援するものです。

これまで、東北大学では文部科学省の女性研究者支援事業による支援や独自経費（総長裁量経費「男女共同参画・女性研究者支援事業」）によって女性研究者に焦点を当てた取組を行ってきました。それにより、女性教員比率は向上していますが、国立大学全体の平均（平成27年度15.4%）と比べるとまだ低い状況です。

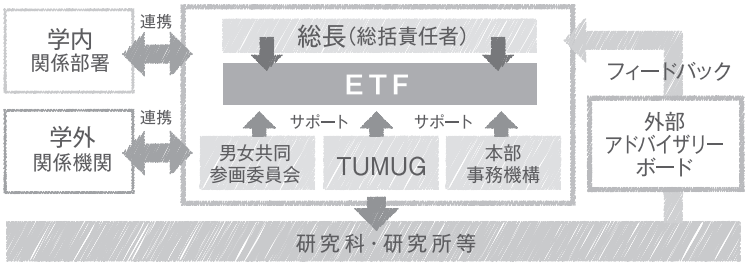
このような現状を踏まえ、第三期中期目標計画においては、明確に女性教員比率が19%となることを目指すという数値目標を掲げています。目標達成に向けて、採用に係る取組を進めると同時に、採用した女性教員が在任中に業績を重ねることで、大学に定着し、上位職へ昇進できるよう女性研究者の研究力向上に向けた取組を実施したいと考えています。本事業への取組で、女性研究者が途切れることなくキャリアアップを図ることができ、多様な視点を持った研究者がともに研究活動を行うことができる環境が構築されることを期待します。

推進体制

実施責任者
女性研究者エンパワーメント
タスクフォース（ETF）座長
大隅 典子

総長特別補佐（男女共同参画担当）
男女共同参画推進センター
副センター長
医学系研究科 教授
附属創生応用医学研究センター長

ダイバーシティ研究環境整備に向けた取組を行う本事業は、総括責任者である総長の下に組織する「女性研究者エンパワーメントタスクフォース（ETF）」が中心となり、男女共同参画委員会および男女共同参画推進センター（TUMUG）と一体となって行います。事業および本学における男女共同参画の取組全体の妥当性および進捗状況については、外部有識者により構成されるアドバイザリーボードから専門的かつ中立的な助言を受けます。



◎外部アドバイザリーボード

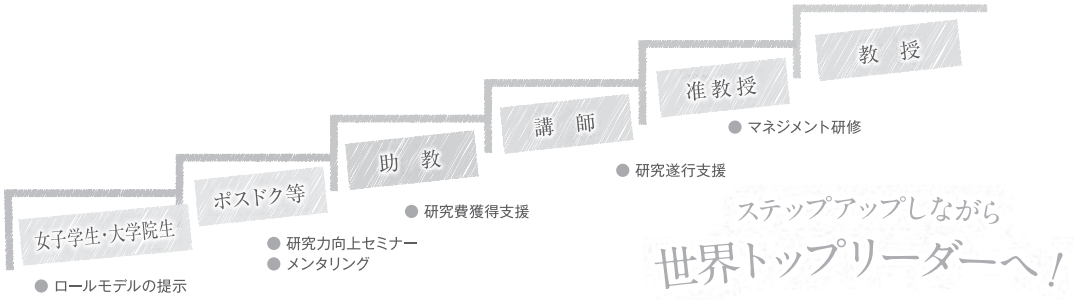
（平成28年12月1日現在）

梅田 恵 氏	日本アイ・ビー・エム株式会社 人事ダイバーシティ企画担当部長	（50音順）
鹿島 敬 氏	一般社団法人 女性労働協会会長兼専務理事	
束村 博子 氏	名古屋大学副理事（男女共同参画担当）	
前田 瑞夫 氏	理化学研究所主任研究員	
宗片 惠美子 氏	特定非営利活動法人 イコールネット仙台代表理事	
宗近 美佐子 氏	内閣府男女共同参画局推進課課長補佐	
山田 秀雄 氏	山田・尾崎法律事務所弁護士	
報道機関関係者		

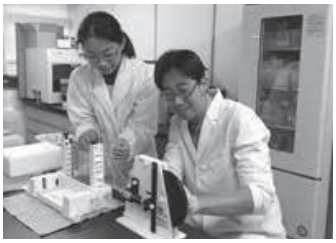
杜の都女性研究者エンパワーメント
推進事業の紹介

「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」では、
女性研究者のキャリア段階にあった以下の取組を行い、
ダイバーシティ研究環境実現の達成を目指します。

「推進します！！ 東北大エンパワーメント」



ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）事業の6つの取組



推進体制の確立

- 女性研究者エンパワーメントタスクフォース（ETF）および外部アドバイザリーボードの設置
- 調査実施 等

女性研究者の採用と上位職への積極的登用に向けた取組

- ETFによる採用・昇進促進施策の検討
- 部局の取組状況を反映させた総長裁量経費配分 等

グローバル化に対応した、ダイバーシティ研究環境整備のための取組

- 支援事業の拡大（研究支援要員（C型）の新設）
- 保育施設の新設
- 英語化による外国人研究者への対応 等

女性研究者の研究力およびリーダー育成の取組

- URAによる研究費獲得支援と共同研究のための情報収集連絡調整
- 研究発表・交流機会提供（TUMUG Forum）
- 沢柳フェロー制度による女性研究者同士のネットワーキングおよびメンタリングの促進
- 支援事業の拡大（「科学研究費助成事業」フォローアップ制度および国際学術論文作成のための英文校閲費用補助制度の新設）
- セミナー（研修）開催
- 研究成果の顕彰 等

次世代の女性研究者育成の取組

- 東北大学サイエンス・エンジェル制度の継続実施
- 奨励制度拡大の検討
- 研究職の魅力を伝えるセミナー等の実施 等

ダイバーシティ研究環境整備に関する意識醸成と広報活動

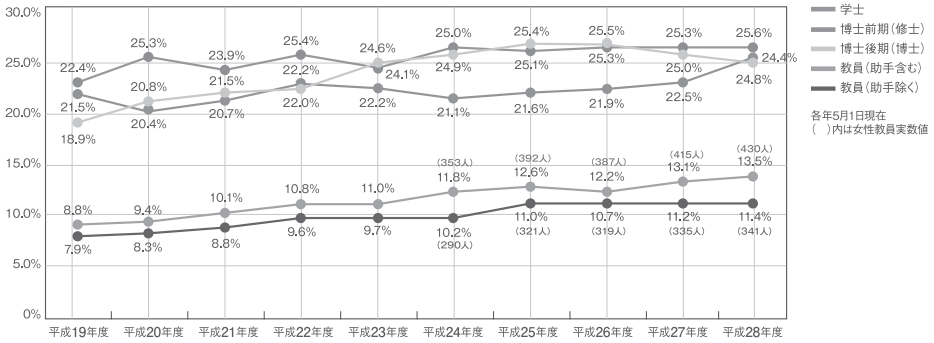
- 男女共同参画シンポジウム、管理職セミナーの開催 等

東北大学における男女共同参画の現状

東北大学における在籍教員・学生の女性比率

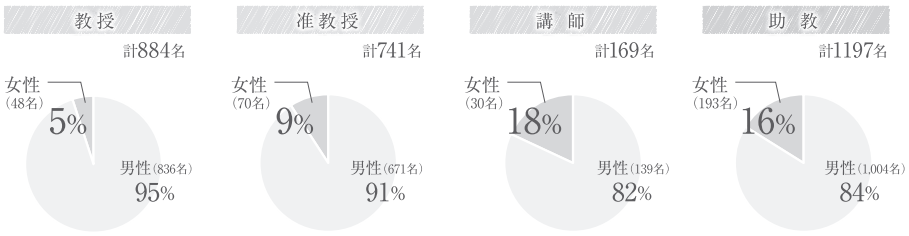
東北大学では文部科学省の女性研究者支援事業による支援や独自経費（総長裁量経費「男女共同参画・女性研究者支援事業」）による女性研究者に焦点を当てた取組により、女性教員数は着実に増加していますが、国立大学全体の平均（平成27年度15.4%）から見ると遅れをとっている現状にあります。

女性比率



東北大学における男女構成比

男性　女性　（平成28年5月1日現在）



これまでの実績

杜の都女性科学者ハードリング支援事業

Tohoku Women's Hurdling Project

平成18年度～平成20年度 …女性研究者支援モデル育成事業

女性科学者のキャリアパスにおける
障害（ハードル）を乗り越えるための取組

- 育児介護支援プログラム
- 環境整備プログラム
- 次世代支援プログラム

杜の都ジャンプアップ事業for 2013

Tohoku Leading Women's Jump Up Project

平成21年度～平成25年度 …女性研究者養成システム改革加速事業

自然科学系の女性研究者を採用・育成するための取組

- 世界トップクラス研究リーダー養成プログラム
- 新ネットワーク創生プログラム
- 研究スタイル確立支援プログラム

東北大学学内保育園:星の子保育園

平成27年度までの支援実績

研究支援要員制度	のべ 65名
ベビーシッター利用料等補助	のべ 158名
川内けやき保育園	のべ 324名
星の子保育園	のべ 143名
星の子ルーム（病後児保育）	のべ 4845名

注:平成18年度から。ただし、川内けやき保育園は平成17年度、
星の子保育園は平成22年度、星の子ルームは平成15年度から。

資料３

２８文科科第２２０号
平成２８年７月２７日

国立大学法人東北大学
学長　里見　進　殿

文部科学省科学技術・学術政策局長
伊　藤　洋一

平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」選定結果について（通知）

平成 28 年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」の公募における審査の結果を別紙のとおりお知らせします。

交付決定通知をもって、補助事業の着手（事業の実施）が可能になります。事業の実施については、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和 30 年法律第 179 号）及び同法施行令、科学技術人材育成費補助金交付要綱及び同取扱要領の規定に沿って行ってください。なお、選定された申請書類の内容どおりに交付決定されない場合があることを御承知おきください。この場合は交付決定の内容に従っていただくことになります。

【本件問合せ先】
文部科学省科学技術・学術政策局
人材政策課人材政策推進室
基礎人材推進係
電話:03-6734-4021（直通）
E-mail:kiban@mext.go.jp

別紙

選定結果	国立研究開発法人科学技術振興機構 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ委員会」からのコメント
国立大学法人東北大学 *選定*	*現状分析を十分に行い、女性教員の在籍比率及び採用比率に係る意欲的な目標を掲げていることは評価できる。さらに、外部アドバイザリーボードを設置し取組成果のフィードバックを図ること、URA の活用、フォローアップ研究費支援、女性上位職教員をリーダーとする研究プロジェクトの支援等により、女性研究者の研究力向上を図ることは評価できる。* *女性教員在籍比率の増加が緩やかで、特に自然科学系分野の女性教授・准教授の在籍比率が未だ低いことの原因分析を十分に行い、実効性の高いポジティブ・アクションを策定し、確実に数値目標を達成することを期待する。* *今後は、こうした点を踏まえつつ、「第５期科学技術基本計画」や「第４次男女共同参画基本計画」に掲げる我が国全体の自然科学系分野における女性研究者の新規採用割合に関する目標値の達成への寄与も念頭に置き、各種取組を積極的に推進することを期待する。*

資料４

文部科学省　科学技術人材育成費補助事業　ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）

第13回　東北大学男女共同参画シンポジウム

男性性を問う

平成29年 1月29日(日)
13:00—17:00

開催場所
東北大学星陵キャンパス
医学部開設
百周年記念ホール
（星陵オーディトリアム）

主催
東北大学男女共同参画委員会

TOHOKU UNIVERSITY

ごあいさつ

東北大学 総長
里見　進

開会にあたり、一言ご挨拶いたします。
はじめに、このたび第１３回目の東北大学男女共同参画シンポジウムを開催できますことに、深く御礼を申し上げます。

さて、本シンポジウムの開催にあたり、今回のシンポジウムに期待していることについてお話しさせていただきます。

このシンポジウムを主催する東北大学男女共同参画委員会は、平成１１年６月の「男女共同参画社会基本法」施行と、平成１２年５月の国立大学協会ワーキング・グループの報告を契機として、平成１３年４月に本学に設置されました。

以来、男女共同参画推進のための東北大学宣言の策定、男女共同参画にかかる研究や取組を奨励する沢柳賞の創設などにより、本学における男女共同参画意識の醸成、学内保育施設の設置など仕事と育児･介護の両立支援策の充実を図ってまいりました。

また、このたび平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (特色型)」に採択されました。「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」と名付けたこの事業では、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や、女性研究者の研究力向上のための取組、および上位職への積極採用に向けた取組を進めていくことにしております。

一方、毎年シンポジウムを開催することにより、本学における男女共同参画推進の取組をその都度振り返り、大学の役割や推進施策などについて議論を重ね、今回は第１３回目の開催となります。

毎回主要テーマを設けていますが、これまでは男女共同参画については、女性の視点から扱われることがほとんどでしたが、今回は、既存の社会をリードしてきた男性の特性に視点を置き「男性性を問う」というテーマにいたしました。本学におけるこれまでの取組状況を振り返りつつ、現代社会において男性はどのような男性性に絡めとられているのか、既存の男性社会に変革の可能性はあるのかを本日お集まりの皆様とともに考え、議論したいと考えております。

本日は、来賓として内閣府男女共同参画局推進課課長補佐　宗近美佐子様にお越しいただきご挨拶を頂戴することにしております。

また、沢柳賞を発展させ、今年で第3回を迎える澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）の授賞式、及びその受賞者である名古屋大学男女共同参画室室長　束村博子先生（副理事・生命農学研究科教授）による受賞講演もお願いしております。

さらに、特別講演として東京大学東洋文化研究所教授　安冨歩先生に　「男女」の区分けという見えない金網について　というタイトルでご講演いただきます。そしてパネルディスカッションは　「男性標準」社会を問い直す　というテーマで関西大学文学部教授　多賀太先生、武蔵大学社会学部社会学科助教　田中俊之先生にお話しいただきます。

このように多く皆様にお忙しい中お集まりいただき、本日のシンポジウムが開催できることを大変光栄に思います。

最後に、本シンポジウムが、本日おいでの皆様それぞれの立場で、男女共同参画の推進についてお考えいただく契機になりますとともに、この議論が、本学の研究・教育の発展、ひいてはこれからの男女共同参画社会の推進に大きく寄与していくことを祈念し、私の挨拶といたします。

平成２９年１月２９日

第１３回東北大学男女共同参画シンポジウムプログラム

平成 29 年 1 月 29 日（日）１３：００～１７：００

総合司会　東北大学男女共同参画委員会　広報・シンポジウム WG
　　理学研究科　教授　　**寺田　眞浩**

１３：００　開会挨拶　東北大学　総長　**里見 進**

１３：０５　来賓挨拶　内閣府男女共同参画局推進課課長補佐　**宗近　美佐子**氏

第Ⅰ部

１３：１０　第３回 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（澤柳記念賞）授賞式及び講演会

Ａ賞（本賞）

名古屋大学男女共同参画室　准教授　**三枝　麻由美**氏

１３：４０　東北大学における男女共同参画の取り組みについて

東北大学男女共同参画推進センター副センター長、医工学研究科／工学研究科　教授　**田中　真美**

東北大学総長特別補佐（男女共同参画担当）、男女共同参画推進センター副センター長、

医学系研究科　教授　**大隅　典子**

---------- 休憩（１４：１０～１４：３０） ----------

第Ⅱ部

１４：３０　講演１　父親への期待の変化とその社会的背景

武蔵大学社会学部社会学科　助教　**田中　俊之**氏

１５：００　講演２　男性にとっての男女共同参画の意義と課題

関西大学文学部　教授　**多賀　太**氏

---------- 休憩（１５：３０～１５：５０） ----------

１５：５０　講演３　Why Diversity -個人と組織を強くするための戦略

日本アイ・ビー・エム株式会社　人事ダイバーシティー企画担当部長　**梅田　恵**氏

１６：２０　パネルディスカッション　「男性標準」社会を問い直す

コーディネーター：東北大学男女共同参画委員会　委員、医学系研究科　教授　**朝倉　京子**

１６：５０　講評・閉会挨拶　東北大学男女共同参画委員会　委員長　**植木　俊哉**

１７：００　閉会

来賓

内閣府男女共同参画局推進課課長補佐
内閣府仕事と生活の調和推進室
宗近　美佐子氏

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞　歴代受賞者

第Ⅰ回 （平成26年度）	A賞	日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について
		明治大学法科大学院 教授 辻村みよ子氏
	B賞	サイエンス・エンジェル修了生を中心とした有志団体による男女共同参画への取組み
		SA輝友会
第2回 （平成27年度）	A賞	日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動
		日本大学薬学部・薬学研究所 上席研究員 大坪 久子氏
	B賞	“新大 Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育
		新大 Wits

A賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、特段に優れた成果を挙げている個人又はグループ

B賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活躍を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42歳以下）の個人又は若手で構成されるグループ

第2回澤柳記念賞授賞式
新大 Wits

第2回澤柳記念賞受賞講演
日本大学薬学部・薬学研究所　上席研究員　大坪久子氏

第3回「澤柳記念賞」

第3回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞審査結果及び講評

東北大学男女共同参画委員会　委員長 植木　俊哉

本学では、平成１５年度より１０年間にわたり、東北大学における男女共同参画を推進するため、「東北大学男女共同参画奨励賞（通称：沢柳賞）」として、教職員及び学生の皆さんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励してきました。

平成26年、さらなる男女共同参画社会を目指し、沢柳賞を改め、「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）」を創設しました。この賞は、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰する目的で設置しました。これまでの沢柳賞と異なり、学内だけでなく学外からも広く公募することで、より多くの方へ男女共同参画推進の理念を広げたいと考えています。名称は、東北大学の理念である「門戸開放」の方針を打ち出し、全国に先駆けて女子学生に帝国大学の門戸を開く素地を作った初代総長澤柳政太郎の功績にちなんでいます。澤柳記念賞は、本賞（A賞）のほか、４２歳以下の若手を奨励する目的で設置された奨励賞（B賞）の２部門からなります。審査においては男女共同参画に関連する研究や活動の奨励、男女共同参画社会実現へ向けての積極的な提言や企画を重視しています。

厳正な審査により、以下のように受賞者が決まりましたので、審査の講評とあわせてご報告いたします。

第3回（平成28年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

A賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞　受賞課題

課 題 名　大学における男女共同参画推進事業のモデル化による国際的拠点化

受 賞 者　名古屋大学男女共同参画室

講　　評　同大学は国連ウィメンにより女性活躍を推進する「世界のトップ10大学」として国内で唯一選出されるなど、「男女共同参画を推進する大学」として高く認知されている。また、同大学がこれまで行ってきたポジティブアクション、産学官連携による男女共同参画の推進、女性リーダー育成プログラムなどの先覚的な取組は、日本に留まらず国際的に評価されている。これらの業績は特に顕著なものであり、澤柳記念賞としてここに顕彰する。

B賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

該当なし

本賞

第3回「澤柳記念賞」講演

日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動

名古屋大学男女共同参画室　室長 **束村博子**氏（副理事、生命農学研究科教授）

講演要旨

日本では、女性の活躍は限定的であり、ジェンダー・ギャップ指数は145ヶ国中111位（世界経済フォーラム,2016年）と、他の先進諸国と比べて極めて低い。とりわけ、意志決定に関わることができる管理職に就く女性割合は、アジア諸国や先進諸国の中で最低レベルである。一方で、今後「女性の活躍」を積極的に推進することにより、組織や日本全体の活性化に資する「伸びしろ」が生まれると期待される。

そもそも性は、生物が有性生殖を通じて多様な遺伝子を次世代に引き継ぐためにある。遺伝子の多様性は、様々な環境変化への適応のチャンスを増やし、種の保存に資する原動力となって来た。人間社会においても、人々の多様性を認め、性別によらずすべての人が活躍すれば、様々な困難に立ち向かい克服できるチャンスが増えるに違いない。未来の日本や世界をより良くするために、様々な分野で女性が活躍することが期待されている。とりわけ意志決定に関わる女性リーダーの活躍が、活気あふれる日本社会の実現のため、大きな原動力になるだろう。

名古屋大学では、女性の活躍を推進するために、さまざまな取組を行って来た。2002年度には全国に先がけて男女共同参画室を設置し、ワークライフバランスの向上や女性教員の増加に資する施策や、理系女子学生への支援を実施してきた。また、文科省リーディング大学院事業に「「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム」が採択され、グローバルに活躍する女性リーダーの育成に努めている。これらの取組の結果、名古屋大学は、国連機関 UN Women により、女性活躍に積極的に取り組む世界のトップ10大学として、日本で唯一選ばれた。今後は、日本・アジア・世界における男女共同参画推進の牽引役となれるよう努力したい。

略　歴

1986年3月　名古屋大学農学部畜産学科卒業
1986年4月　名古屋大学大学院農学研究科博士課程前期課程入学
1988年4月　同後期課程進学
1990年10月　米国カンサス大学医学部留学
1991年3月　名古屋大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了
農学博士（名古屋大学農400号）の学位を授与

職　歴

1989年4月　日本学術振興会特別研究員（DC）
1991年4月　米国カンサス大学医学部博士研究員
1991年10月　名古屋大学農学部助手に採用
1998年4月　名古屋大学大学院生命農学研究科助（准）教授に昇任
2004年2月～2008年3月　大学共同利用機関法人自然科学研究機構基礎生物学研究所客員助（准）教授（併任）
2006年4月～2015年3月　名古屋大学男女共同参画担当総長補佐（兼任）
2006年4月～　名古屋大学男女共同参画室長（兼任）現在に至る
2013年3月　名古屋大学大学院生命農学研究科教授に昇任、現在に至る
2015年4月～　名古屋大学副理事（男女共同参画担当）、現在に至る

主要著書・論文

●束村博子他（2003）
ブルーバックス「生命をあやつるホルモン」（共著）、日本比較内分泌学会編
●束村博子（2004）
生物学とジェンダー．松本伊瑳子、金井篤子（編）「ジェンダーを科学する」、
93-113、ナカニシヤ出版
●束村博子（2006）
「対外報告、提言：ジェンダー視点が拓く学術と社会の未来」学術とジェンダー委員会、日本学術会議
●束村博子（2008.1）
性差とは何か？―ジェンダー研究と生物学の対話―（学術会議叢書14）
153-168、日本学術協力財団
●束村博子　（2013）
繁殖生物学「中枢神経系の性分化」日本繁殖生物学会［編］
164-182 インターズー

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

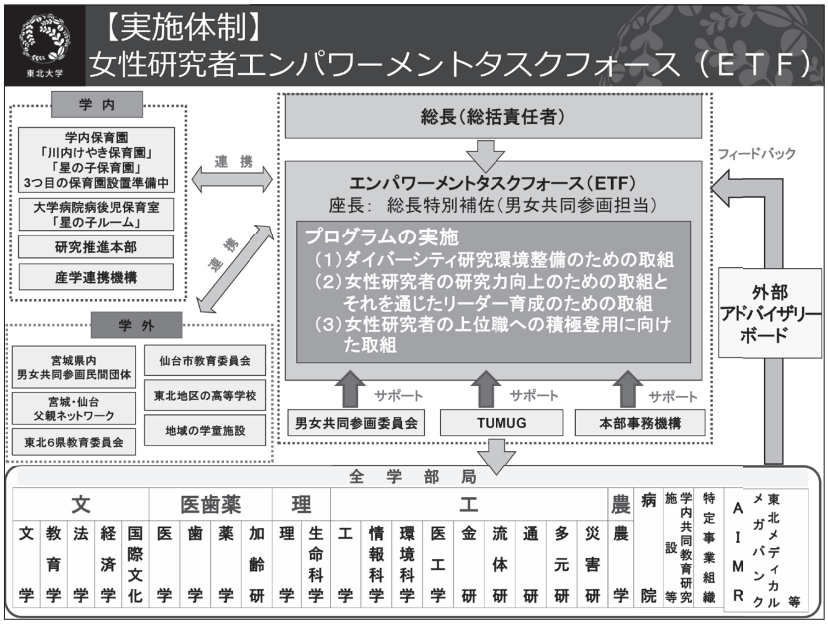
東北大学男女共同参画委員会副委員長　男女共同参画推進センター副センター長
医工学研究科／工学研究科　教授　田中　真美

東北大学では、男女共同参画の実現に向けた委員会活動とともに、女性研究者がキャリアパスの障害を乗り越えるための支援として、平成18-20年度に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者支援モデル育成）、平成21-25年度に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者養成システム改革加速事業、現科学技術人材育成費補助金）を実施してきた。平成26年度からはこの成果を踏まえ、男女共同参画推進センターを中心に、大学独自予算でこれらの事業を継続している。

さらに今年度は、平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に本学の「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」が採択された。本事業は、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、各機関・地域の特色を踏まえた、女性研究者の活躍推進に向けた機関としての目標・行動計画を設定・公表することを要件とし、女性研究者のライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や女性研究者の研究力向上のための取組及び女性研究者の積極採用や上位職への積極登用に向けた取組を支援するものである。

これらの取組を精力的に進め、今後一層本学における男女共同参画の推進を図る予定である。

図　杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業実施体制



パネルディスカッション

略　歴

平成8年3月　九州大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
平成8年4月　九州大学　教育学部　助手
平成9年4月　日本学術振興会特別研究員（PD）
平成10年4月　久留米大学　文学部　専任講師
平成13年4月　同　助教授
平成19年4月　同　准教授
平成20年4月　関西大学　文学部　准教授
平成21年4月　同　教授　教授

「男性標準」社会を問い直す

パネリスト：関西大学文学部　教授　多賀　太氏

講演要旨

「男女共同参画」は、ともすれば「女性の社会参画」や「女性の地位向上」と同義と見なされ、男性にとっては他人事のように思われがちであるが、決してそうではない。

一方で、女性が職業領域で活躍するためには、従来の「男性的な」働き方を標準とする社会の変革が必要であり、それゆえ男性自身の変化が要請される。従来の日本の職場では、暗に家庭責任を免除された男性労働者が「標準」と見なされてきた。私生活を犠牲にしてでも長時間労働や不規則な勤務をこなして成果を上げた者がよりよい条件の地位を与えられ、そうした要請に応えられない者は職場で周辺化・排除されてきた。いくら男女間での職務上の機会均等が保証されても、子育てや介護などの家庭責任を負う者（これまでそのほとんどは女性であった）は圧倒的に不利となる。研究者の世界もこの例に漏れない。

他方で、男性も従来の固定的な性別役割分業のもとで疲弊しつつある。男性への稼ぎ手責任期待は根強いが、雇用システムと賃金体系の変化は、そうした役割を果たせる男性の割合を縮小させている。また、稼ぎ手責任を果たせている男性の多くも、多大な労働負担と引き換えに、子育てや地域に関わる人生の貴重な機会を奪われたり、心身の健康を害したりしている。女性の社会参画と経済的自立を促すことは、男性の稼ぎ手責任を軽減させ、男性のワークライフバランスと生活の質の向上に資する。

したがって、大学および学術界には、家庭責任を負った教職員・研究者が性別にかかわらず能力を向上・発揮できる労働・研究環境の整備が求められている。このことは、将来の男女共同参画社会を担う学生たちの教育・訓練機関としても極めて重要な課題である。

主な活動・著書

専門は教育社会学、ジェンダー論。1990年代半ばから、関西や九州で男性が抱える問題の解決や男性の生き方の問い直しに取り組む市民活動に参加。これまでに、地方自治体の男女共同参画審議会委員を数多く務め、各地で男女共同参画の啓発講演を行うほか、助言者として学校でのジェンダー平等教育の実践にも参加。近年の大学での講演に**「錯綜する〈男らしさ〉のポリティクス」**（一橋大学 2016年6月）、**「男性にとっての男女共同参画の意義と課題」**（山口大学2015年11月）。現在、大阪市男女共同参画審議会会長、女性に対する暴力防止の啓発に男性主体で取り組む**「一般社団法人ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン」**共同代表。著作に**『男子問題の時代？』**（学文社2016年）、**『男性の非暴力宣言』**（共著、岩波書店2015年）、**『揺らぐサラリーマン生活』**（編著、ミネルヴァ書房2011年）、**『男らしさの社会学』**（世界思想社2006年）など。

パネルディスカッション

「男性標準」社会を問い直す

パネリスト：武蔵大学社会学部社会学科　助教　**田中　俊之**氏

講演要旨

イクメンが流行語になり、家庭内において、父親は経済的な大黒柱としての役割を果たすだけでは十分ではなく、家事・育児参加をするのが「当たり前」だとする風潮がある。現実としては、６歳未満の子どもを持つ男性の家事・育児の合計は、一日あたり平均１時間７分にとどまっている。スウェーデンの父親は、家事・育児に３時間２１分を割いているし、アメリカやイギリスでも３時間弱である。

このデータだけで、「日本の男性は欧米を見習ってもっと家事・育児に従事するべきだ」という結論に至るのは早計である。週の労働時間が６０時間を超えている男性は、長期的な傾向としては減少しているものの、３０代・４０代でそれぞれ１７％、１６．９％にも達している。他国とは比較にならない男性の働きすぎを放置したまま、父親に家事・育児への参加を促すのは明らかに無理がある。

同様のことは、共働きはすでに「普通」だという主張にも当てはまる。確かに、建築や製造といったかつての主力産業が衰退し、フルタイムで働く男性全般の賃金が減少傾向にある現代の日本では、子育てをしながら安心して共働きできる社会を目指すべきである。しかし、「女性の活躍」が社会的な課題として強調されているにも関わらず、６歳未満の子どもを持つ母親のうち、正社員として働いている女性は２割に満たず、非正社員が２割程度、残りの５割以上は専業主婦である。

現代の日本社会においては、父親に対する期待は変化しているが、性別分業を前提とした社会構造は維持されているという矛盾がある。こうした現実を踏まえて、今後の父親のあり方について検討する。

主な活動・著書

●**『男性学の新展開』**青弓社
●**『男がつらいよ――絶望の時代の希望の男性学』**KADOKAWA
●**『〈40男〉はなぜ嫌われるか』**イーストプレス
●**『男が働かない、いいじゃないか！』**講談社
●**『不自由な男たち―その生きづらさは、どこから来るのか』**祥伝社
渋谷区男女平等・多様性社会推進会委員
2016年
男女共同参画に関する市民講座実績
1月 東京都国分寺市、2月東京都三鷹市、神奈川県南足柄市、東京都稲城市、3月富山県富山市、北海道札幌市、6月埼玉県川口市、東京都立川市、兵庫県西宮市、7月東京都西東京市、東京都葛飾区、8月東京都北区、9月京都府京都市、10月岡山県岡山市、神奈川県海老名市、東京都武蔵野市、12月福岡県福岡市

略　歴

1999年3月31日 武蔵大学人文学部社会学科卒業

2001年3月31日 武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士前期課程修了

2004年3月31日 武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得退学

2005年4月1日 学習院大学「身体表象文化学プロジェクト」研究員

2008年4月25日 博士（社会学）取得 武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻甲第７号

2013年4月1日 武蔵大学社会学部助教

第１３回東北大学男女共同参画シンポジウム　　講演３

Why Diversity -個人と組織を強くするための戦略

日本アイ・ビー・エム株式会社

人事ダイバーシティー企画担当　部長　**梅田　恵氏**

【講演要旨】

1911年の創業当時から「機会均等」を人事の基本方針として、従業員の多様性を尊重してきたIBM。、IBMが提供する社会的、創造的機会における、人種、肌の色、宗教、性別、性的傾向、国籍、渉外、年齢による差別を禁じてきました。1990年代前半にIBMは経営危機に直面し、ダイバーシティーを経営戦略の柱の１つとして推進し、ビジネス、企業文化、人材育成について大きな変革をします。IBMのダイバーシティーに対する取組みの歴史と、女性、障がい者、LGBT、働き方改革についての具体的な施策、取組み、社会への働きかけ事例についてご紹介しながら、なぜIBMがダイバーシティーの推進に取り組み続けるのか、IBMにとってダイバーシティーとは何なのかをお話します。

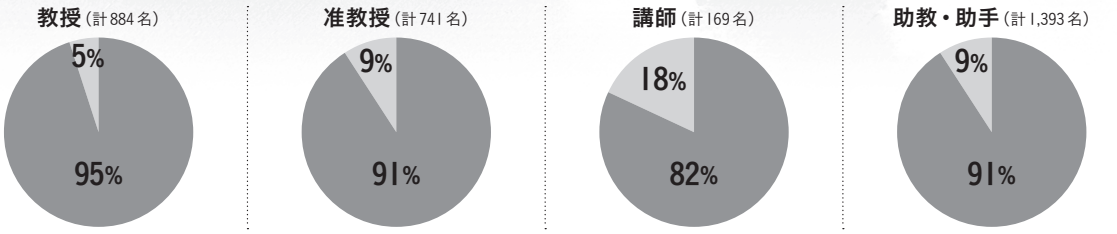
【略　　歴】

1987年日本IBM入社。主として広報部門でキャリアを積み、2004年研究開発部門担当広報課長、2007年人事広報担当部長　2008年 ダイバーシティー担当兼任、現在に至る。
女性、障がい者、性的少数派、外国籍、世代、ワークライフに注目したプログラムの企画・開発を担当。2011年に本社（東京都中央区）、2015年に幕張事業所（千葉県）に企業内保育施設をそれぞれ開設。

東北大学における男女構成比と推移　平成２８年5月1日現在

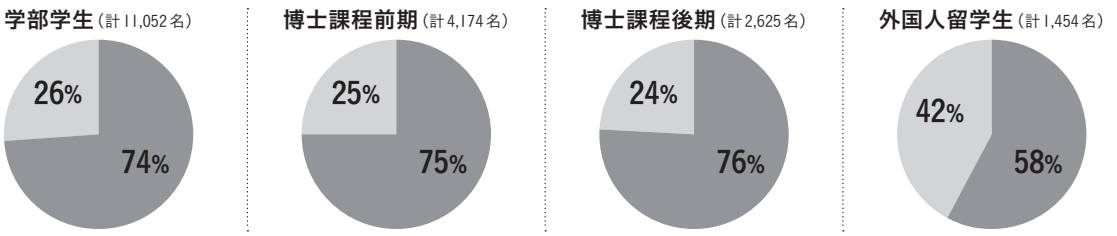
教員男女構成比

■男性　□女性



学生男女構成比

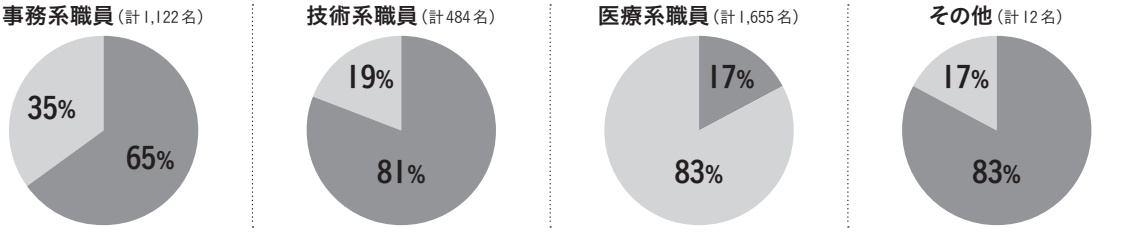
■男性　□女性



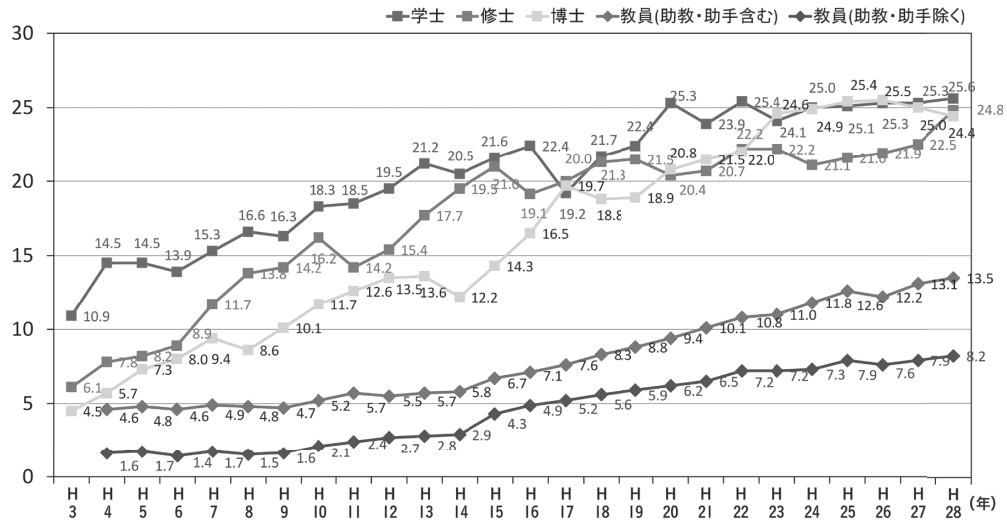
※外国人留学生の数は学部学生・博士課程の内数

職員男女構成比

■男性　□女性



男女構成比推移



MEMO

MEMO

お問い合わせ先

東北大学総務企画部総務課

Tel. 022-217-4811
Fax. 022-217-5906
Mail.danjyo@grp.tohoku.ac.jp
http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

東北大学は男女共同参画を推進しています

東北大学男女共同参画推進センター

Tel. 022-217-6092
Mail.tumug@morihime.tohoku.ac.jp/
http://www.morihime.tohoku.ac.jp/

東北大学における
男女共同参画推進のための行動指針

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生３名の入学を許可した。その３名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」(2002年)のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。また、2003年度に21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進(理論整備・活動支援)において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の７項目を策定する。

■両立支援・環境整備

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

■女性リーダー育成

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

■次世代育成

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル(SA)活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

■顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

■地域連携

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

■国際化対応

ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

■支援推進体制

上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事(若しくは副学長)と総長特別補佐(男女共同参画担当)を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。

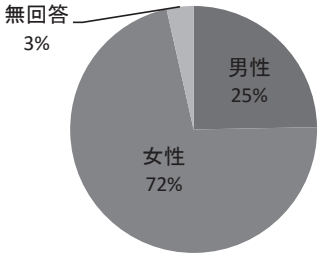
平成25年8月8日

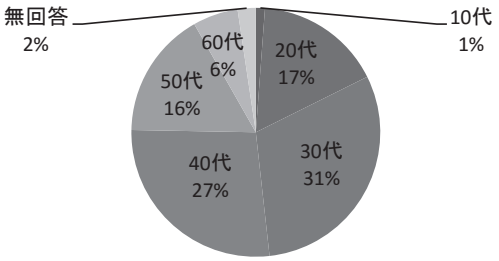
資料５

第13回東北大学男女共同参画シンポジウム アンケート集計結果

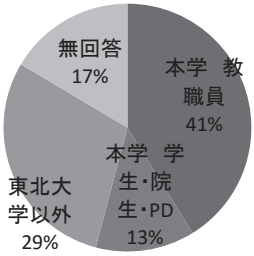
上記シンポジウムに参加された方々に、今後のシンポジウム開催の参考とするため、内容等に関してアンケートを行った。参加者157名のうち、85名の方から回答をいただいた。

Q1 あなたの性別と年齢をお教えください。



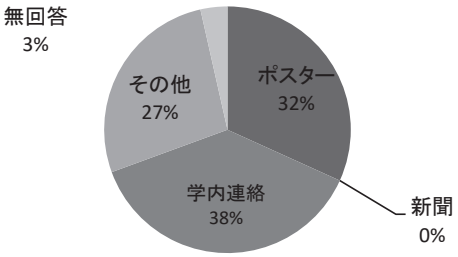


Q2 ご職業（もしよろしければ、会社名、職名も）をお教えください

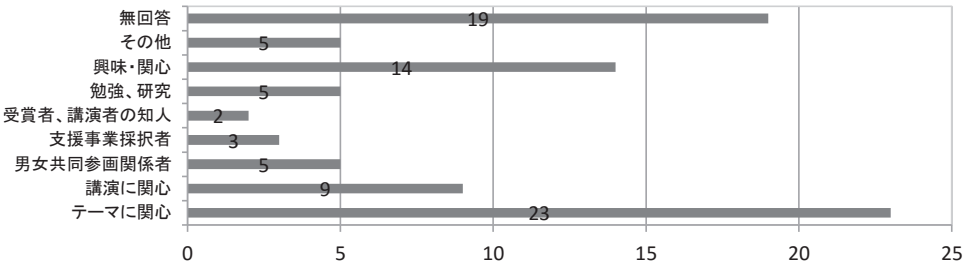


＜一般（アンケート記載分）＞
仙台市役所市民局男女共同参画課／宮城県共同参画社会推進課
（独）国立女性教育会館事業課／多賀城市教育委員会生涯学習課
大阪府立大学　ダイバーシティ研究環境研究所
筑波大学　ダイバーシティ部門／茨城大学ダイバーシティ推進室
宇都宮大学男女共同参画推進室／産総研ダイバーシティ推進室
NPO法人　ファザーリングジャパン　東北事務局　／旭硝子
東京大学／宮城大学／東京電機大学
立命館大学／九州大学/青葉学院短期大学
一般市民

Q3 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか。※複数回答あり

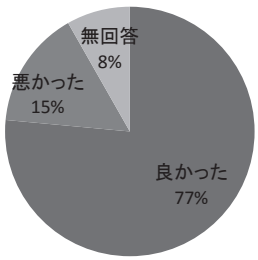


Q4 このシンポジウムに参加された動機は何ですか。



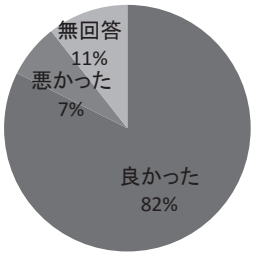
回答（一部抜粋）
仙台市において29年度より男性相談室の開設を検討しており、その一助として／テーマに興味があった／男性学　田中先生に関心があった／学生支援業務に携わる立場から学生が今後のキャリアを考えるうえで、考慮すべき点を学びたいと思った／男性に視点を置いた男女共同参画の議論に興味があった／情勢を把握したい／安冨歩先生のご講演が予定されていたため／男性性に視点を当てたシンポジウムは貴重／ダイバーシティで男性に着目した進歩がほとんどない中、貴重な機会／研究で両親学級を扱っており、男性について知識を得たかった／他大学・企業の取組に興味があった／今後アカデミアに残る（かもしれない）ので、生活と仕事を両立していくうえで、参考にしたい／自分のキャリア形成やワークライフバランスで模索中のため／学内外の状況をしりたかった

Q5 開催時期について



「悪かった」とお答えの方、どのような時期がよいか：
最も教職員の多忙な時期では？／子どもを保育所で預かってもらえるため、土曜日がよかった／上半期の方がよい／11月頃／年末（11．12月）とにかく年度末卒論修論提出シーズンを避けてください。／年度末は忙しい／平日が望ましい

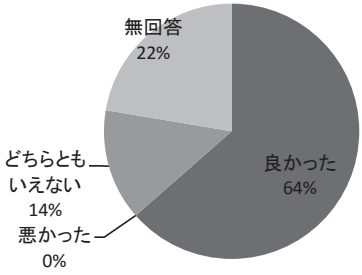
Q6 会場について



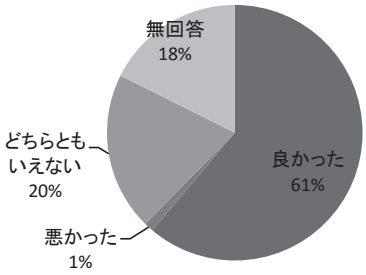
「悪かった」とお答えの方のコメント
片平さくらホール等アクセスのよいところ／駅が近いところ／構内道案内がほしかった／片平さくらホールか青葉山サイエンスホール

Q7 内容について

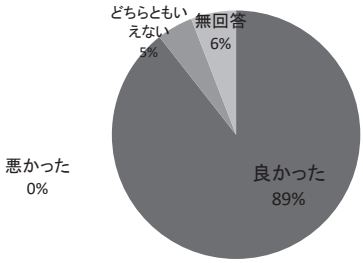
【澤柳記念賞受賞講演】



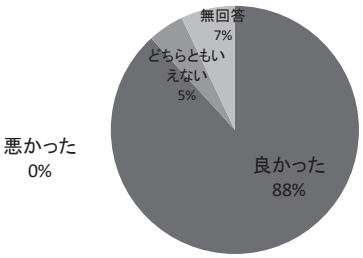
【男女共同参画の取組について】



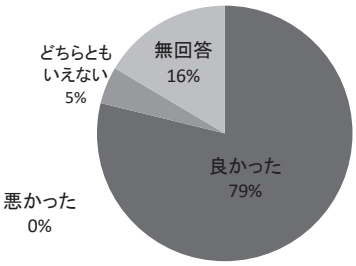
【講演1】



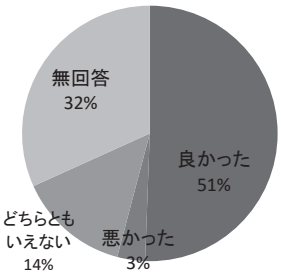
【講演2】



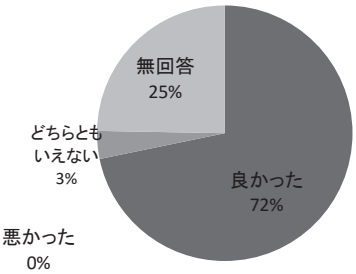
【講演3】



【パネルディスカッション】



【全体として】



資料６

第5回 仙台Iゾンタクラブ

東北大学大学院 女子学生海外渡航 支援事業

TOHOKU UNIVERSITY

世界で活躍できる女性の人材育成のため、渡航費用を支援します。

応募資格

本学に在籍する大学院女子学生（渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。研究分野、国籍は問わない。なお、これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。）

応募要件 ※下記1～3を全て満たすものであること。

1. **平成28年7月～平成29年3月**の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究集会等であること。（学会運営のための委員会等は対象としない。）
2. 特定の主題について、当該大学院生が研究発表を行うことを目的として、参加するもの。（資料収集のための参加等は対象としない。）
3. 本事業に応募するものと同一内容で他の外部資金から助成を受けていないもの。

※交通費（電車、バス、航空機の運賃等）が15万円を超える場合、不足分を大学（研究室など）で補填できることをご確認の上ご応募ください。

採択件数

2件（予定）

支援内容

申請に基づき、渡航に係る費用を**15万円を上限**として、事後に支給（精算払）する。

応募方法

下記書類を総務企画部総務課総務係まで送付すること。

（1）応募申請書（男女共同参画委員会ホームページよりダウンロードすること。）

（2）発表演題（予定）の英文アブストラクト（様式任意）
※発表演題と発表者名（共同発表者があれば、その氏名）も記入すること。

（3）航空運賃見積書
※エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）

（4）参加する国際学会等の概要が分かる書類（開催通知又はプログラム等）
※申請時点で取り寄せることができる、当該国際学会等の概要ー開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたものーがわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

応募締切

平成28年6月13日（月）必着
※審査結果は、本人宛てに6月下旬ごろ通知予定。

採択者の義務

1. 帰国後4週間以内に別に定める様式により、報告書を提出すること。
※この報告書は仙台Ｉゾンタクラブへ送付するほか、本学男女共同参画委員会ホームページへ掲載する。
2. 事後に本事業出資者である仙台Ｉゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

※採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台Ｉゾンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。
※採択後、学外へ転出、またはやむを得ない事情により、申請内容について変更が生じた場合又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記問い合わせ先へ連絡すること。

東北大学男女共同参画委員会／男女共同参画推進センター

【応募書類提出先・お問合せ先】
総務企画部総務課 〒980-8577 **仙台市青葉区片平2-1-1**
TEL：022-217-4811 E-mail：danjyo@grp.tohoku.ac.jp HP：http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

第５回　仙台Ｉゾンタクラブ 東北大学大学院
女子学生海外渡航支援事業　公募要項

１　主旨および目的

２００７（平成 19）年、本学創立 100 周年を記念して、国際理解と社会奉仕、女性の社会的地位向上を目指す団体「仙台Ｉゾンタクラブ」から、これからの社会を担う前途有為な人材への支援として、本学に在籍する大学院女子学生を対象とした支援金（名称：仙台Ｉゾンタクラブローズ支援金※）が贈呈されました。

男女共同参画委員会では、この支援金をもとに、世界で活躍できる女性の人材育成並びに本学における男女共同参画を推進することを目的として、女子大学院生が国際学会で研究発表を行う際の渡航費用を支援します。

※2012（平成 24）年から、事業の名称を改め、「仙台Ｉゾンタクラブ東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業」として実施。

２　応募資格

本学に在籍する大学院女子学生

※ 渡航時にも本学大学院女子学生の身分を有する者。

※ 研究分野、国籍は問わない。

※ これまで海外において開催される国際学会等で研究発表を行う機会が少なかった者を優先する。

３　応募要件

下記（１）～（３）を全て満たすものであること。

（１）平成２８年７月～平成２９年３月の間に海外で開催される国際学会、シンポジウム、セミナー及び研究集会等であること（学会運営のための委員会等は対象としない）。

（２）特定の主題について当該大学院生が研究発表を行うことを目的として参加するもの（資料収集のための参加等は対象としない）。

（３）本事業に応募するものと同一内容で他の外部資金から助成を受けていないもの。

※ ただし、交通費（電車・バス・航空機の運賃等）が 15 万円を超える場合、不足分を大学（研究室等）で補填できることをご確認の上ご応募ください。

４　採択件数

２件（予定）

５　支援内容

申請に基づき、渡航に係る費用を支給する。（１５万円上限／精算払）

６　申請書類

（１）応募申請書（男女共同参画委員会ホームページよりダウンロードすること）

（２）発表演題（予定）の英文アブストラクト（様式任意）
※ 発表演題と発表者名（共同発表者があれば、その氏名）も記入すること。
（３）航空運賃見積書
※ エコノミークラスで、開催地と本邦間の最も経済的な経路による航空運賃（空港使用料・航空保険料等を含む。）
（４）参加する国際学会等の概要が分かる書類（開催通知又はプログラム等）
※ 申請時点で取り寄せることができる、当該国際学会等の概要－開催期間、全体会、分科会等の構成が記載されたもの－がわかるもの、もしくは会議主催者からの採録通知等。

７　申請締切

平成２８年６月１３日（月）必着

８　申請書類提出先

片平キャンパス：総務企画部総務課総務係

９　注意事項

（１）応募にあたっては、指導教員の承認を受けた上で提出すること。
（２）同一研究室内で同一国際学会等への渡航支援を希望する女子学生が複数いる場合、当該研究室教授等は申請書の推薦理由欄に推薦順位を記載すること。
（３）提出された申請書等は原則として返却しない。
（４）審査の過程において又は採択された場合、さらに必要な資料の別途作成、提出を求める場合がある。
（５）申請内容について大幅な変更が生じた場合は、採択を取り消す場合がある。
（６）申請は１名１件限りとする。

１０　結果通知

６月下旬ごろ本人宛てにメールにて通知予定。

１１　採択者の義務

（１）帰国後４週間以内に別に定める様式により、報告書を提出すること※。
※ この報告書は仙台ＩゾンタクラブへＩ送付するほか、本学男女共同参画委員会ホームページへ掲載する。
（２）事後に仙台Ｉゾンタクラブの例会において、国際学会等での発表や体験などについて報告すること。

１２　その他

（１）採択者はその氏名、学年、参加した国際学会等の名称及び報告内容について、仙台Ｉゾンタクラブホームページ上で紹介されることがあるので、あらかじめ承知すること。

（２）採択後、学外へ転出、又はやむを得ない事情により申請内容について変更が生じた場合、又は参加を取り止めた場合は、速やかに下記お問合せ先へ連絡すること。

東北大学男女共同参画委員会

【応募書類提出先及びお問合せ先】

東北大学総務企画部総務課総務係（学内便の場合は「事Ｂ-３」）

〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1

電話番号：022-217-4811

メールアドレス：danjyo@grp.tohoku.ac.jp

ホームページ: https://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

資料７

第3回（平成28年度）

澤柳政太郎記念
東北大学男女共同参画賞
（澤柳記念賞）
公　募

東北大学に脈々と受け継がれる
男女共同参画の精神を広げよう

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎氏により打ち出された
「門戸開放」という理念のもとに、
1913年（大正2年）に全国に先駆けて帝国大学の門戸を女性に開きました。
それから100年の歴史を経て、本学ではさらなる男女共同参画社会を目指し
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）を創設しました。
この賞はアカデミアにおける男女共同参画の先駆として
各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰いたします。
今年度下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

応募締切

平成28年 **7月29日**（金） 当日消印有効

受賞課題発表

平成28年 **9月22日**（木）

受賞内容

A　澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について特段に優れた成果を挙げている個人またはグループ）

B　澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞
（東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活動を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42歳以下）の個人または若手で構成されるグループ）

◎ 受賞は上記A、B各1件の合計2件です。
◎ 上記AとBへの重複推薦はできません。
◎ 選考委員会にて受賞者を決定いたします。
◎ 受賞者（受賞グループ）は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム（秋に開催予定）で成果を発表していただきます。

対象資格

◎ 東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
◎ 本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

推薦方法

以下の❶～❹を下記提出先まで郵便またはメールにて提出して下さい。

❶ 推薦書（下記ホームページよりダウンロードして下さい。）
❷ 受賞候補者について確認できる資料（略歴、パンフレット等）
❸ 成果資料等（成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等。）
❹ 推薦理由書

注意事項

◎ 提出された書類等は原則として返却しません。
◎ 後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

東北大学男女共同参画委員会
東北大学男女共同参画推進センター
【 応募書類提出先・お問合せ先 】
総務企画部総務課総務係
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1
TEL：022-217-4811
E-mail：danjyo@grp.tohoku.ac.jp
HP：http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

TOHOKU UNIVERSITY

第３回（平成２８年度）
澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞
（通称：澤柳記念賞）公募要項

【主旨及び目的】

東北大学は初代総長であった澤柳政太郎により打ち出された「門戸開放」という理念のもと、1913 年（大正 2 年）に全国に先駆けて女子に帝国大学の門戸を開きました。澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）はこの初代総長の名前にちなんでおり、男女共同参画社会を目指す活発な取組の一助となるよう、アカデミアにおける男女共同参画の先駆けとして各分野で活躍し多大な貢献をされた方々を選考し顕彰いたします。

今年度も下記の要領で募集いたしますので、推薦をお願いいたします。

【種類】

Ａ：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、特段に優れた成果を挙げている個人又はグループ

Ｂ：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活躍を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手（42 歳以下）の個人又は若手で構成されるグループ

・受賞は上記 A、B 各 1 件の合計 2 件です。
・上記 A と B への重複推薦はできません。
・選考委員会にて受賞者を決定いたします。
・受賞者（受賞グループ）は、受賞年に開催される東北大学男女共同参画シンポジウム（秋に開催予定）で成果を発表していただきます。

【対象資格】

・東北大学の内外に関わらず、個人、グループが対象です。
・本賞に相応しい個人、グループを自薦・他薦できます。

【推薦方法】

以下の（１）～（４）を下記提出先まで郵便又はメールにて提出して下さい。

（１）推薦書（下記ホームページよりダウンロードして下さい。）

（２）受賞候補者について確認できる資料（個人の場合は略歴等、団体の場合

はパンフレット、紹介文等）

（３）成果資料等（成果が分かりやすい業績一覧表、代表的な論文、著書、報告書、活動内容などをまとめたものや成果資料等、形式自由）

（４）推薦理由書（形式自由）

東北大学男女共同参画委員会
東北大学男女共同参画推進センター

【応募書類提出先・お問合せ先】

東北大学総務企画部総務課総務係

〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1

電話番号：022-217-4811

メールアドレス：danjyo@grp.tohoku.ac.jp

ホームページ：http://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyo/

【注意事項】

・提出された書類等は原則として返却いたしません。

・後日参考資料の追加提出をお願いすることがあります。

【応募締切】

平成 28 年 7 月 29 日（金）

※郵送の場合は当日消印有効

【受賞課題発表】

平成 28 年 9 月 22 日（木）

東北大学における在籍教員・学生の女性比率

①主要部局における在籍教員の女性比率（教授・准教授・講師・助教）

各年度5月1日現在

部局名	平成26年度				平成27年度				平成28年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科・文学部	80	15	95	15.79%	79	15	94	15.96%	74	15	89	16.85%
教育学研究科・教育学部	32	4	36	11.11%	32	4	36	11.11%	29	4	33	12.12%
法学研究科・法学部	46	14	60	23.33%	45	15	60	25.00%	44	13	57	22.81%
経済学研究科・経済学部	53	8	61	13.11%	54	8	62	12.90%	54	9	63	14.29%
理学研究科・理学部	239	11	250	4.40%	235	8	243	3.29%	232	4	236	1.69%
医学系研究科・医学部	255	57	312	18.27%	255	59	314	18.79%	239	64	303	21.12%
歯学研究科・歯学部	79	19	98	19.39%	78	22	100	22.00%	79	24	103	23.30%
薬学研究科・薬学部	55	9	64	14.06%	55	9	64	14.06%	54	9	63	14.29%
工学研究科・工学部	336	14	350	4.00%	334	14	348	4.02%	332	12	344	3.49%
農学研究科・農学部	104	16	120	13.33%	109	18	127	14.17%	104	17	121	14.05%
国際文化研究科	33	5	38	13.16%	33	5	38	13.16%	33	7	40	17.50%
情報科学研究科	79	5	84	5.95%	83	7	90	7.78%	92	8	100	8.00%
生命科学研究科	66	8	74	10.81%	69	8	77	10.39%	71	7	78	8.97%
環境科学研究科	51	5	56	8.93%	48	5	53	9.43%	48	4	52	7.69%
医工学研究科	31	4	35	11.43%	32	4	36	11.11%	31	4	35	11.43%
教育情報学研究部	9	0	9	0.00%	8	1	9	11.11%	8	0	8	0.00%
金属材料研究所	121	5	126	3.97%	120	5	125	4.00%	117	7	124	5.65%
加齢医学研究所	56	5	61	8.20%	51	4	55	7.27%	53	5	58	8.62%
流体科学研究所	39	2	41	4.88%	40	1	41	2.44%	39	1	40	2.50%
電気通信研究所	66	1	67	1.49%	62	1	63	1.59%	65	1	66	1.52%
多元物質科学研究所	135	4	139	2.88%	131	4	135	2.96%	146	6	152	3.95%
災害科学国際研究所	58	11	69	15.94%	53	11	64	17.19%	50	11	61	18.03%
病院	269	46	315	14.60%	252	51	303	16.83%	253	49	302	16.23%
東北アジア研究センター	23	1	24	4.17%	22	1	23	4.35%	22	1	23	4.35%
高度教養教育・学生支援機構	61	12	73	16.44%	62	14	76	18.42%	73	20	93	21.51%
合計	2376	281	2657	10.58%	2342	294	2636	11.15%	2342	302	2644	11.42%

※　毎年5/1に行われる学校基本調査より男女共同参画委員が在籍する部局のみ抜粋（助手を除く）

（参考）文系、自然科学系別　女性比率（助手を除く）

部局名	平成26年度				平成27年度				平成28年度			
	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文系	253	46	299	15.38%	251	48	299	16.05%	242	48	290	16.55%
自然科学系	2039	222	2261	9.82%	2007	231	2238	10.32%	2005	233	2238	10.41%

※文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

②主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率

部局名		平成２５年５月１日現在 平成２５年度				平成２６年５月１日現在 平成２６年度				平成２７年５月１日現在 平成２７ 年度				平成２８年度			
		男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
文学研究科	教授	38	4	42	9.52%	41	4	45	8.89%	40	4	44	9.09%	38	4	42	9.52%
	准教授（助教授）	29	6	35	17.14%	27	6	33	18.18%	28	6	34	17.65%	28	7	35	20.00%
	講師			0	－			0	－			0	－			0	－
	助教	13	5	18	27.78%	12	5	17	29.41%	11	5	16	31.25%	8	4	12	33.33%
	助手			0	－	1		1	0.00%	1		1	0.00%	1		1	0.00%
	教員数（総数）	80	15	95	15.79%	81	15	96	15.63%	80	15	95	15.79%	75	15	90	16.67%
文学研究科　学生	学部	463	534	997	53.56%	448	529	977	54.15%	475	502	977	51.38%	474	484	958	50.52%
	修士（博士前期）	92	81	173	46.82%	96	77	173	44.51%	89	81	170	47.65%	81	76	157	48.41%
	博士（博士後期）	99	76	175	43.43%	97	72	169	42.60%	96	71	167	42.51%	102	73	175	41.71%
教育学研究科	教授	16	2	18	11.11%	16	1	17	5.88%	14	1	15	6.67%	12	1	13	7.69%
	准教授（助教授）	11	2	13	15.38%	11	2	13	15.38%	13	2	15	13.33%	13	3	16	18.75%
	講師			0	－			0	－			0	－	1		1	－
	助教	3	2	5	40.00%	5	1	6	16.67%	5	1	6	16.67%	3	0	3	0.00%
	助手			0	－			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）	30	6	36	16.67%	32	4	36	11.11%	32	4	36	11.11%	29	4	33	12.12%
教育学研究科　学生	学部	153	149	302	49.34%	150	158	308	51.30%	164	158	322	49.07%	156	155	311	49.84%
	修士（博士前期）	28	45	73	61.64%	26	50	76	65.79%	26	41	67	61.19%	31	44	75	58.67%
	博士（博士後期）	43	43	86	50.00%	38	42	80	52.50%	27	38	65	58.46%	27	27	54	50.00%
法学研究科	教授	24	5	29	17.24%	27	5	32	15.63%	28	5	33	15.15%	30	6	36	16.67%
	准教授（助教授）	16	8	24	33.33%	14	7	21	33.33%	11	7	18	38.89%	8	5	13	38.46%
	講師		1	1	100.00%		1	1	100.00%		1	1	100.00%	1	1	2	50.00%
	助教	6	1	7	14.29%	5	1	6	16.67%	6	2	8	25.00%	5	1	6	16.67%
	助手	1	3	4	75.00%	1	3	4	75.00%	0	2	2	100.00%	0	2	2	100.00%
	教員数（総数）	47	18	65	27.69%	47	17	64	26.56%	45	17	62	27.42%	44	15	59	25.42%
法学研究科　学生	学部	522	184	706	26.06%	530	189	719	26.29%	532	191	723	26.42%	524	211	735	28.71%
	修士（博士前期）	156	69	225	30.67%	144	35	179	19.55%	123	35	158	22.15%	117	29	146	19.86%
	博士（博士後期）	35	21	56	37.50%	31	15	46	32.61%	28	10	38	26.32%	26	9	35	25.71%
経済学研究科	教授	34	2	36	5.56%	32	2	34	5.88%	34	2	36	5.56%	34	2	36	5.56%
	准教授（助教授）	16	5	21	23.81%	18	6	24	25.00%	19	5	24	20.83%	16	4	20	20.00%
	講師	4		4	0.00%	3		3	0.00%	1	1	2	50.00%	2	1	3	33.33%
	助教			0	－			0	－			0	－	2	2	4	－
	助手		5	5	100.00%		5	5	100.00%		5	5	100.00%		4	4	100.00%
	教員数（総数）	54	12	66	18.18%	53	13	66	19.70%	54	13	67	19.40%	54	13	67	19.40%
経済学研究科　学生	学部	946	212	1158	18.31%	949	217	1166	18.61%	943	224	1167	19.19%	940	233	1173	19.86%
	修士（博士前期）	106	56	162	34.57%	97	62	159	38.99%	97	76	173	43.93%	116	112	228	49.12%
	博士（博士後期）	43	22	65	33.85%	41	22	63	34.92%	41	23	64	35.94%	38	20	58	34.48%
理学部・理学研究科	教授	73	1	74	1.35%	75	1	76	1.32%	75	1	76	1.32%	73	0	73	0.00%
	准教授（助教授）	75	2	77	2.60%	75	3	78	3.85%	75	3	78	3.85%	75	2	77	2.60%
	講師	7		7	0.00%	4		4	0.00%	5		5	0.00%	4		4	0.00%
	助教	87	7	94	7.45%	85	7	92	7.61%	80	4	84	4.76%	80	2	82	2.44%
	助手	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	4	1	5	20.00%
	教員数（総数）	245	11	256	4.30%	242	12	254	4.72%	238	9	247	3.64%	236	5	241	2.07%
理学部・理学研究科　学生	学部	1184	227	1411	16.09%	1192	220	1412	15.58%	1203	231	1434	16.11%	1195	219	1414	15.49%
	修士（博士前期）	493	85	578	14.71%	501	85	586	14.51%	487	95	582	16.32%	478	92	570	16.14%
	博士（博士後期）	255	29	284	10.21%	254	43	297	14.48%	244	43	287	14.98%	241	49	290	16.90%
医学部医学科・医学系研究科	教授	78	11	89	12.36%	76	12	88	13.64%	79	13	92	14.13%	77	12	89	13.48%
	准教授（助教授）	62	7	69	10.14%	64	7	71	9.86%	62	10	72	13.89%	57	10	67	14.93%
	講師	28	8	36	22.22%	27	7	34	20.59%	25	6	31	19.35%	17	7	24	29.17%
	助教	82	28	110	25.45%	88	31	119	26.05%	89	30	119	25.21%	88	35	123	28.46%
	助手	12	13	25	52.00%	14	11	25	44.00%	12	12	24	50.00%	11	13	24	54.17%
	教員数（総数）	262	67	329	20.36%	269	68	337	20.18%	267	71	338	21.01%	250	77	327	23.55%
医学部医学科・医学系研究科　学生	学部	643	106	749	14.15%	667	106	773	13.71%	689	114	803	14.20%	684	133	817	16.28%
	修士（博士前期）	85	84	169	49.70%	80	87	167	52.10%	82	99	181	54.70%	81	109	190	57.37%
	博士（博士後期・博士）	498	206	704	29.26%	491	197	688	28.63%	518	190	708	26.84%	536	183	719	25.45%
医学部保健学科	教授			0	－			0	－			0	－			0	－
	准教授（助教授）			0	－			0	－			0	－			0	－
	講師			0	－			0	－			0	－			0	－
	助教			0	－			0	－			0	－			0	－
	助手			0	－			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）			0	－			0	－			0	－			0	－
医学部保健学科　学生	学部	173	424	597	71.02%	179	413	592	69.76%	179	403	582	69.24%	165	420	585	71.79%
歯学部・歯学研究科	教授	19	1	20	5.00%	21	1	22	4.55%	20	1	21	4.76%	19	0	19	0.00%
	准教授（助教授）	9	1	10	10.00%	13	1	14	7.14%	13	1	14	7.14%	15	1	16	6.25%
	講師	9	1	10	10.00%	6	1	7	14.29%	7	1	8	12.50%	6	1	7	14.29%
	助教	39	15	54	27.78%	39	16	55	29.09%	38	19	57	33.33%	39	22	61	36.07%
	助手			0	－			0	－			0	－			0	－
	教員数（総数）	76	18	94	19.15%	79	19	98	19.39%	78	22	100	22.00%	79	24	103	23.30%
歯学部・歯学研究科　学生	学部	201	129	330	39.09%	205	129	334	38.62%	196	130	326	39.88%	179	134	313	42.81%
	修士（博士前期）	6	6	12	50.00%	5	12	17	70.59%	8	13	21	61.90%	6	11	17	64.71%
	博士（博士後期）	108	58	166	34.94%	115	51	166	30.72%	116	54	170	31.76%	106	54	160	33.75%
薬学部・薬学研究科	教授	18		18	0.00%	20		20	0.00%	20		20	0.00%	20		20	0.00%
	准教授（助教授）	12	3	15	20.00%	10	3	13	23.08%	11	3	14	21.43%	9	3	12	25.00%
	講師	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%	4	1	5	20.00%
	助教	25	5	30	16.67%	22	5	27	18.52%	21	5	26	19.23%	21	5	26	19.23%
	助手	3	3	6	50.00%	3	2	5	40.00%	3	3	6	50.00%	3	3	6	50.00%
	教員数（総数）	61	12	73	16.44%	58	11	69	15.94%	58	12	70	17.14%	57	12	69	17.39%
薬学部・薬学研究科　学生	学部（4年制＋6年制）	280	103	383	26.89%	277	103	380	27.11%	273	116	389	29.82%	258	123	381	32.28%
	修士（博士前期）	97	29	126	23.02%	87	33	120	27.50%	98	27	125	21.60%	105	26	131	19.85%
	博士（博士後期）	69	14	83	16.87%	64	16	80	20.00%	59	23	82	28.05%	63	23	86	26.74%

②主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率

部局名		平成２５年５月１日現在				平成２６年５月１日現在				平成２７年５月１日現在				平成２８年度			
		平成２５年度				平成２６年度				平成２７ 年度							
		男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
工学部・工学研究科	教授	111	1	112	0.89%	115	1	116	0.86%	110	1	111	0.90%	112	1	113	0.88%
	准教授（助教授）	96	2	98	2.04%	100	4	104	3.85%	107	4	111	3.60%	112	4	116	3.45%
	講師	1		1	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	助教	126	12	138	8.70%	119	9	128	7.03%	115	9	124	7.26%	106	7	113	6.19%
	助手	4	4	8	50.00%	4	3	7	42.86%	3	4	7	57.14%	3	6	9	66.67%
	教員数（総数）	338	19	357	5.32%	340	17	357	4.76%	337	18	355	5.07%	335	18	353	5.10%
工学部・工学研究科学生	学部	3278	415	3693	11.24%	3282	444	3726	11.92%	3280	458	3738	12.25%	3255	449	3704	12.12%
	修士（博士前期）	1351	156	1507	10.35%	1338	141	1479	9.53%	1334	160	1494	10.71%	1338	185	1523	12.15%
	博士（博士後期）	469	51	520	9.81%	474	54	528	10.23%	477	46	523	8.80%	475	56	531	10.55%
農学部・農学研究科	教授	39	2	41	4.88%	40	2	42	4.76%	35	2	37	5.41%	39	3	42	7.14%
	准教授（助教授）	39	4	43	9.30%	38	4	42	9.52%	41	4	45	8.89%	35	5	40	12.50%
	講師			0	-			0	-			0	-			0	-
	助教	25	9	34	26.47%	26	10	36	27.78%	33	12	45	26.67%	30	9	39	23.08%
	助手	5	1	6	16.67%	4	0	4	0.00%	3	0	3	0.00%	3	0	3	0.00%
	教員数（総数）	108	16	124	12.90%	108	16	124	12.90%	112	18	130	13.85%	107	17	124	13.71%
農学部・農学研究科　学生	学部	396	281	677	41.51%	381	288	669	43.05%	380	285	665	42.86%	398	263	661	39.79%
	修士（博士前期）	193	109	302	36.09%	161	106	267	39.70%	163	99	262	37.79%	155	120	275	43.64%
	博士（博士後期）	85	37	122	30.33%	80	36	116	31.03%	68	34	102	33.33%	58	26	84	30.95%
国際文化研究科	教授	21	4	25	16.00%	22	4	26	15.38%	21	4	25	16.00%	20	4	24	16.67%
	准教授（助教授）	14	3	17	17.65%	11	1	12	8.33%	12	1	13	7.69%	13	2	15	13.33%
	講師			0	-			0	-			0	-		1	1	-
	助教			0	-			0	-			0	-			0	-
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	35	7	42	16.67%	33	5	38	13.16%	33	5	38	13.16%	33	7	40	17.50%
国際文化研究科　学生	修士（博士前期）	20	54	74	72.97%	26	59	85	69.41%	25	45	70	64.29%	23	39	62	62.90%
	博士（博士後期）	21	40	61	65.57%	24	40	64	62.50%	22	41	63	65.08%	24	43	67	64.18%
情報科学研究科	教授	27		27	0.00%	32		32	0.00%	32		32	0.00%	31		31	0.00%
	准教授（助教授）	28	5	33	15.15%	27	4	31	12.90%	28	5	33	15.15%	28	5	33	15.15%
	講師	1	1	2	50.00%	0	1	1	100.00%	0	1	1	100.00%	0	1	1	100.00%
	助教	22	1	23	4.35%	20	0	20	0.00%	23	1	24	4.17%	33	2	35	5.71%
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	78	7	85	8.24%	79	5	84	5.95%	83	7	90	7.78%	92	8	100	8.00%
情報科学研究科　学生	修士（博士前期）	259	29	288	10.07%	262	29	291	9.97%	255	37	292	12.67%	253	46	299	15.38%
	博士（博士後期）	88	22	110	20.00%	85	23	108	21.30%	91	22	113	19.47%	104	20	124	16.13%
生命科学研究科	教授	25	1	26	3.85%	25	1	26	3.85%	24	2	26	7.69%	23	3	26	11.54%
	准教授（助教授）	16		16	0.00%	16		16	0.00%	16		16	0.00%	16		16	0.00%
	講師	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	助教	26	9	35	25.71%	23	7	30	23.33%	27	6	33	18.18%	30	4	34	11.76%
	助手	1		1	0.00%	1		1	0.00%	0		0	-	0		0	#DIV/0!
	教員数（総数）	70	10	80	12.50%	67	8	75	10.67%	69	8	77	10.39%	71	7	78	8.97%
生命科学研究科　学生	修士（博士前期）	140	48	188	25.53%	142	59	201	29.35%	133	61	194	31.44%	121	84	205	40.98%
	博士（博士後期）	57	26	83	31.33%	56	27	83	32.53%	57	20	77	25.97%	66	16	82	19.51%
環境科学研究科	教授	19		19	0.00%	19		19	0.00%	15	1	16	6.25%	15	0	15	0.00%
	准教授（助教授）	17		17	0.00%	20		20	0.00%	19		19	0.00%	17		17	0.00%
	講師			0	-		1	1	-		1	1	-		1	1	-
	助教	14	3	17	17.65%	12	4	16	25.00%	14	3	17	17.65%	16	3	19	15.79%
	助手	3	2	5	40.00%	3	2	5	40.00%	2	2	4	50.00%	1	3	4	75.00%
	教員数（総数）	53	5	58	8.62%	54	7	61	11.48%	50	7	57	12.28%	49	7	56	12.50%
環境科学研究科　学生	修士（博士前期）	166	42	208	20.19%	166	33	199	16.58%	180	29	209	13.88%	163	33	196	16.84%
	博士（博士後期）	76	24	100	24.00%	65	25	90	27.78%	19	24	73	32.88%	56	24	80	30.00%
医工学研究科	教授	17	1	18	5.56%	20	1	21	4.76%	21	1	22	4.55%	19	1	20	5.00%
	准教授（助教授）	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%	5	2	7	28.57%
	講師			0	-			0	-			0	-	2		2	-
	助教	3		3	0.00%	6	1	7	14.29%	6	1	7	14.29%	5	1	6	16.67%
	助手		1	1	100.00%		0	0	-		0	0	-		1	1	100.00%
	教員数（総数）	25	4	29	13.79%	31	4	35	11.43%	32	4	36	11.11%	31	5	36	13.89%
医工学研究科　学生	修士（博士前期）	67	17	84	20.24%	67	16	83	19.28%	67	7	74	9.46%	64	7	71	9.86%
	博士（博士後期）	34	5	39	12.82%	44	6	50	12.00%	45	6	51	11.76%	46	9	55	16.36%
教育情報学研究部・教育部	教授	4		4	0.00%	4		4	0.00%	3		3	0.00%	3		3	0.00%
	准教授（助教授）	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%	2		2	0.00%
	講師			0	-			0	-			0	-			0	-
	助教	3		3	0.00%	3		3	0.00%	3	1	4	25.00%	3	1	4	25.00%
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	9	0	9	0.00%	9		9	0.00%	8	1	9	11.11%	8		8	0.00%
教育情報学研究部・教育部　学生	修士（博士前期）	11	16	27	59.26%	8	16	24	66.67%	8	17	25	68.00%	7	22	29	75.86%
	博士（博士後期）	17	6	23	26.09%	15	8	23	34.78%	18	7	25	28.00%	17	8	25	32.00%
金属材料研究所	教授	26		26	0.00%	28		28	0.00%	30		30	0.00%	28		28	0.00%
	准教授（助教授）	36	2	38	5.26%	34	2	36	5.56%	34	2	36	5.56%	31	3	34	8.82%
	講師	1		1	0.00%	2		2	0.00%	3		3	0.00%	2		2	0.00%
	助教	53	5	58	8.62%	57	3	60	5.00%	53	3	56	5.36%	56	4	60	6.67%
	助手	4	1	5	20.00%	6	1	7	14.29%	5	2	7	28.57%	3	3	6	50.00%
	教員数（総数）	120	8	128	6.25%	127	6	133	4.51%	125	7	132	5.30%	120	10	130	7.69%
加齢医学研究所	教授	18	1	19	5.26%	19	2	21	9.52%	19	2	21	9.52%	15		15	0.00%
	准教授（助教授）	10	1	11	9.09%	11	0	11	0.00%	9	0	9	0.00%	12	1	13	7.69%
	講師	4		4	0.00%	3	0	3	0.00%	3	0	3	0.00%	0	0	0	#DIV/0!
	助教	21	5	26	19.23%	23	3	26	11.54%	20	2	22	9.09%	12		12	0.00%
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	53	7	60	11.67%	56	5	61	8.20%	51	4	55	7.27%	39	1	40	2.50%

②主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率

部局名		平成２５年５月１日現在				平成２６年５月１日現在				平成２７年５月１日現在				平成２８年度			
		平成２５年度				平成２６年度				平成２７ 年度							
		男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率	男性	女性	計	女性比率
流体科学研究所	教授	15		15	0.00%	15		15	0.00%	15		15	0.00%	23		23	0.00%
	准教授（助教授）	9	1	10	10.00%	10	1	11	9.09%	11	1	12	8.33%	19		19	0.00%
	講師	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	0	1	0.00%			0	-
	助教	14		14	0.00%	13		13	0.00%	13		13	0.00%	23	1	24	4.17%
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	39	2	41	4.88%	39	2	41	4.88%	40	1	41	2.44%	65	1	66	1.52%
電気通信研究所	教授	24		24	0.00%	24		24	0.00%	22		22	0.00%	18	2	20	10.00%
	准教授（助教授）	20		20	0.00%	18		18	0.00%	19		19	0.00%	7	0	7	0.00%
	講師			0	-			0	-			0	-	4	0	4	0.00%
	助教	23	1	24	4.17%	24	1	25	4.00%	21	1	22	4.55%	24	3	27	11.11%
	助手			0	-			0	-			0	-			0	-
	教員数（総数）	67	1	68	1.47%	66	1	67	1.49%	62	1	63	1.59%	53	5	58	8.62%
多元物質科学研究所	教授	42	1	43	2.33%	43	1	44	2.27%	41	1	42	2.38%	45	2	47	4.26%
	准教授（助教授）	29		29	0.00%	32		32	0.00%	30		30	0.00%	28		28	0.00%
	講師	4		4	0.00%	2		2	0.00%	4		4	0.00%	7		7	0.00%
	助教	53	3	56	5.36%	58	3	61	4.92%	56	3	59	5.08%	66	4	70	5.71%
	助手			0	-			0	-			0	-	2		2	-
	教員数（総数）	128	4	132	3.03%	135	4	139	2.88%	131	4	135	2.96%	148	6	154	3.90%
災害科学国際研究所	教授	22	0	22	0.00%	23	0	23	0.00%	20	0	20	0.00%	21	0	21	0.00%
	准教授（助教授）	10	2	12	16.67%	11	3	14	21.43%	12	3	15	20.00%	10	4	14	28.57%
	講師	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%	1	1	2	50.00%
	助教	17	5	22	22.73%	23	7	30	23.33%	20	7	27	25.93%	18	6	24	25.00%
	助手	3	1	4	-	3	1	4	-	3	1	4	-	2	1	3	-
	教員数（総数）	53	9	62	14.52%	61	12	73	16.44%	56	12	68	17.65%	52	12	64	18.75%
病院	教授	6	0	6	0.00%	4	0	4	0.00%	4	0	4	0.00%	4	0	4	0.00%
	准教授（助教授）	12	4	16	25.00%	15	3	18	16.67%	15	3	18	16.67%	14	2	16	12.50%
	講師	58	6	64	9.38%	54	6	60	10.00%	56	5	61	8.20%	55	5	60	8.33%
	助教	197	37	234	15.81%	196	37	233	15.88%	177	43	220	19.55%	180	42	222	18.92%
	助手	19	24	43	-	26	24	50	-	35	30	65	-	30	35	65	-
	教員数（総数）	292	71	363	19.56%	295	70	365	19.18%	287	81	368	22.01%	283	84	367	22.89%
東北アジア研究センター	教授	11	0	11	0.00%	11	0	11	0.00%	10	0	10	0.00%	10	0	10	0.00%
	准教授（助教授）	6	0	6	0.00%	6	0	6	0.00%	6	0	6	0.00%	6	0	6	0.00%
	講師	0	0	0	-	0	0	0	-	0	0	0	-	0	0	0	-
	助教	5	1	6	16.67%	6	1	7	14.29%	6	1	7	14.29%	6	1	7	14.29%
	助手	0	0	0	-	0	0	0	-	0	0	0	-	0	0	0	-
	教員数（総数）	22	1	23	4.35%	23	1	24	4.17%	22	1	23	4.35%	22	1	23	4.35%
高度教養教育・学生支援機構	教授					21	2	23	8.70%	23	3	26	11.54%	24	5	29	17.24%
	准教授（助教授）					15	4	19	21.05%	15	3	18	16.67%	21	5	26	19.23%
	講師					11	3	14	21.43%	12	5	17	29.41%	15	7	22	31.82%
	助教					14	3	17	17.65%	12	3	15	20.00%	13	3	16	18.75%
	助手					1	5	6	83.33%	1	4	5	80.00%	0	4	4	100.00%
	教員数（総数）					62	17	79	21.52%	63	18	81	22.22%	73	24	97	24.74%
合計	教授	727	37	764	4.84%	773	40	813	4.92%	755	44	799	5.51%	753	46	799	5.76%
	准教授（助教授）	579	60	639	9.39%	603	63	666	9.46%	613	65	678	9.59%	597	68	665	10.23%
	講師	124	20	144	13.89%	121	23	144	15.97%	125	23	148	15.54%	125	27	152	17.76%
	助教	857	154	1011	15.23%	879	155	1034	14.99%	849	162	1011	16.02%	867	162	1029	15.74%
	助手	58	59	117	50.43%	70	58	128	45.31%	71	66	137	48.18%	63	76	139	54.68%
	教員数(助教・助手含む)	2345	330	2675	12.34%	2446	339	2785	12.17%	2413	360	2773	12.98%	2405	379	2784	13.61%
	教員数(助手除く)	2287	271	2558	10.59%	2376	281	2657	10.58%	2342	294	2636	11.15%	2342	303	2645	11.46%
	教員数(助教・助手除く)	1430	117	1547	7.56%	1497	126	1623	7.76%	1493	132	1625	8.12%	1475	141	1616	8.73%
	学部生	8239	2764	11003	25.12%	8260	2796	11056	25.29%	8314	2812	11126	25.27%	8228	2824	11052	25.55%
	修士(博士前期)	3270	926	4196	22.07%	3206	900	4106	21.92%	3175	922	4097	22.50%	3139	1035	4174	24.80%
	博士(博士後期)	1997	680	2677	25.40%	1974	677	2651	25.54%	1926	652	2608	25.00%	1985	640	2625	24.38%

※　毎年5/1に行われる学校基本調査より男女共同参画委員が在籍する部局のみ抜粋

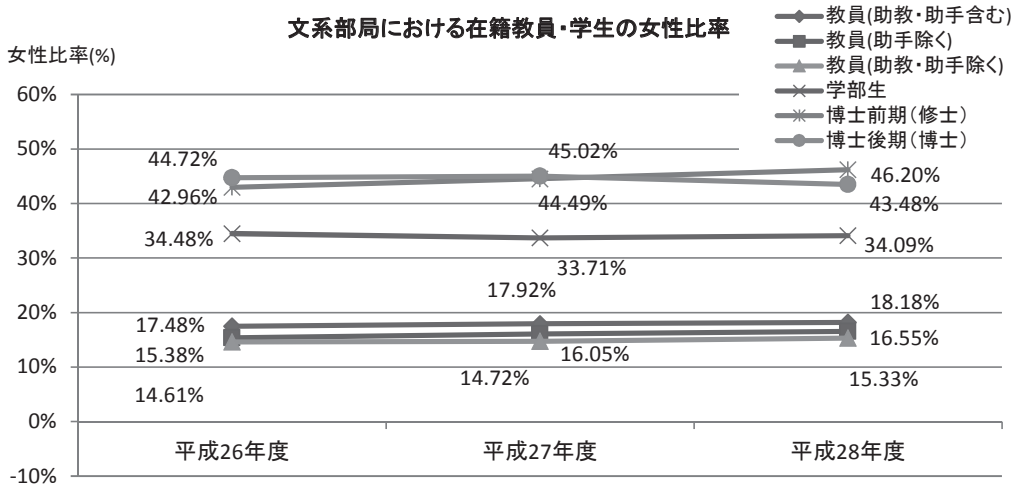
（参考）文系、自然科学系別女性比率

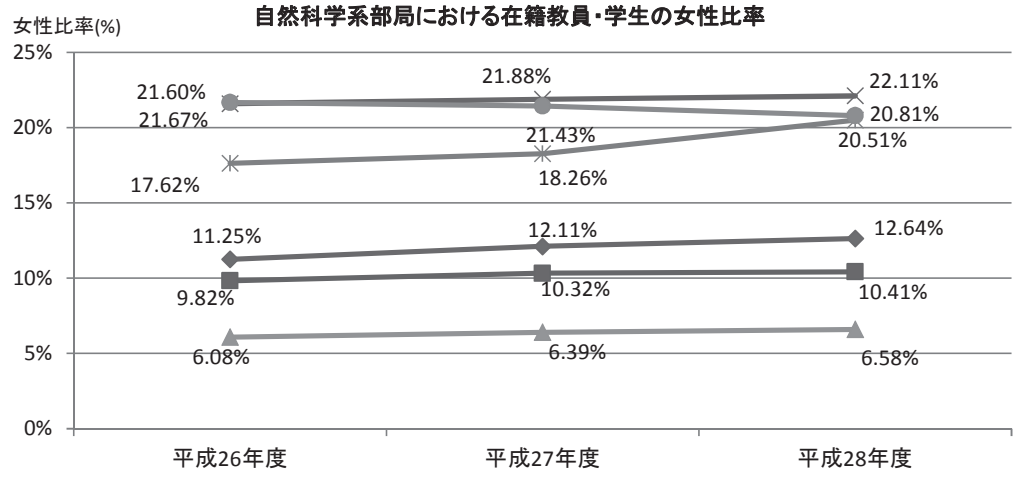
文系	教授	137	17	154	11.04%	142	16	158	10.13%	140	16	156	10.26%	137	17	154	11.04%
	准教授（助教授）	88	24	112	21.43%	83	22	105	20.95%	85	21	106	19.81%	80	21	101	20.79%
	講師	4	1	5	20.00%	3	1	4	25.00%	1	2	3	66.67%	4	3	7	42.86%
	助教	25	8	33	24.24%	25	7	32	21.88%	25	9	34	26.47%	21	8	29	27.59%
	助手	1	8	9	88.89%	2	8	10	80.00%	1	7	8	87.50%	1	6	7	85.71%
	教員数(助教・助手含む)	255	58	313	18.53%	255	54	309	17.48%	252	55	307	17.92%	243	54	297	18.18%
	教員数(助手除く)	254	50	304	16.45%	253	46	299	15.38%	251	48	299	16.05%	242	48	290	16.55%
	教員数(助教・助手除く)	229	42	271	15.50%	228	39	267	14.61%	226	39	265	14.72%	221	40	261	15.33%
	学部生	2084	1079	3163	34.11%	2077	1093	3170	34.48%	2114	1075	3189	33.71%	2094	1083	3177	34.09%
	修士(博士前期)	413	321	734	43.73%	397	299	696	42.96%	368	295	663	44.49%	375	322	697	46.20%
	博士(博士後期)	258	208	466	44.64%	246	199	445	44.72%	232	190	422	45.02%	234	180	414	43.48%
自然科学系	教授	579	20	599	3.34%	599	22	621	3.54%	582	25	607	4.12%	582	24	606	3.96%
	准教授（助教授）	485	36	521	6.91%	499	37	536	6.90%	507	41	548	7.48%	490	42	532	7.89%
	講師	120	19	139	13.67%	107	19	126	15.08%	112	16	128	12.50%	106	17	123	13.82%
	助教	827	145	972	14.92%	834	144	978	14.72%	806	149	955	15.60%	827	150	977	15.35%
	助手	57	51	108	47.22%	67	45	112	40.18%	69	55	124	44.35%	62	66	128	51.56%
	教員数(助教・助手含む)	2068	271	2339	11.59%	2106	267	2373	11.25%	2076	286	2362	12.11%	2067	299	2366	12.64%
	教員数(助手除く)	2011	220	2231	9.86%	2039	222	2261	9.82%	2007	231	2238	10.32%	2005	233	2238	10.41%
	教員数(助教・助手除く)	1184	75	1259	5.96%	1205	78	1283	6.08%	1201	82	1283	6.39%	1178	83	1261	6.58%
	学部生	6155	1685	7840	21.49%	6183	1703	7886	21.60%	6200	1737	7937	21.88%	6134	1741	7875	22.11%
	修士(博士前期)	2857	605	3462	17.48%	2809	601	3410	17.62%	2807	627	3434	18.26%	2764	713	3477	20.51%
	博士(博士後期)	1739	472	2211	21.35%	1728	478	2206	21.67%	1694	462	2156	21.43%	1751	460	2211	20.81%

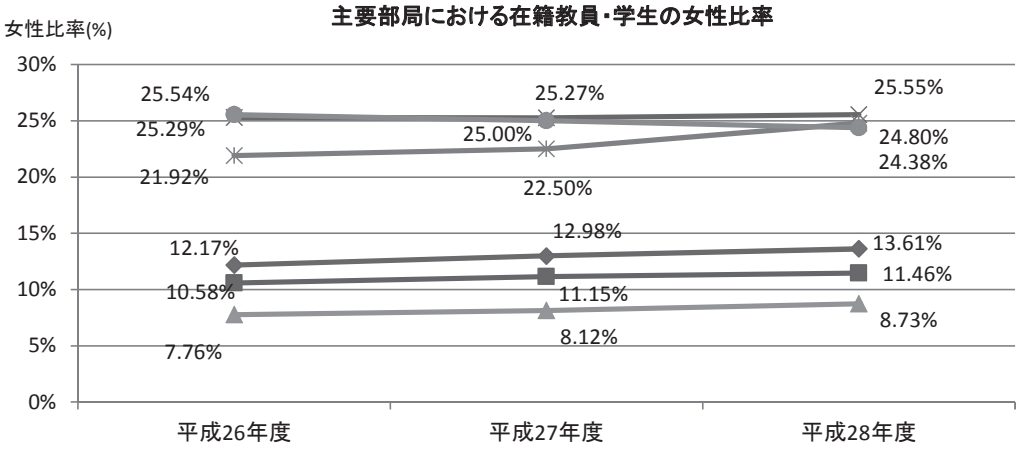
※文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、加齢医学研究所、病院の合計値。

③主要部局における職種別在籍教員・学生の女性比率（グラフ）







※ 男女共同参画委員が所属する部局のみ抜粋
※ 文系は、文学研究科・文学部、教育学研究科・教育学部、法学研究科・法学部、経済学研究科・経済学部、国際文化研究科、教育情報学研究部の合計値

※自然科学系は、理学研究科・理学部、医学系研究科・医学部、歯学研究科・歯学部、薬学研究科・薬学部、工学研究科・工学部、農学研究科・農学部、情報科学研究科、生命科学研究科、環境科学研究科、医工学研究科、金属材料研究所、加齢医学研究所、流体科学研究所、電気通信研究所、多元物質科学研究所、災害科学研究所、病院の合計値。

東北大学男女共同参画委員会報告書（平成 28 年度）

【編集・発行】
東北大学男女共同参画委員会　行動指針対応・報告書作成 WG

【問い合わせ先】
東北大学総務企画部総務課総務係
〒980-8577　仙台市青葉区片平 2-1-1
TEL：022-217-4811